
灰色の世界

若桜モドキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰色の世界

【Nコード】

N7617X

【作者名】

若桜モドキ

【あらすじ】

人間が色を『奪われた』時代。

謎の絵本を持つ主人公は、謎の青年と旅に出た。

（倉庫のような自サイトにもありません）

序章 イカイノエホン

——さあ、世界を紡ぎましょう。

——神様は人間を見捨てた。

——世界に神様はもういない。

——この絵本が世界だから、持ち主のあなたが神様。

一心不乱。

それだけが『自分を包む世界の全て』になったように、何度も、何度でも飽きを知らずに読み返し続ける。時刻は夕暮れ。少しお腹がすいた気がしたけど、無視した。

いつ、どこで手に入れたのか覚えていない絵本。

知らない間に部屋にあった、という言葉が一番よく似合う遭遇だった。

実際、こんな本を売っている店は世界のどこにも無いと思う。

内容が、この世界の人々が守ってきた『理』を、これでもかと無視しているから。

——神様は人間を見捨てた。

自分以外、世界中の誰もが異常なくらいに反応しそうなポイント。この世界を司り、すべての命を愛している『神様』が、その神様を一番愛して敬ってきた人間を見捨てるなんてありえない。冗談でも口にしていいことじゃない、という事らしい。

要するにプライドの問題。それじゃないなら崇めているのは神様じゃなくて、最終的には自分達という凄まじいレベルの自画自賛。ナルシストもいい加減にした方がいいよって、思う。

どうせ神様なんて最初から世界のどこにもいないよ、とも思う。思うだけ。いつもバカだ何だと言われているけど、本音は心の奥底で思うだけで声に出さない程度には賢い。

そろそろお父さんとお母さんが帰ってくる。煩くなるから絵本を隠さないと。

異界の言葉で書かれた、この絵本が大好きだった。

だから捨てられないように、いつもの場所に隠しに向かう。
家の外。庭の隅っこにある小さな小屋。

大人が入れない屋根裏に隠す。

「……」

外に出た瞬間、山の向こう側へ沈み行く夕日が見えた。
ようやく退屈な一日が終わった事を、知った。

一章 イロヲシルモノ

退屈で仕方が無い日々。

誰もが勤勉に励み、休日は神への祈りで終わる。貴族や金持ちはともかく王族でさえ過度の贅沢はせず、神のためという名目で貧しいものに分け与える。

確かに貧富の差はあった。けれどその日を生きられぬほど貧しい人はいない。

——なんて平等で、平穏で、温かい世界なのだろう。

両親により参加を強制されている、教会礼拝で連呼される言葉。込み上げるあくびをこらえるのにも限界があった。

体調が悪いといってサボりたいけど、三回連続はさすがにマズい。どこが平等なのか神様とやりに尋ねたい。自分からすると何一つ平等じゃない。だってこの町には現在進行形で虐げられている子供が一人いる。ちっとも平等じゃないよ。

「おい、外から薪を取ってこい。それくらいできるだろう」

偉そうに命令するのは『お父さん』。

ヒゲをビッシリと生やしていて、仕事はマジメにこなしているらしい。

けど、家でお酒を飲んだらすぐボクを殴る。

この世界で三番目に大嫌い。

「ああ、それが終わったら庭の花に水をやってね。いくらあんだでもできるでしょ？」

偉そうに命令するのは『お母さん』。料理は上手だし裁縫も得意だけど、雑用を筆頭に自分のキャラクターってヤツに合わない事は全部ボクに押し付ける。この世界で二番目に大嫌い。

二人への感謝なんて持っていない。まあ、ボクという存在をこの世界に生み出してくれた事に関する、感謝めいた思いはあると思うけど……でもそれだけ。子供としての感謝は無い。

早く大きくなりたかった。こんな人達とは、一分一秒だって一緒にいたくない。

同じ空間の空気を吸っていたくない。

虫唾が走るって……きつと、こういう感覚の事を言うんだろう。

僕に優しくかった死んだおじいちゃんやおばあちゃんは、二人の馴れ初めについて面白い事を話してくれた。なんと、恋愛でも見合いでもなく、『お告げ』で結婚したらしい。

ばっかみたい。その果てに生まれたのが自分だと思つて涙が出てきそうだ。

あいつらなんて『夫婦』という呼び名程度でいい。あれを『親』に分類するのは、過去現在未来に存在する『本当の親』に対するこの上ない侮辱であり、死より惨く耐え難い屈辱だ。

だが、同時に納得した。

神様の下僕である二人だからこそお告げに従つて結婚し、でも恋愛感情なんてあつてないようなものだから、形式的に設けた子供——ボクの事はどうでもいい。

とてもわかりやすい思考回路。なんて醜悪なんだろう。殺したいくらいだ。

でも、そんな二人でさえ『三番目』と『二番目』。上には上がいる。

——世界で一番大嫌いなのは『神様』。

平等とか平穏とか言うだけ言つて、結局この世界を見捨てた最悪の人。

実際に会えたら顔形が変わるくらいブン殴つてやる。

そのためにもボクは早く、ボクが望む大人になりたい。

ボクが望む『大人』。

とりあえず酒に溺れて子供を殴つたり、自分に似合わないと言う理由で雑用を子供に押し付ける最低最悪の『大人』じゃない。あんな子供でもやら——ない事は無いか。

最近の子供って怖いね、と自分も『子供』のクセして思つてみる。

旅人にはよく間違えられるけど、それでもボクは十二歳になったばかりだ。あの『夫婦』のせいで自分から何でもやってきたからか、よく『小柄な十五歳』と間違えられている。

大人びて見えるのかなあ、とかは思わない。むしろ老けて見える事にぞつとした。ちなみに十七歳で成人とみなされるから、まだ十二歳のボクは五年後より先を思うと泣きたくなつた。

はあ、と漏れるため息。井戸から汲んだ水をせつせと運ぶ。庭の花に水をまき、小屋に積まれた薪を取ってくるついでに、屋根裏に隠してある『あの絵本』を取りに行く。

今夜からあの『夫婦』はしばらく遠くに出かける。

それは一カ月後に年に一度の重要な式典——『礼拝日』が来るからだった。

その日は世界各地から『聖都』に人が来る。この町から『聖都』まで一番早い馬車を使ったら二週間弱。でも貧乏人にそんな事はできず、つまり徒歩で行くから往復で二ヶ月。

そしてよほどの事情が無い限り滞在は一ヶ月以上になってしまうから、三ヶ月はのんびりやりたい放題だった。この三ヶ月ほど『神様』という存在に感謝する時は無い。

神様というよりもその狂信的な信者に感謝している、とも言うが。ちなみに『聖都』とはこの世界の首都的存在。

ボクの町が属する小国を含め、この世界には常時五個前後の『国家』と呼ばれる集まりが存在しているけれど、その頂点かつ中心に立っていて、いつの時代も人々から崇め奉られているのが『聖都』という、話に聞く限りはさほど大きくはないごく普通の町だった。

人々は年に一度、決まった日に降臨すると言われる『神様』への謁見を願い、ただ遠いだけで観光地でも産業地でもない町に、何ヶ月も費やして出かけていくのだった。

水をまきながら家の中を窺う。ボクに雑用を押し付けた『夫婦』は、楽しみに旅行の準備をしているようだった。今年はお金を溜めたから、向こうで祈祷してもらおうらしい。

無論、祈祷される中にボクは入らない。

入るわけが無い。入っても困る。信じてもないどころか、殴りたいと思っっているやつに祝福されても、憎しみがさらに強くなってしまうだけだ。ついでに惨めになるだけ。

早く出かけないかな。そう願いながらさつさと水遣りを終える。

次は絵本を回収しつつ薪を運ぶ。

水遣りはぶつちやけどうでもいいから適当だけど、薪に関しては今後の生活にも関わるのでマジメに。たくさん運んだら少しだけ夜が楽になるから、ちゃんと頑張らないと。

早く出発しないかな、あの二人。

人前では『お父さん』『お母さん』と、笑いそうになるくらい白々しい言葉で呼んでいるけれど、本当にそう思ったのは物心がついた直後の、ほんの僅かな時間だけ。

以降は心の中でのみ『夫婦』と呼んでいる。夫婦の『夫』と『妻』。向こうがボクを『自分の子供』と認識しないのならば、こちらも相手を『自分の親』と思わないだけの事。

ガキっぽい対抗心。でもおかげで気は楽になった。

親と思えないやつを親と扱って、自分への処遇に傷つくから苦しいんだ。

相手を親と思わなければ傷つかない。作っておきながら親にもなれなかったバカ二人を心の中で思う存分に蔑み、嘲笑できるようになつて逆に楽しい。

反面教師。ああなつてはいけない、という失敗作サンプルが目の前にいる。

いつか自分と自分の子供の役に立つ存在。

そう思えばあんなのでも暮らしてやるだけの価値はあると思えた。これでもかなり妥協している。もちろんボクが一步も二歩も譲っている。

きつと、十五——成人となる十七になる前に、ボクはこの町を出て行くだろう。

気に入らない連中と一緒にいる事ほど、精神に悪い事はないと思っ
ている。

夜。

正確には夜中。

満月が空高く上っていて、少しだけ肌寒くなってきた頃合。

ボクは暖炉に薪を放り込み、その前で自分専用の毛布に包まっていた。思った以上に寒かったから暖炉の前で寝るつもりで、傍らにはあの絵本をちゃんと持ってきておいた。

まあ、要するにもう『夫婦』は出発している。

夕飯を食べてすぐに、一緒に『聖都』に向かう近所のおじさんやおばさんと一緒に。

子供がいる家で大人がいないのはボクの家だけだ。

友達と呼んでもいい程度に親しい子供は羨ましがっていた。でも羨む理由はボクのそれとは別というか、ボクからすると大笑いしたくなる『子供らしい』内容だったけど。

まあ、理由が違うのは仕方がない。親への思いが根本的に違うのだから。

ボクは人前では波風を立てぬよう親と呼んでいる『夫婦』の事を、いつも『鬱陶しくて邪魔で存在そのものを認めたくない空気みたいなモノ』として扱っている。

他の子供達はボクとまったく違っている。時と場合によっては似たような扱いをしたくなるかもしれないけど、それはあくまでも一時的に感じている風邪みたいな思い。

四六時中、それこそ夢の中でも『鬱陶しい』『邪魔』『消えてしまえ』と思っているボクからしたら足りないくらいだ。密度も重さも存在感も。すべてが絶望的なほどに足りていない。

だから彼らは大人になっても……年老いて死の間際になっても、ボクの気持ちなど理解する事はできないだろう。理解できるとすれば、それは心の底から『親』を憎んだ瞬間に。

「ふぁむ……」

あくびが漏れて視界が潤む。

そろそろ寝よう。明日もいろいろと早いから。数年後——もしかしたら来年は、この時期を利用して独り立ちという名の『家出』とかしていそうな予感がずつとしている。

お金さえあれば今年中には、いつそ今すぐにでも決行したかった。出て行きたいなあ、違う場所に行きたいなあ。

そんな事をぼんやり思いながら、ボクは視界を閉ざしていった。毛布で身体をすっぽりと覆い隠して、イモムシみたいにごろんとカーペットを敷いた床に横たわる。

ぱちぱちという薪が燃えていく音を聞いていると、睡魔がすぐによってきた。

ボクは大人しく身を委ねて、ゆったりと夢の世界へ落ちていく。意識がふわりと消えていく瞬間は、間もなく訪れた。

「――」

誰か、が。

「――」

近くに、いる？

「――よ」

煩いな。静かにしてよ。

「は――よ」

ボクはもう寝るんだから。ほつといて。邪魔するな。

「おき――色を」

「煩い……っ」

本で殴るぞ！ と叫ばなかった自分を少しだけ褒めた。

無論、殴る道具となっていたかもしれない『本』とは例の絵本。表紙が硬いので角を使うと武器として使える程度に痛いはず。

そもそも『本で殴るぞ！』と叫ばなかったのは、『声』は夢だと思っていたから。夢につっこみいれるだけでもヤバそうなのに、『本で殴るぞ！』なんてもつとヤバいと思った。

だけど現実だった。

目が覚めると、目の前に見覚えが無い人がいた。

「ああ、ようやく目覚めてくれた。おはよう」

「おは……よう？」

そこには町のお姉さん達がうつとりしそうな美青年がいた。

寝入りかけのところを起こされたから『おはよう』といえる時間じゃないけど、彼におはようと言われたので、つられるようにしてこっちもおはようと返す。

ただし、いろいろと変なので疑問符つきで。

顔のつくりは美青年。しかも好青年。男の人でも振り返りそうな凄美形。

問題はボクの目の前に、というか『家中』にいる事。

だから美青年だけど、好青年なんだけど、ボクはこいつを『不審者』とみなす。

相手との体格的な差があるので大人しくして、隙を見て殴るか逃げるかしてやろう。

「はじめまして、『色を知る者』……ようやく出逢えたね」

ボクの決意など知らない彼はにつこりと微笑んでくれた。温和な顔つきは微笑みを浮かべるためだけに生きていると思うほど、目を細めた仮面のような笑みを浮かべている。

髪は全体的に短く整えられているみたいだった。

前髪だけが真ん中で分けないと顔が全部隠れそうなほど長い。肩周りが見せ付けるように露出していて、上半身に限れば身体のラインがよくわかるぴっちりした服を着ていた。

足首できゅっと絞っただばのズボンに、シンプルなブーツ。変に装飾の類が無いから動きやすそうに見えるけど、どう頑張っても『旅人』とか『商人』に見えない。

全体的にちよつと、かなり、壮絶に変わっている格好、としか言えない格好だった。

もはや怪しいなんてもんじゃなかった。こいつは『危険』だ。と

いつても、真夜中に他人の家に入り込んでいる時点で、怪しいとか危険とかいう状況を余裕で超越しているけれど。

でもまあ、そんな事を思いながらボクは結構落ち着いていた。

いや、当たり前だけど頭の中が混乱して、何をどうするか決めかねている。

……叫ぶべきか、逃げるべきか、戦うべきか。

「ちよつと質問をしていいかな？」

にこにこー、と笑いながら、彼は子供に話しかけるように言う。

こっちは臨戦態勢に近いというのに、未だ名前を覚えてくれない怪しいヤツ。

何をしにきたのか、さっぱりわからなかった。

「空、血、葉、太陽は『何色』？」

……は？

この人、このお兄さん。今、なんて言った？

空とか血とか……なんでそんな事を訊くんだろう。

だって『誰だって知ってる』じゃないか。世界の常識だ。

このお兄さんはそれが常識になる前にお亡くなりになった人——要するに俗にいうユーレイさんの存在で、今になってどうしても気になったから訊きにきたのかな。

……いや、自分で思ってたんだけどそれは嫌だ。ボクはユーレイとか苦手だし。

「空は『青』、血は『赤』、葉は『緑』、太陽は『橙』……それが何？」

律儀に答えてやる事も無いのに……我ながら呆れる対応だった。

そっちの正体を言わないなら答えてやらない、くらいの脅しは言えないものか。

ちよつと自分の育成方法を間違えた。

「なるほどね。……いや、もしかすると尋ねる人を間違えたかと思つてね。試すような事を言つて申し訳ない。機嫌を直してくれると嬉しいな」

にここー、とやっぱり無気味に笑う男。尋ねるとか試すとか、何の事だろう。

……っていうか誰なの、こいつ。

ありえないくらい不審人物だ。危険だ危険だ。

よし、とりあえずボコボコに殴ろう。変な事も危ない事もできないくらい。

骨の一本や二本へし折ってやっても、きっと正当防衛って事になる。ボクは絵本を掴む手に力を込めた。絵本だからって甘く見るなよ。絵本でも角で殴れば絶対に痛い。

「キミは……かわいいそうな子だね」

いきなり哀れまれた。何様だコノヤロウ。ただ、目つきとか言い方とか声の感じがどうにも引つかかる感じだったから、とりあえず『問答無用で殴る』という選択肢はやめた。

「キミは迷う事無く私の質問に答えたね。そしてその絵本を持っていた。だからこそキミは生まれながらに『悲劇』を背負っているんだ。その証こそ『色を知る』という事」

「……色を、知る？」

「そう。キミは空が『青』で血が『赤』で葉が『緑』で太陽が『橙』と言い切った。だが少し考えてみるといい。……誰がそれをキミに『教えてくれた』のだろう。私の考えや予測がただしければ、そんな事は『誰も言っていない』と思うのだけど」

「……」

そんな事はない。はつきりと言い返せばいい。

バカじゃないの？ と、蔑んだ目を向けてやればいい。

こいつは危ない。危険だ。危険すぎる。脳内が完璧にイってしまっている。ボクだって人の事をあれこれ言えるほどマトモじゃないけど、ここまで酷くはないと思っていたい。

だけど。

「あれ……？」

記憶を掘り返す。そのたびに疑問が生まれる。

そこに在るべき『答え』が、その断片すらも見つかからない焦り。
空が『青』で血が『赤』で葉が『緑』で太陽が『橙』。

……ねえ、どこの誰がそれをボクに教えてくれたんだっけ？

よし、一つ一つじっくり考えてみよう。まずは『色』。思いつく限りだと、色といえば『髪の色』『目の色』『肌の色』『空の色』『葉の色』『花の色』以下略。まあ、こんなところ。

でも何か違う。彼が言っている『色』と、ボクが今思いつくままに並べた『色』達は、言葉の響きとかが似ているだけで、向かっている方向もよく似ていて、でも根本的に何かが違う。

何が、どこが、どれが。考えても分からない。

ボクが無言で悩んでいると、青年はボクの手から絵本をそっと取り上げた。

「では質問。……これの『色』は？」

彼が指差したのは絵本の中に描かれた絵。美味しそうな果物・リンゴ。この質問ではつきりとわかった。やっぱりこの人はボクをバカにしているんだ。

話が終わったら殴ろう。それからお隣のおじさんやお兄さんと呼ぼう。

「リンゴの『色』は……『赤』だよ」

「正解。まあ、キミなら答えられると思っていたよ。だってキミは『色を知る者』だし」

またその単語。色を知る者。意味がちつとも理解できない。

とりあえずバカにされていると解釈する。

早く絵本返してくれないかな。

「それじゃ……この部屋から『リンゴと同じ色』を探してごらん」
「は？」

「それできつと、私が言いたい事をスムーズに理解できるよ」

意味深に笑うだけの青年にむっとしつつ、絵本が無い以上何もできないので、大人しく部屋の中をジーっと見て回る。座っていたらよく見えないので、毛布を羽織ったまま立ち上がる。

後から花瓶で殴ればいいのに、と思ったけれどさすがにそれはマズそうだし、この人はたぶん大人しく殴られてくれるタイプじゃないと思う。事態の好転どころか、余計悪化しそうだ。

リンゴの『色』、リンゴの『色』、リンゴ……。

あんな質問をしてきたんだからこの部屋にあるはずだ。探せ、探せ……うーん。

しばらくウロウロする。毛布を引きずりながら、背伸びしながら、普段なら見向きもしないような隅っこまで。とにかく今いる部屋のあちこちを目が痛くなるくらい凝視した。

でも、見つからない。ただの『リンゴと同じ色』なのに。

別に変な『色』を探せといわれたわけじゃないのに。

小物が多いこの部屋の中で、『リンゴと同じ色』だけが欠落していた。

しばらくして、時間切れ、と青年が言う。ボクは大人しく彼の傍に戻った。

「私が見つけて欲しかったのは、この『色』だよ」

そう言って、彼は自分の髪を摘んだ。

彼は自分の『髪の色』が、絵本のリンゴと同じ『色』と言った。

——ぐんにやり、と腰が抜けそう。というかもう抜けた。立てない。

気が付かなかった。ボクと彼はあんな近くにいた。だけどボクは、彼の髪と見慣れたあのリンゴが『同じ色』だなんて思いもしなかった。言われた今でも『そう思えない』自分がいた。

気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。

ガタガタと震え出した身体はボクの心の表れ。心も感情もグラグラだった。

土台とか基礎工事なんて全部吹っ飛んだ。

あとはもう些細な一言で崩れ去るしかないくらいボロボロだ。

「キミは色を知っているだけなんだ。キミは生まれながらに、リン

ゴが『赤』だという事を知っていた。けれど私の髪が『赤』という事を見る事ができなかったんだ」

その些細——というにはちよつとヘヴィな一言が。

「だからキミは『色を知る者』。この世界でたった一人……私達と共に歩む人」

ヘヴィなワリにダメージが少ない言葉が。

「まあ、その絵本を読めるって時点でキミは『選ばれている』んだけどね。それは元々『選ばれた者』を探すための道具だから。十年前に世に放ったはいいいけど思ったように成果が出なくてね、諦めていたところへのこの反応だったから。いやあ、よかった、よかった」というかヘヴィでも何でも無い。

独りで勝手に浮かれて、完結しているヤツがいた。

とりあえず……。

気を取り直したボクは絵本を返してもらって、パシパシ、と自分の手のひらを狙って素振りを数回。それからブンブンブン、と何も無いところで数回振った。

一撃必殺。

直後、まだ独りで完結して浮かれている青年の頭部に、絵本のそれなりに硬い角が会心の一撃としてヒットして、その青年がバタリと倒れてしまつて子供が一人勝ち誇った。

——という事は無くあつさり避けられ、むぎゅりと抱き締められてしまつていた。

「あのね、この絵本は武器じゃないからね」

「ううー」

「よしよし。ちよつと嬉しくってさ。神のバカがこの世界からトンズラしてから、長い間ずーっとキミという存在を私達は待っていたんだ。だからちよつと浮かれてしまつてね」

この苦労話から始まつて、彼——ガーネットと名乗ったその青年は、これまでの経緯をボクに語り始めた。その間もガーネットは神をバカだノロマだ卑怯者だ、と、ボクでもびっくりするくらい貶し

ていた。……神をバカと言い切った人を、ボクははじめて見た気がする。

彼と彼の仲間は『聖都』と、その周辺を旅して調べ回っていたらしい。

まさかこんな田舎——もといド田舎にいたとは思わなかった、と苦笑していた。

まあ、仕方がない気もする。人探しは都会の方が見つかる可能性が高そうだし、それに田舎在住でも数年に一回くらいは『聖都』に行く。ガーネット達の作戦は間違いないと思う。

ただ、ボクあの『夫婦』の家に生まれてしまった、という不運があっただけ。

絵本をばら撒くとか町に張り込むとか、どうしてそこまでしてボクを探したのか。

それは、ボクが『色を知る者』だったから。

とはいえ、こう説明されてもボクに理解できたのは『ガーネットとその仲間がボクを探していた』と言う事だけ。しかもボクというより、『色を知る者』を探してたっばいし。

「では、演劇で例えよう」

「……うん」

「世界を『舞台』、人々を『出演者』とした場合、私は『傍観者』だよ」

その例でいうと神様は脚本家かな。そう言うとはその通り、と同意した。

ガーネット曰く、ボクは『出演者』であると同時に、この演劇をリアルタイムで動かしている『脚本家』的存在らしい。つまり普通の『出演者』に、そしてガーネット達『傍観者』にもできない事でも、『脚本家』であるボクなら可能……という事だそうだ。

そして演劇の例えで言うと、この世界は『脚本家』がいない。

複数のシナリオ——しかもどれもこれも一部が欠損してしまっていて、途中からアドリブで乗り切らなきゃいけなくなっている台本

を元に、何度も何度も演じている状態。

その台本に飽きたら次に。まさに『手を変え品を変え』ってやつらしい。

話が長くなりそうだったので、休憩を挟む。あんまり上手じゃないけど紅茶を淹れた。ほんのりと渋みが聞いたお茶を飲んで、寝ぼけた頭が覚醒する。後で寝れなくなる気もするけど。

ガーネットは紅茶を飲みつつ、彼が知る『昔』をボクにもわかりやすいよう語った。

「この世界はかつて繁栄の極みに達していた。すべての人が等しく、繁栄の恩恵の中で幸福に浸っていた。その結果は『今』。……人々は神に見放された。同時に『色』という概念さえ消されてしまった。色を無くしてしまった人間、文明なんて脆いものさ。この世界はかつての繁栄と栄光をその手に取り戻すべく、もう十回以上『やり直している』んだ」

「十回……」

知らない間に人間は十回も繁栄しかけて、滅亡した。

国じゃなくて、この『世界』が。

スケールが大きすぎる。ボクの理解なんて軽く超えた物語。

でも前に学校の授業でそんな事を先生が言っていた。先生やそれ以外の多くの人は、不屈の精神を持つ民があれこれと言っけど……こういう事、だったんだ。

「滅んだら最初からやり直す。子供の積み木遊び。でも『ある一点』から先に勧めていない事に、我々『傍観者』は気がついた。国が生まれて大きく育つ過程で、彼らは他国を理解できないまま争って、滅んでいく。……これから先、このままでは繁栄など訪れない」

その一点がきつと『神様が世界と人間を見捨てた瞬間』なのかな。ガーネットにそう問いかけたら肯定された。つまりその瞬間までの脚本しかないんだ。辿る道筋はイロイロあるけど結末が途絶えているから……唐突に終わってしまう物語。それがこの『世界』。

と、ここで一つ疑問。

「あのさガーネット。色が無いだけでそんなに問題？　っていうか、人間を見限った神様がどうして『色』を持っていくの？　こう、天変地異を起こすとかじゃなくて？」

「それはいい質問だよ」

ガーネットはよしよし、とボクの頭を撫でた。

嬉しいけど、今度辞書の角で寝込みを襲って殴ろうと誓う。

「キミは、景色を見て『美しい』と思った事は？　あるいは他人がそんな事を言っているのを見た事は？　無いと思うよ。何故なら色を抜きに美しいと感じるのは困難だ。人間ならば比較的楽だろうね。でも自然は違う。自然は『あるべき美しさ』の形が曖昧だから」

「曖昧……？」

「美女という概念にも国や地域でズレがある。でも自然の美醜にはそれが無い。あっても個人単位の好みだけ。つまり、風景ほど交流に使いやすい『美しさ』は無いんだよ」

ああ、つまりそういう事なんだ。何となく彼が言いたい事がわかった。

美しい景色を写し取った絵があったとする。

それを他の国の人が見て、感動する。そして『自分も見てみたい』とか思っただけにその場所を尋ねて、『この国は素晴らしいモノを持っている』と感心する。

それがいろんな国同士で何度も何度も起こって、次第に国家交流が盛んになっていく。

相手がどういう性格を持っている存在なのかわかれば、戦争という傍迷惑なケンカが起こりそうになっても、話し合いなどで何とかなるんじゃないかという事。

今まではそんな些細な事さえできなくて、何度も滅んでいったんだ。きつと。

誰だって知らないヤツや、得体が知れないヤツは怖い。

怖いから警戒する。

一方で警戒された方は『そんなつもりじゃないのに』と怒る。

互いに怯えたり怒ったり。そして『ケンカ』。

……自分の中で噛み砕いてしまったけど、きっと彼はそういう事を言いたいはず。

要約すると『コミュニケーションが絶望的なまでに足りない』という事。

うん、確かに致命的。

「それで……ここからはキミの意志次第だから、断ってもいいんだけど」

と、意味深過ぎるくらい意味深な発言。何となく思う。ガーネットってこういう言い方しかできないんだろうな、性格的に。でもボクはそんなに嫌いじゃない。

事前に何にも言わないで、巻き込まれるよりはマシ。

そう思えば、ずーっと普通に思えてくるよ……ボク的には。

「世界の真なる姿、『今』の先を……見てみたくなかないかな？」

ガーネットがにやりと笑い、ゆっくりと手を差し出す。

ボクは少し……ほんの数秒だけ迷って。

同じようににや々と笑って、その手をしっかりと握り返した。

かくして、ボクはこのガーネットと一緒に、知っているだけの『色』を探して旅に出る事になったわけだけど。ぶっちゃけ神様と色と世界がどうしたこうした、あと国と国の争いやら諸々の問題がどうこう、というのに興味があつたわけじゃなかった。

……むしろどうでもいい。

スケールが大きすぎるっていうのも、理由の一つだったけど。

単純に『故郷から離れられればいいかな』程度。

これである『夫婦』からぐーんと離れられるんだと思った。

だったら色探しても人探してもアテが無い旅でも、何でもよかった。

家出の口実という軽い考え……あと、ガーネットという人物が気に入ったから。

それを少しでも後悔するのは、初めて『禁忌の遺跡』に入っ
た後
だった。

二章 キンキノチニネムルイブツ

世界は繁栄を極めに極めていた。できない事は無いとさえ言われた。

それこそ神の領域に——命の創造だつてできるようになっていた。そして自分達こそが新たな神と名乗るようになるまで、それほど長い時間がかかる事は無く。

ヒトは古き神々を捨てた。それは仕方がなかった事かもしれない。誰だつて手に入れたモノを使つてみたいし、それがとても便利だつたら手放したくなくなるものだから。

それ自体は悪い事とは思えなかった。

そしてその事は『罪』ではないとボクは思う。太古の昔から繰り返した『選択肢』の結果がそうなたただけの事で、その時代を生きている人々には責任も何もなかっただろうから。

人間はとても単純。

便利な物にすぐ魅せられる。

——だからそうなつてしまったのは『仕方がなかった』。かもしれない。

でも、本当にそう思つていいのは『長い間世界を見守つてきた存在』だけで、その時代を実際に生きる人々が、自分達の行いの『いいわけ』として使つていい言葉じゃなかった。

ガーネットが語つた、かつての世界の形。苦勞なんて言葉が似合わない響き。

どうしてそれが跡形もなく終わってしまったのか。興味が無いわけじゃないけど。

知りたくないなあ、と……思つた。

* * *

明け方に荷物を纏めて置き手紙を残す。

まあ、『ほつといて』と『探さなくてもいい』という一言だけ。

そしてボクはガーネットと一緒に故郷を抜け出して、『色が残されている場所』とやらを目指して旅を始めた。

最初の目的地は馬で一週間くらい、徒歩で二週間弱かかる『遺跡』。

ガーネットは『デパート』って呼んでいた。昔はたくさんの品物が売られていた、今でいう市場だったらしい。たくさんの人が買い物にきて、ありとあらゆる物が売られていたとか。

そんな説明をされても、この『遺跡』を好意的に捉える事はできない。

ボク達はずっと『禁忌の遺跡は罪業の住みか』とか、『少しでも近寄ったら同じ咎を背負う事になる』とか、直球に『呪いを受ける』と教えられて育ってきた世代。

いくらそれが、あちこち崩落しかかって危ないから、という理由だったとしても。

「そう簡単に頭は切り替わらないよ……あながち、嘘とも思えないし」

ガーネットの話の聞いていると、それらの話が本当の事に思えてくる。だって何かに絶望した誰かが『呪い』と称して、他の人間から『色』という概念を奪っていった時代の産物だ。

ユーレイの一匹や二匹は出る、絶対。

「そう心配しなくても大丈夫。確かに何千年も手入れされていないけれど、ちよつと力を加えただけで崩れるほど弱い建物じゃないから。……さすがに地震はヤバそうだけどね」

「ほら、やっぱり！」

「地震といつても……そうだな、キミの町の建物がすべて潰れてしまつくらい凄いのが来ても大丈夫だと思うよ。というかこれまでに何十回かあったからね、そういう地震」

家が全部壊れる地震……そんなの経験した事がない。したくもな

いけど。

ああ、でも学校の先生が言ってたかな。専門の学者さんが調べた結果では、この世界は数百年おきにとんでもない大地震とか、何かしらの天変地異が起きているらしいって。

計算によると、次はあと数十年後くらいに来る可能性が最も高いとかで、一時期は都会に限らず田舎でも大騒ぎになったらしい。ちなみにボクが生まれるずっと前の話。

まあ、ボクが生きている間に来るのは間違いなさそうだし、どうせ来るなら体力がある若いうちに来てほしいかな、と思ってみる。

……ただこの瞬間だけは全力でご遠慮願いたい。

現在、ボクとガーネットは遺跡の一階部分にいる。石——に似た素材で作られたという大木のような柱が規則的にずらりと並んで、窓が少ないからとても暗い空間だった。

「凄いね……本当にここって人がいたの？」

「ああ、いたよ。この建物は『お店』だから住民がいたわけじゃないけど。別の遺跡群にはこれに似た建造物で、人が暮らすための『住居』もある。いずれ行くだろうね」

「そっか」

「この世界で人工物に『色』が残っているのは、遺跡だけだから。それさえも風化して失われつつあるし、キミとの出逢いはきっと私達にとって最後のチャンスに違いない」

なでなで。

何故か頭を撫でられた。それほど悪い気がしない、こういうのも思えば誰かに頭を撫でてもらった事なんて、ボクの記憶には存在していなかった。ガーネットが初めてだ。

子供扱いされていると思う。怒るべきタイミング。

……でも、嬉しかった。

「まずは上に行こうか」

「この建物って何階くらいあるの？」

「外から見た感じでは十階以上だったと思うけど。……どっちにし

ても全部の階を見て回るからそういう辺りは気にしない方が、キミの精神にとっても優しいと思うよ、うん」

につこり、とあからさまな満面の笑みを浮かべるガーネット。

一瞬、帰りたくなつた。

十階以上？　つまり単純計算で普通の民家——ボクが暮らしていたあの家がボクの部屋でもある屋根裏部屋を入れて三階。そんな家を上に三つ以上ポンポンと積み重ねる。

……ぞつとした。

いや、確かにそれくらいあつてもおかしくない大きさだつたけど。それに階数はどうだつていいんだ。一つの階の広さが、ボクがしる普通の民家の二倍くらいつていうなら、メンドクセーと思うかもしれないけど、たぶんさほど気にしない。

問題は——目の前に広がる『一階』の奥があまりにも遠すぎる事。これがずーっと、上まで続くなんて考えるだけでも憂鬱。

……この建物の中を全部歩き回るのに、いったい何日かかるだろう。

つていうか、暗い。奥なんて何も見えないよ。

「ねえ、灯りは？　入り口付近は明るいけど、奥まで光は届いてないと思うよ。周りの人に見つからないようにこっそり来たから、ボクはランプなんて持って来てないし」

「それは大丈夫。はい」

ごそそ、とガーネットは服のポケットから凄く短い棒切れを出す。泡だて器の針金になつている部分を外して、その部分に丸く膨らんだガラスっぽいモノをつけた——みたいな形。そうしか言えない変な物体。手足が無い人形みたい。

「これは『懐中電灯』っていつて、この建物が使われていた頃の明かり。ランプだね」

「ふうん……」

「ここを押すと灯りが付くんだ。もう一回押すと消える」

「ふむふむ……お、ついた」

「ああ、そうだ。明かりをつける時や、もうついている時に、このガラスの部分を覗き込んだりしたらダメだよ。もしかしたら目を傷めてしまうかもしれないからね」

「わかった。ちゃんと気をつける」

ぼちぼちぼち、とつけたり消したりつけたりする。ランプよりずっと明るくて、範囲は狭いけど遠くまで照らす事ができる。これがあれば夜道だろうと何だろうと平気そうだった。

隣を見るとガーネットが、同じ懐中電灯をもう一つ取り出していた。

「それはキミのために持ってきたから、カバンの中にしまっておくといい。できれば人前では使わないように。……まあ、それは言わなくてもわかってくれると思うけど」

「さすがにわかってるよ。こんなの見せたら、間違いなく大騒ぎになっちゃう」

ずっと言いたかったけれど、ガーネットはボクを子供扱いしすぎ。子供という部分は否定しないけど、さすがにムっとしたので彼の背中を軽く手で叩く。

……まあ、こっちが小さいから背中というより腰だけど。

「で、ここで何をするの？」

「これから『色の象徴』を探すんだ」

そう言って、ガーネットは歩き出した。

「この『遺跡』の中に『色の象徴』が眠っている。キミにはそれを見つけてほしい」

追いかけるボクを振り返らず、彼は前を見て歩き続ける。

「色は自然に溢れている。色そのものを探すなら、適当に花畑で花を摘めばいい。だけど私が言っている『色』と『象徴』は違うんだ。似ているようで別物なんだよ」

「違う？」

「象徴と呼ばれるそれは、必ず『人の創造物』でなければいけない」「人の創造物……」

「そう、だから『遺跡』で探すんだ。人間が『色を知っていた』頃の名残を見つける。きつと一つは見つかるはずだから頑張って探そうか。私もできる限り協力するからね」

励ますように微笑む。いや、微笑まれたくらいじゃ頑張れないんだけど。って言うかとんでもなくでかい問題が急浮上して、ボクはそれを問わずにいられない心境になったんだけど。

「で、でも……！」

走って前に回りこむ。

「ボクは色を『知っている』だけで、どれが何の色なのか『見る』事はできないよ。もしも全然違う物をそうだと思い込んでしまったら、凄く大変な事になるんじゃないの？」

「大丈夫だよ。キミならちゃんと『見つけられる』から。それに私がちゃんと正解が間違っているかを教えてあげる。二人で頑張ろう。キミなら絶対に大丈夫だよ」

「……何だか、見つけるに決まってるって言われてるみたいで、凄いプレッシャー」

「決め付けているわけじゃない。信じているだけさ」

それとこれの何がどう違うんだろう。思ったけど口に出さなかった。期待されないよりはずっとマシだろうけど、期待されすぎるのも重くって、なんか前途多難な予感がした。

まあ、今更文句を言っても仕方がない。

ボクにできる事といえば、ガーネットがいう色の『象徴』とやらを探し出すだけ。

しかも色が『見えない』状態で。……不利な事この上ない。

それっぽいのを見つけたら、ガーネットに見せるしかないんだろうな。

ハズレばかり引いてしまったら、彼に迷惑をかけるんだろうか。

あー、何か胃の辺りがキリキリしてきそう。

とはいえこうして役目を引き受けたというか、ガーネットの話をちゃんと聞いて自分の意志で旅に出たからには、しっかりとやるべ

き事はやらなきゃいけない。

それに今ごろはボクがいなくなっただって、町はそれなりに大騒ぎだろうな。

今から帰って大騒ぎに巻き込まれて、大説教大会の拳句——あの『夫婦』にまで説教されるのだけは納得できない。他の大人に怒られるのは仕方が無いけど、あの二人にあって、あの二人に怒られるなんて、想像するだけでもムカムカしてくる。絶対に嫌だった。

よし、頑張ろう。

あの『夫婦』のところに帰るなんて死んでも嫌だ。それならどこか遠くの草原でぼつくりと死んでしまっただけ、そのまま年月をかけて自然に還る方がずっとマシだ。

気合を入れて走り出す。ガーネットが危ないよ、と言った直後。ずべしやー、という音を立てながら、ボクは床の上にぶつ倒れた。何かに足を引っ掛けて見事すっ転んだのだった。

からから、という音を立てて、手の中にあつた懐中電灯が遠ざかっていく。

「あう……」

恥ずかしさと痛さで顔を上げられない中、ボクは手探りで懐中電灯を探す。そしてようやく掴んだ——のだけど、何だか思っていたよりもずつと太い。

確か、あの懐中電灯は光ってる部分以外は太さが一定だったけど、掴んだ『何か』は太い部分と細い部分があつた。しかも全体的に太いし、何となく違うモノを掴んだ予感。

「大丈夫？」

「うん、たぶん大丈夫——」

駆け寄ってきたガーネットの懐中電灯が周囲を照らした瞬間。

「——」

ボクは、自分が何を握ってしまったのかも判明する。

それは何度瞬きしても見間違える事はない——人間の腕だった。よく見るとボクの前方には首や胴体や足が散乱し、その量からして

腕や足が『一人分』じゃないのは間違いない。

確か、ここが市場みたいところって説明を聞いた。だけど目の前に広がっているのは何人もの人間——おそらく女性がバラバラに解体されている『虐殺現場』そのもの。

「……っ」

ボクは掴んでしまった腕を放り投げると、ガーネットにしがみ付いた。服をぎゅっと掴んで顔を押し付ける。あんな光景、見たくない見たくない見たくない見たくない……っ。

身体の震えが止まらなかった。このままじゃガーネットの服に掴んだ跡がつきそう。でもこわばったままの指が彼の服を解放しない。解こうとしても、身体が意思の命令を跳ね除けた。

もしもボクが色を『見る』事ができたら、どんな光景が広がっていたんだろう。

何も無いように見えている床は、実は血溜まりなのだろうか。

生々しい現場や——その『作業』を想像し、身体の震えが大きくなった。

ガーネットはボクの頭を何度も撫でて、落ち着かせようとしてくれている。

震えは収まってきたんだけど、ふと彼の様子がボクでは考えられないくらい普通なのに気がついた。そっと視線を上に向ける。ガーネットは微笑み、とボクの頭を撫でた。

「……えっと、あの、あれは？」

「もしかして『マネキン』知らない？」

こくこくこく、と首がムチウチになりそうなくらい上下に激しく振る。

「これはね、服を着せる人形だよ。その時の流行や新しいデザインの服を着せて、店の目立つところに何体か並べておくんだ。看板……みたいなモノ、かもしれないね」

「そ、そうなんだ……へ、へえ」

「さすがにバラバラ状態だと恐ろしいね。私も一瞬、死体かと思っ

たよ。でもアレは人形だから怖い物じゃない。だから大丈夫だよ。
それに私が一緒にいるから」

「う、ん……」

返事できただけ凄いや、と自分で自分を褒めた。まあ、その声は震えてたんだけど。人形だって言われても人間そっくりだし、見ていて気持ちがいい光景じゃない事に変わりはないし。

もう一度、バラバラの人形にちらつと視線を向ける。勘違いしていた時のように震えたりはしなかったけれど、今すぐにでもこの場を離れたい心境に、さして変更は無かった。

それがガーネットにも伝わったのだろうか。

彼はボクをひょいっと横抱きにして、人形を軽やかに避けながら奥に進んでいく。しばらくすると階段に辿り着き、一瞬上を見上げて足を止めた彼はそのまま上階を目指す。

「ちょ、ガーネットっ。どこに行くんだよっ」

「屋上に行こうかなって」

……屋上？

声に出さずに視線で疑問をぶつける。

ガーネットはボクににっこりと微笑みかけた。

「今日は屋上でちょっと休憩して、どこか安全な場所を探してそこで安もう。キミは慣れない旅で疲れただろう？ 明日から探せばいいし、今は身体を休める事が重要だよ」

言われて——否定する要素が思い当たらなかった。

だから素直に『ありがと』と頷く。確かに疲れている。旅なんて慣れてないから身体も疲れているけど、それよりさっきのマネキン騒動で一気に疲弊した精神が限界を訴えている。

すぐ近くに町とか村が無いのが残念だった。

それにしても『屋上』か……つまり『一番上』のさらに上、だよ
ね。

別に歩けないわけじゃないんだから、そろそろ降ろしてほしいな
と思ってみる。

……心の一部は『現状維持』を望んだけど。

息を乱さないままガーネットは前に進む。凄いなあ、と思っていると、ボクらの前に重そうな扉が立ちふさがった。そこでようやくボクを降ろしたガーネットは扉を開ける。

「……わあ」

ぎい、とちよつと耳障りな音を立てて開いていった扉。

その向こうには——何も無い。空だけが在った。

この『遺跡』を取り囲む森も山も、ボクの視界には無い。

見渡す限り一面に『空』だけが存在し、地上では感じなかった心地いい風が吹く。

「広いね……眺めもいいし」

「落っこちないように気をつけてね」

わかってるよ、と言いながらそろりそろりと端に。ゆっくりと下を見ると、見渡せないものなど無いと思えるほどに世界がぐーんと広がっていて、ボクの目の前に迫っていた。

圧倒的なスケール。

ボクはただ茫然と突っ立ったまま、空を見たり、前を見たり。

たぶんかなり面白い行動をしていたと思う。

後ろにいたガーネットは子供っぽいと思ったかもしれない。

すごいなあ。昔はこの光景を大勢の人が見ていたんだ。それも『色』付きで。

空が『青』なのは知っている。だけど『見える』わけじゃない。

……少しだけ、ガーネット達『色を見る人』が羨ましいなあって思った。ガーネットにはどんな風に見えているんだろう、この一面に広がっている空は。いや、この世界は。

無いモノねだりをして仕方が無い。ボクは何度も深呼吸して、ボクが感じられる世界を何度も味わってみた。地上と空気が自我って思えるのは、心境の変化なのかもしれないけど。

別の『遺跡』でも屋上まで上ろうかな。二つの『遺跡』はどう空気が違うのか比べてみるのも面白そう。目標っぽいものを見つけた

ところで、ボクはある事に気が付いた。

そう、今更ながらにボクは気が付いたのだった。さっき聞いたあの説明の中で、ボクが見つけた『象徴』らしきモノを、ガーネットは正解か間違いか教えると言っていた事。

だから問題はないよって。

ピンと来たやつを片っ端からもってこいって言った。

正解か間違いか判断できるという事は、ガーネットは色が『見える』に違いない。

ボクが『象徴』を探す必要は、実はほとんど無いっぽいのだ。

色を『知っている』だけのボクをわざわざ探すよりも、自分達で『象徴』を探す方がずっと効率がいいし、正解か否かの確認作業が省かれるだけでも早くすむに決まっている。

どうして効率が悪い方法ばかり選択したんだろう。

ちよっと気になった。

凄く気になる。

訊いてみようかな、訊いちゃおうかな。少し迷う。

「あのさ、ガーネット」

訊いてみる事にした。気になる時は素直が一番。

「どうして『ボク』だったの？ ボクは色を『見る』事ができないから、ボクが探してガーネットに確認してもらって一連の流れが、物凄く効率が悪そうに思えるんだけど」

「……ああ、その事か。それは仕方がないんだ。確かに『象徴』を探す事自体は私達だけで何の問題も無いんだけどね、その『象徴』を扱えるのは、一部の人間だけなんだよ」

例えばキミのような『色を知る者』とかね。ガーネットはそう言っただけで笑った。

「私達は『傍観者』なんだ。物語の『読者』であって、『作者』じゃない。だからこの『何度も滅んではやり直す物語』に、私達だけで直接手を出し関わる事はできないんだ。それにはキミのような『出演者にして脚本家』である存在に、手伝ってもらわなければいけ

ない」

よくわからなかったけれど、ガーネットの説明によると『象徴』は、それ単体では何の意味も持たないらしい。それを『使う』ためには、どうしてもヒトの手が必要だった。

しかし『色を知らない』人間では、彼らが望む『協力者』にならない。

そもそも色を『知らない』人が、ガーネット達の話の聞くはずもないだろう。

怪しいヤツ扱いされて終わるだけだ。

だからボク——『色を知る者』が必要だった。

ガーネット達がどうしてもできない作業をボクが受け持って、それとは逆にボクができない作業をガーネット達が請け負う。互いに足りない部分を補い合う……そんな関係。

「キミは物語の『登場人物』であって『作者に近い存在』。だから、キミじゃないとこの世界を変える事はできない。見ているだけの存在は、それ以外にはなれないんだよ」

伸ばされたガーネットの指で、そつと頬を撫でられる。

ちよつと恥ずかしい。

でも、とりあえずわかってきたかもしれない。

ガーネットがボクを探していた理由、『遺跡』でやらなければいけない事。

まだボクが見つけた『象徴』をどうすればいいのか、などの核心と思われる部分の説明がまだなんだけど、これ以上難しい事を説明されると全部ごちゃ混ぜになりそうだった。

別に今日一日しか一緒にいられないわけでもないし、明日『象徴』を探しながらさりげなく尋ねればいいと思う。その方が自然だろうし。うん、そうしよう。そう決めた。

頭の中を切り替える。すると別の疑問が浮かんできた。……これでもそれなりに納得して旅に出たつもりだったんだけど、実はわからない事だらけなんだなと思いつた瞬間だった。

「一つ、訊いていい？」

「ん？」

「昔の世界って、どう凄かった？」

ちよっとだけ気になっていた。こんな小さなランプがあつて、こんなに大きな建物を作る事ができて。そんな時代がこの世界に、本当に存在していたのになつて。

その世界は――どんな暮らしだったのになつて。

疑っているわけじゃなかった。あまりにも今と違つていて、現実が存在していたと受け止め切れていない、のかもしれない。信じているのに信じられない。そんな感じだ。

「そうだね。私でわかる範囲でよければ話すよ」

ガーネットは座れる場所に腰掛ける。話が長くなるらしい、とボクは感じた。

キョロキョロと周囲を見回して、ボクも座れそうな場所を探す。

……ガーネットの隣しかなかったけど。

「馬より早い乗り物があつた。水は好きなだけ手に入り、薪よりも優れた燃料もある。場所に関わらず海の幸が手に入り、食べ物を新鮮に保存できる技術もあつた。他にも、離れたところと簡単に『会話』する事もできた。今の人々にとっては天国のような時間があつたんだよ」

その言葉の中身は、今では考えられないような内容。

馬より早い乗り物があるとか、水が好きなだけ飲み放題とか、薪より凄い燃料とか、海の食べ物場所に関係なく手に入るとか、新鮮な状態で保存できるとか。

挙句の果てに離れた場所と会話ができるとか。

……ありえない。ありえないよ。便利とか言うレベルじゃない。本当にこの世界にかつて存在していた物の話なのか、その名残であるあの『遺跡』の中を見た今でも信じられない。

ボクは子供だからわからないけど、世界の技術のてっぺんをかき集めたって無理だ。そのてっぺんを何百年もかけて、さらにさらに

何倍にも高くしないと辿り着けない。

——本当に『神様』の領域だ。

ああ、だけど。

「……滅んだんだよね」

かつては誰もが知っていて、誰もが利用する常識だったそれらの技術。

今からすると『夢を見るにもほどがある』と言われそう。

まさに『空想』——あるいはただの『妄想』になって。この世界から獄僅かな痕跡しか残さず、何もかも消えてしまったからこそ、ボクが知る『現実』が存在している。

きつと、その当時の人間達は『終わる』なんて思いもしなかったんだろうな。ずっと繁栄が続いていくに違いない。そう、思い込むように信じていたんだ。

だけど実際は全然違ってしまった。

過去に何があったのかもわからなくなるほど——世界は綺麗に『終わった』。

「そう、国によっては数千年も積み重なっていた歴史は、たった数十年の間に根こそぎ消えてしまった。花火のような美しさも散り逝く花のような潔さも無い。その終焉はおぞましく醜い手段でもたらされた。……人間はその瞬間に、持てる浅ましさをすべて見せ付けていたよ」

そして一人の『哀れな加害者』を生み出してしまった。ガーネットは呟く。

「今の世で神と呼ばれるようになった『あの人』は、自分の大切な物を根こそぎ奪い去った世界と人間を憎んだ。そして人間に呪いをかけて死んでいった。後になって、その憎しみと悲しみと呪いを知った人間は、『あの人』を崇める事で赦されようと宗教に走った」
色が消えた直後はやはり『知る者』が多かった。だから自分達にかけられてしまった恐ろしい呪いに怯えて、ガーネットが『あの人』と呼ぶ何者かを神として崇めた。

そうする事で赦しを得ようとしたのだろう。

けれど死者には赦す事はできない。人々はそれを知らずにひたすら崇め奉り、自分達の罪の許しを乞い続けて……解決しないままボクが生きている『今』に至る。

だから誰も『色』を知らない。認識できないでいる。その機能は失われたまま。

でも、現代を生きるボクは『色を知っている』。

……なら同じように『色を見る』事ができる人はいるのだろうか。だとしたら、その人に『世界』はどう見えているのだろう。きっと『知っている』だけのボクとは見えている世界と感じている何かが、一から十まで違っているんだろうな。

とりあえず隣にいたつけ、色を『見る』事ができる人。

ちよつと訊いてみるのも悪くないかな。ボクは隣にいるガーネットに声をかけた。

「ねえ、ガーネットには世界はどう見えてる？」

「どう……とは？」

「色とか。ボクには『見えない』から……ちよつと気になったけど別に変な質問とは思えないんだけど、ガーネットは少し困った顔をした。

「改めて言われたら少し困るな……色自体は人間がそれを失う前から見ているし、今もはっきりと色を『認識』しているから説明できないわけじゃないんだ。ただ、ほとんど無意識に受け入れている領域の説明だからね。似合う言葉が思いつかないという感じかな」

「……ガーネットって何歳？　っていうか何千歳？」

「ああ、まあ、それはその……あはは」

いろいろあってね、と苦笑するガーネット。ちよつと寂しそうだつた。何があつたのか気になるけど、本人が言いたくないなら無理に訊こうとは思わない。

あの『夫婦』がボクに教えてくれた中で、唯一記憶した言葉『自分がされて嫌な事は人にしない』という精神だ。とりあえずガーネ

ツトが『普通の人間じゃない』のは、これまでの展開でもう嫌になるほどわかってる。だから、今すぐ無理やりに訊く事じゃない。

だからボクは自分の質問を優先する事にした。

『全部教えるってワケじゃないんだ。例えば……そう、建物とか服とか』

そうだな、と少し悩んだ様子を見せるガーネット。

町の景色や人々の服装を思い出そうとしているというより、どうい言葉で伝えればいいのか悩んでいる、という感じにボクには見ええた。きつと、こんな質問をされた事はこれまで一度だって無かつたんだらう。というか、されるといいう想像さえした事が無いって感じだった。

『髪の色は『金』とか『銀』とか『茶』、『黒』も『白』もあつた。肌の色は住んでいる地方によつて、白かったり黒かったりした記憶しているよ。キミは色白で灰色の髪だ』

そつか『灰』なんだ。ちよつとシヨツクかも。

どうせなら『銀』がよかった。いや色が『見える』わけじゃないんだけど、どこか中途半端って感じがして、別に嫌いつてワケじゃないんだけどちよつとだけ複雑かもしれない。

今更な気もするけど『知ってるだけ』って、ちよつと不便かもしれないなあ。

『服装については『白』か『黒』。どこの国、地方でもその二つだけ。誰も『色』を知らない時代が続いているから、ヒトが作るモノからは『色』が完全に消えている。もちろん自然に存在している物、花や草はとても彩りに溢れている。とても美しいよ』

『そつか……』

ガーネットの答えを参考に少し考えてみる。

何もおかしいところが無いように見える、そう見せられている世界。

人間という名前の種から、ある日ポンつと消されてしまった『色』という概念。

ボクが——人間がおかしいんだろうか。

それともガーネットがおかしいのか。

わからなくなっていく。

すべて。

遺跡の傍に洞穴があった。

そこで夜を明かして、明日は遺跡で『色』を探す。

慣れない旅で疲れただろう、とガーネットはボクに寝るよう促した。確かに家にいた時とは比べ物にならないくらい疲れたけど、ボクはまだ眠りたくないと思っていた。

いろいろと話したい事がたくさん。時間がちつとも足りなかった。「ねえ……どうして『昔』は終わったの？」

愛用の毛布に包まって、ボクは尋ねる。ずっと気になっていた事だった。今よりずっと優れていた人々があっさりと消えてしまったなんて、どんな天変地異が怒ったのだろうか。

「戦争、さ。人間が犯す罪でもっとも重く、醜く……何も生み出さない『悪』だよ」

焚き火に木の枝を放り込んで、ガーネットはボクの方を向く。炎に照らされたその顔には深い悲しみと——少しだけ蔑んだ感情が見え隠れしているように感じられた。

「その思いがどれだけ崇高であろうと、『戦争』を叶える手段とした時点で下劣な欲求と何も変わらない。思想云々というだけ夕チが悪い。思いは、本人にも止められないから」

「ガーネット……？」

「欲望を剥き出しにする人間ほど、おぞましいモノは無いね」

ガーネットの冷笑と呟きは、ボクの心にいつまでいつまでも響いていた。

……やっぱり、知らなきゃよかったなあ。

三章 ビシヨヌレノユウウツ

その日も朝から『象徴』探し。ボクは二階でウロウロしていた。ガーネットは用事があるとか言って、昼頃には戻ると言い残してでかけていったまま帰ってこない。

食料も買ってくるみたいだったし、今日のお昼は美味しいものが食べられるかも。

で、そう思うとどうにもやる気が沸いてこない。お腹一杯に美味しいものを食べてから頑張ればいいかなあとか、とてつもなく怠けた事を考えてしまうわけだった。

「……遅いなあ」

二階の壁に開いた穴から外を見て、ボクはため息を零していた。こつこつうぽかぽかと暖かい日は、昼寝するのが一番。外でごろごろしまくる。程よく日当たりがいい場所に適当な敷物を広げて、その上でごろーんと寝転がるって最高だから。

そのためにはまず『程よく日当たりがいい場所』を探さなきゃ。

……サボってるわけじゃないよ。効率がいい作業のためには、こつこつという休息だつて必要なんだからね。ボクだつてまだまだお子様なんだから、ちよつとくらいゆつくりしたい。

とりあえず毛布を引っ張り出す。草の上なら汚れたりしない……はず。

「えーっと、ボクの毛布は……あ」

一階に行きかけた足が止まった。そうだ、毛布は汚れてきたからつて、朝からざぶざぶと洗っておいたんだつた。いくら天気がいいからつて、数時間で乾いているわけがない。

盛り上がった気分が墜落する。うげ、と声が漏れてしまった。顔はきつと、砂糖入りの甘い紅茶間違えて苦いお茶を飲んでしまったかのように、ぐにぐにと歪んでいるだろう。

あー、最悪だ。サボろうなんて考えたバチが当たつたに違いない。

反省の証としてせめえガーネットが帰ってくるまでは、孤独だろうとお腹が減ろうと頑張る事にする。

とりあえずその辺を引っ掻き回して……っと。ボクは手当たり次第にその辺にあるモノをひっくり返したり、遠くへポイっと放り投げてみたり、腹立ち紛れに蹴り飛ばしてみたりした。

まあ、足が痛くなっただけなんだけどさ。多少はストレス発散になったけど、痛みで別の意味でストレスたまって、ぶっちゃけ同じところをグルグル回っているような感じがする。

それは現状についても同じ事。っていうかストレスの大半が、現状への不満やら焦りやらが原因だ。なんて言えればいいんだろうな。前に進んでいる気がしない、全然。

探している『象徴』は見つからないし、わからない事は多い。今じゃ何がわからないのかさえワカラナイという感じ。

もしも何かを質問しようと思ったら、一週間前から準備しなきゃいけないだろう。

何だかもう、ボクにできる事なんて探す事だけって感じだった。まるで、それ以外をしてはいけないと誰かが思って、それ以外をできないようにいろいろと手を回したみたい。

そう思うと腹が立った。もやもやしたものが、お腹の底に漂っている。ずーんと錘みたいになんかの動きを抑え込んでいるような、凄く凄くイヤな感じがするモノだった。

「あー、もー」

がすん、と適当に壁を蹴る。

自分じゃ理由が見つからない怒り、焦り、ついでにむかむか。…最後はもはや怒りかもしれないけど、とにかくボクは腹の底がムカムカしている。蹴らずにはいられない感じ。

何にムカツク？

——さっぱり前が見えない日々に。

何にムカツク？

——わけがわからない作業に。

誰にムカツク？

そりゃ決まっている。前も後ろも右も左も見えなくて、グルグルと回っているだけかもしれないのに、手探りで進む事しかできない弱くて非力な自分に、盛大にむかむかしている。

そして不明不満ばかりの自分に対して、殺意にも似た怒りを感じていた。

こんなに苛立ったり、むかむかするのは初めて。

だから心を静める方法がわからない。とにかく何でもいいから何かないかと視線をめぐらせた先に、柔らかそうな――たぶんクツシヨンらしきモノを見つけ、思いつき殴ろうとして。

「それはやめた方がいい」

がし、と右手を掴まれて、止められた。聞き覚えが無い声。振り返ると降ろせば肩甲骨を隠せそうな程度に長い髪を、後頭部の辺りで一纏めに結った青年が立っていた。

ちよつと眠そうな顔だなあと思った。温厚そうだ。

服装は全体的にシンプル。服の『丈』と呼ばれる部分が全体的に少し長いだけだ。腰に引つ掛けるみたいにつけている皮の編み紐にも、妙な飾りがついているわけじゃない。

しかしそのシンプルさが、かえって彼に似合っていると思う。例えば彼とガーネットの服を入れ替えたら、たぶん両方ともぜんぜん似合わなくて、違和感全開だろうから。

年齢的にはガーネットより少し下って感じかな。でも身長が高いから、見る人によっては年上と思うかもしれない。まあ、同世代で間違いはないと思う。

「えっと……」

なんて、彼の外見を褒め称えている場合じゃない。この人は誰？ そんな当たり前の疑問を先に思いつくべきだった。だってここは遺跡の中だ。普通の人はずち入らない。

怪しい。怪しすぎる。誰なんだこの人は。くっ、こういう時に例の絵本――要するに武器が無いなんて、ジタジタしたくなるくらい

に悔しすぎるミスだった。

もしも変質者系の趣味の人だったらどうしよう。
ボクってば、この人に変なコトされちゃうの？

「……あの」

困り顔で声をかけられた。

「そんな怯えた目を向けられるのは心外と言うか、えっと……ガー
ネットは？」

「……あ」

ぴん、ときた。そして恥ずかしくなった。混乱しすぎだ、自分。

おたおたと頭を下げた。お詫びと挨拶を兼ねて。今度から顔に感情とかが出てこないように頑張らなきゃ。あーもう、恥ずかしくて逃げ出したい。っていうか逃げさせて。

「僕はヴァーミリオン。キミが『色を知る者』だね、はじめまして
ところで彼は？」

「えっと、はじめまして……それといろとごめんなさい。ガー
ネットは近くの町に買出しに行ったけど、たぶんもうそろそろ戻っ
てくるはず、かな」

何事も無ければね、とボクは付け足した。田舎だからそんなに心配ないと思いたいところなんだけど、悲しい事に治安についてはいいとも悪いとも言いきれない。

街道沿いはともかく、少し離れたらゴロツキの類がいるという話
もたまに聞いたし。

でもガーネットなら大丈夫そうだ、何となく。

頭の中に悪人をちぎっては投げ、ひきつけては蹴り飛ばし、作り
上げた負け犬の山の上に立って涼しい顔をしているガーネットの姿
が浮かんできた。……似合うなあ、何となく。

「そうか、いないのか……」

困った顔でブツブツと呟き、何かを考えている様子のヴァーミリ
オン。ガーネットってば間が悪いと言うか、どうしてお客さんがく
る時にいないのかな。……まさか何となく察知してワザと避けてる

って事は無いか。一回くらいの偶然で決め付けるの早い。二回目から疑おう。

本人が聞いたら嘆きそうな事を思いながら、ボクはとりあえずヴァーミリオンと共に外に出る事にした。ちょうどお昼頃だった事もあって、ご飯を食べたいと思ったからだ。

ガーネットが作ってくれた朝ごはんのスープが残っているし、それとパンと炙ったソーセージがあれば胃袋は満足するはず。うう、想像するだけであの素晴らしすぎる味を思い出す。

ひき肉の中にいくつかの香草が混ざっていて、炙った事で香ばしくなった皮を裂けばあふれ出る肉汁の中に香りや風味、絶妙な塩加減の共演。もう食べるだけで天国って感じた。

まあ、普通と比べたらちよつと割高だ。でも、入っている香草や塩のおかげで結構日持ちするから、旅人にとっては『安い』食べ物なんだ……ってガーネットが言ってたし。

旅に出て初めて口にしたけれど、今じゃ好物の一つになった。

何だか、クセになっちゃうって感じの味なんだ。もちろん香草の風味が強いから、どうしても苦手って人もいると思うけど、ボクはあの手の味は好き。

レモンとかさつとかけたら、もつとおいしそう。

うう、ガーネット買ってきてくれるかなあ。あんなに好き好き言ったから、見つけたら買ってきてくれるとは思うけど、よく売り切れるってお店のオジサン言ってたからなあ。

期待と不安を頭の中で混ぜながら、ヴァーミリオンとボクは洞窟に――。

だけど、その入り口でボクの足と身体は、石になった。

「……ボクの、ご飯が」

そこにはひっくり返ったナベと、残骸としか言えないパン。

それと数匹の獣――ちっこい猪らしき連中。

睨み合うように見つめあう獣共とボク。戸惑い気味のヴァーミリオン。

「ご飯、ボクの……ご飯が」

「……えっと」

ヴァーミリオンが何かを言おうとした、その瞬間に何かが盛大にキレた。

「むぎやーっ。お前ら全員ぶん殴ってやりやーっ！」

叫ぶと獣は逃げた。絵本を手に取り出そうとしたら、ヴァーミリオンがボクを羽交い絞めにするように抱えて止める。ボクが暴れて抵抗している間に、敵は遠ざかっていった。

ジタジタと暴れるボク。おのれよくもスープをパンを食料をつ。お前らを食ってやらねば気が収まらないっ。今すぐに食肉にしてやる！ んでもって、焚き火で焼いて食う！

「……今から走ったって追いつけない。それに絵本じゃムリだと思う」

「はーなーせーっ」

わーわーぎやーぎや騒ぐ。

獣は逃げる。食い逃げヤロウ共は遠ざかっていく。

そして、その姿が見えなくなって、ボクがぐったりと疲れきってしまうまで、暴れるのも叫ぶのも終わらなかった。もう必要最低限の動きしかしたくない、というかできない。

「うう、ご飯……」

よろよろとボクは木陰に移動。

そのままパタリと倒れて、フテ寝を始める。空腹のままガーネットが帰ってくるまで、ぼんやりと起きているなんてヤダ。ボクは寝る。何が何でも寝る。寝て過ごせば少しは楽だろう。

洞窟の中ではヴァーミリオンがいて、何かをしているみたいだ。でも、今のボクにとってはどうでもいい事だった。

だってボクは寝るんだから……そういうわけで、おやすみ。

「……うう」

ぐー、とお腹がなった。三秒で飛び起きる。悲しくなった。あと何だか寂しい、心はもちろんだけど胃袋が。今ならナマで野菜や肉

を食べられる勇気があると思う……うう。

「調味料の類はあるのか……なら」

「ヴァーミリオン？」

ボクがあまりの悲しみと絶望の中で呆然としていて、荒らされた食材入れカバンの中を覗き込んでいたヴァーミリオンが呟く。その手には塩やコショウを入れた小瓶。

「簡単な料理なら、調味料さえあれば何とかなれると思う。ただ、無事だった材料が少ないからスープ類になるだろう。……もし、それでいいなら僕が何か作る」

「あ、ありがと……」

ボク、ちよつとだけ復活。そうだ、嘆いてばかりじゃダメだ、うん。幸いにもこの辺りは森なんだから、お腹がすいたなら木の実とか山菜を取ってきて食べればいいだけだ。

まあ、キノコとかは毒の有無が怖いから、無難に山菜にしよう。

家でもよく山へ行つて取らされていたから、たぶん大丈夫。スープにできるかどうかは後から考えればいいさ。

そう思うと影も形も無くなっていた元気が復活する。

むくりと起き上がったボクは、ぺしばしとやや強く自分の頬を両手で叩いた。

——意識覚醒。軽く準備運動もしておく。思えば最近では遺跡の中ばかりうろついて、森の中とか『自然』と触れ合う事が極端すぎるくらい極端に減っていた。気分がぐんぐんと盛り上がって最高潮に急接近していく。……空腹？ はっ、そんなの知った事か！

「じゃ、ボク山菜探すね。これだけ自然があつたら、何種類かあるだろうし」

「あ、ちよつと」

「……？」

早速、森の中に飛び込もうとしたボクを、ヴァーミリオンが呼び止めた。その手にはカバンが握られている。さっきまで食料の類が入っていて、獣に踏まれたりされたあのカバンだ。

「このカバン持って行くといい。他にも木の実とかあるかもしれない」

「ありがとう……あ、でもヴァーミリオンはどうするの？一緒に探す？」

「それもいいけど、僕は川で魚を取ってみる。簡単な罾を仕掛けるだけだから、すぐに山菜探しに合流できるはず。とりあえず道沿いにいてくれると、探しやすいと思うから」

「ん、わかった。それじゃお互い頑張ろうね」

すちゃ、と手を上げて挨拶し、ボクはカバンを手に道を走った。お腹がすいて動きたくないんだけど、正直な話……じっとしているよりは動いた方が楽なんだよね、精神的に。

余計な事を考えなくてすむと言うか、後ろ向き思考にならずにすむ。お腹がすいているという事だっけと忘れられるし、そこまで行かなくても気にしないでいられるだけ楽だ。

それにしても魚かぁ……スープに入れるのかな。

それとも塩焼き？　うう、想像したらどっちもおいしそうだ。

お肉も好きだけど魚も好きだから、想像するだけでヨダレが出てくる。

よし、そのためにも山菜を探さないとね。

香草もあれば摘んどこう。塩やコシヨウだけじゃ味気ない。

本音としてはキノコも……ああ、でも結局見分けができないまま旅に出たし、一か八かで挑むには危険すぎる。うん、ここは安全と無事を選んで、諦めよう。

ボクはまた頬を軽く叩いて気合を入れる。ごく普通に息を巣つて吐くたびに、久しぶりに感じる森の香りが、ボクの身体中にじんわりと染みまわっていく。

花の香り。葉っぱの香り。それから土の香り。

心の中から温まるような幸せな心地。

「んー」

腕を広げて、しばし深呼吸を繰り返す。旅に出るまでは当たり前

だった空気が、今はとても懐かしく感じられた。たった数日離れていただけだったけど、寂しかったのかな。

ちよつとだけ、ほんのちよつとだけ、ボクは考えてみた。

いきなり『色』が無くなった世界、突然『色』を殺された人間。

たぶんね、ボクじゃその気持ちにはわからない。だってボクは確かに他の人と違って『色を知っている』けど、でもそれだけの事で『無くした』とは思っていないから。

だからわからないんだ。喪失感とか、そういうの。でも——たとえば、色じゃなくてボクが今、この瞬間に感じている世界に置き換えてみれば、ちよつとだけわかる気がした。

もしも今、ボクの五感からこの『匂い』が消えてしまったら。

この瞬間にボクが感じている花の香り、葉っぱの香り、土の香り。これらがポンという音を立てるかのように、ある日突然消えてしまったならば。

ボクは混乱して、泣き崩れて、子供みたいに駄々をこねるかもしれない。返してって誰かわからない犯人に対して叫んで、聞こえてないかもしれないとかいう事なんて忘れて。

きつと思いつく限りに、罵詈雑言を吐き捨てる。

吐き捨てる言葉で犯人を殺せればいいのに、そんな思いさえ込めて。

そんな光景を自分で想像して……ボクはぞつとした。

さすがにそれだけはあるえない、と言い切れないから……余計に怖かった。

だから昔の人も、同じだったのかなあ……って思う。誰だって大切なモノが無くなったたら冷静さなんて吹っ飛ぶに違いない。誰もが混乱してしまい、何を言うかわからない。

今まで傍にあったモノが、消えてしまうという事。

——それって、凄く悲しいね。

当たり前が永遠に奪われるなんて。

それが悪い事をした結果だったとしても、悲しいよね。

ボクは両腕をさらに広げた。身体を裂こうとしているように、広げた。ボクが感じているこの世界をもっと身体に覚えさせたい。一つでも忘れ残しが無いように感じたい。

色が欠けている今の世界でも、ボクにとっては大切だから。

たとえそれが歪で、異常であつたとしても。

ボクの『今』の世界は、これだから。

この世界を余す事無く感じたい。世界の『すべて』を感じたい。いつか人間に『色』が戻って、この『色を感じないゆえの世界』が遠ざかつて、忘れたりはしないように。ボクは目を閉じて世界を感じていた。記憶していた。

「ふう……」

目を開いたボクは、足元に投げ捨てていたカバンを拾う。

世界を思う存分に感じた後は、お待ちかねというか大切な仕事である山菜探し。お昼ご飯だけと言わずに、晩御飯のぶんまで積みまくってやるのかな、なんて。

ま、そうそう見つかるものじゃない。土地勘がある故郷でさえ、二桁くらい『よく生えている場所』をめぐってやっと一人分とか普通だったし。知らない場所じゃ……ねえ。

「あー、ダメダメダメ！」

ボクはくらくらするくらい、頭を左右に振った。

後ろ向きは禁止。ただでさえお腹すいて元氣無いんだから、これ以上落ち込んでも意味が無いっていうか絶対ダメ。ボクはそんな弱い子じゃない、弱くないんだ。さあ、頑張るぞー。

カバンをしっかりと抱えて、ボクは地面を睨みつけながらゆつくり動く。

山菜も木の実も香草も、どれもこれも見逃したりしないように。ううむ、でも土地勘が無いって意外と面倒。ここだ、と思った場所に何も無くて、ガツカリする事すでに十回。何ていうか、この状況って運が無いにもほどがあると思うんだ……。

そろそろ肉体的にも精神的にも疲れてきた。

気合だけじゃ、やっぱりどうにもならないんだなあ……。

「ヴァーミリオンはどうか……」

ボクの方がこうも不調だと、気になるのは向こうの様子。川は綺麗だったし、水汲みの時に魚の影も見えたから大丈夫だと信じたい。こつちも向こうもダメ、なんて嫌過ぎる。

魚一匹ずつでもいい、お腹に食べ物を入れたい。

多少まずくても我慢する、できる。というか普通なら食べない魚でもいい。

我ながら、相当に切羽詰っているなあと感じた。

空腹ってイロイロと大変だ。これが旅の辛さなんだろうか。

「はあ……」

漏れるため息に突っ込みを入れる気力も無い。……ヴァーミリオンがいる川で水でも飲んで我慢しようかな。何も無いよりは水でも入っていた方が気分的にマシになりそう。

考えるより先に身体が動いて、気が付くとボクは川の近くまで来ていた。

ヴァーミリオンがいるのはたぶん下流の方。あつちは浅いし流れも緩やかで、罨とかかけやすいだろうから。もしもボクなら流れが急なこの辺りじゃなく、緩やかな下流に仕掛ける。

だから。

「うつそ……」

ざばん、と何か大きなモノがたてたような水音が聞こえた時は、まさかヴァーミリオンが川に落っこちたんじゃないかって思って、焦った。さあっと、血の気が引く音が聞こえてくる。

ボクが必要以上に空腹を訴えて、そのせいでムリに罨を仕掛けようとして、とか。証拠も何も存在しない勝手な想像が、ボクの頭の中に出現しては、次々と高速で通り過ぎていく。

「ヴァーミリオン！」

がささ、と草を掻き分けて走った。だいぶ走ったけど、川はまだ見えない。少しずつ水が流れていく音が大きくなっていて、目指

している方向だけは間違っていないと確信していた。

早く駆けつけなきゃ、そして助けなきゃ。

「大丈夫なの——」

視界が一気に広くなった。瞬間、太陽の光を反射する水面が見える。その反射した光が思った以上に眩しくて、ボクは腕で顔を隠しつつ転びそうになりながら急いで足を止める。

光に慣れた視界に飛び込んできたのは、想像していたのとは少し違う光景。

「……う」

川べりに倒れているのは、知らない人だった。全身びしょ濡れで、何とか石にしがみついたところで力尽きたって感じた。目は開いていないけど、息はちゃんとしている。

見た感じ、旅人のようだった。その人——おそらく青年が倒れている場所から、ちよつと下流に行つたところに、彼の持ち物だと思われるカバンと外套が引つかかっていた。

とりあえず荷物を先に拾って、近くの木陰に置いた。水を吸って重くなった荷物が少し重かつたけど、次に引き上げなきゃいけないものよりはずっと軽いと言ひ聞かせる。

そう、次に引き上げなきゃいけないのは、人間。

それもボクよりずっと大きい人だ。ガーネットかヴァーミリオンか、とにかくボク以外に誰かいないと引き上げるのは無理かもしれない。どうしてこうタイミングが悪いのか。

「ちよつと、起きてよおにーさん！」

腕を掴んで引く。ただどなかなか引つ張り上げられない。今すぐ流されるって状況じゃないけどこのままじゃ風邪を引くし、人間は体温が下がると危ないって聞いた事がある。

とにかくゆっくりしていいはずが無い。

せめて意識だけでも戻ってくれたら……うう、重いつ。

「ん、く……っ」

踏ん張りたいけど足を置く場所が無い。ちよつとでも滑れば川の

中に落ちる、という恐怖からボクは逃げようとして、その結果として気が付くと助けるべき彼からも逃げようとして。

ヤケくそな気持ちになりながら、右腕を抱えなおしてぐっと引く張ったら――。

「うわ……っ！」

足は滑るわ、倒れている青年が動くわで、ボクまで川の中にダイブ。

靴や靴下や服はもちろんの事、頭の上までびしょ濡れになってしまった。

うう、代わりなんて持つてきてないよ、靴。これって靴が履ける程度に乾くまで、もう何もできないって事なのかな。皮だから乾きにくそうだし、少し縮みそうで嫌だなあ。

「……おい、お前」

絶望に浸っていると、ボクの下にいる青年が声をかけてきた。滑った勢いでボクは彼に馬乗りになってしまっていた。慌てて服の裾を引っ張って見せてはいけないものを隠す。

いや、そうじゃなくて早くどかなきゃいけない。見せてはいけないものがすっかり見えたりしないよう、ちゃんと隠しながらボクは立ち上がり、どうにか川の中から脱出した。

陸地を歩くたびにぐしゅぐしゅっていう、靴の中が凄く凄く気持ち悪かった。今すぐ裸足になりたいけど、それじゃ森の中が歩けないから……ボクはその気持ち悪さに耐えた。

足の裏が血まみれになると、靴の中が水浸しで気持ち悪いのと。それらのどちらの方を選ぶのかと問われたなら、誰だって痛いのは嫌だからと後者の方を選ぶとボクは思う。きつとそうに違いないと、ボクは自分相手に言い聞かせていた。

その後ろで、ざばあと音がした。

あの青年が川から出て、服や長い髪の水を絞る音もする。そうだこの人はボク以上に全身余すところ無く、これ以上はもう無理ってくらいびしょ濡れになっているんだった。

もしも寒いなら少しあの洞窟で休んでいつて、ついでに服を乾かしながらご飯とか一緒にどうかな、とか言おうかなって思ってくる
と振り向いたボクは――。

「ったく、お前は どうして俺の上にいた。追い剥ぎか？」

「そっちこそ、どうして川の中にいたんだよ。腹ペコで行き倒れたの？」

向こうから売られたとしか思えないケンカを、普通に買っていた。
睨み合うボクと謎の青年。ただこうして見た感じ、年齢はガー
ネットやヴァーミリオンより少し下っぽい。よくも悪くもガキっぽ
い感じがする。ボクと同族のおいだ。

だからこの怒りにも似た敵意は、同族嫌悪が強くなっているだけ
だと思う。

長い髪を首の後ろで一つに纏めていて、前髪も若干長め。ガーネ
ットみたいに真ん中で分けているから、長い前髪のせいで視界を極
端に狭めているという事は、たぶんないと思う。

服装に関してはいかにもって感じの旅人。腰には護身用らしき剣
がある。全体的にシンプルと言うか、動きやすそうというか。ガー
ネットと似た好みの人なのかもしれない。

でも纏う雰囲気は別物。

ガーネット、そしてヴァーミリオンはあつたかくて優しい感じ。
柔らかくて、頬すりしたくなるような感じがする。寒い時期を越え
て暖かくなってきた晴れの日のような感じがする。

だけどこの名前も知らない失礼なヤツは、ざらざらしていて、誰
かに頭をわしつと捕まれて地面で摩り下ろそうとするように、頬を
ゾリゾリと擦りつけられている感じ。

不愉快、かつ気に入らない。

ここまで悪い印象しかもてないヤツ、というのも珍しいと思う。
別の意味で印象に残ってしまったから、たぶん忘れる事はないだろ
う。というか、忘れられない気がする。

「で、あんたはなんで川流れ？」

まだあちらこちらからパタパタと水滴を落としている彼に、ボクは話しかけた。ボクよりずっと年上だと思う彼が、なんで川に落っこちてここに流れ着いたのか気になったから。

「……少し上流になるのか、そこで足を滑らせた」

「はあ？」

「飛び越えられると思ったから、飛んだ。そして滑った。そのどこが悪い」

「……開き直ったよ、この人。」

腕まで組んで、かなり偉そうにふんぞり返った。

っていうか上流っていつても、落ちた時の音の大きさからしてたぶんそんなに離れた場所じゃないはずだから、普通の人間じゃ飛び越えるなんて選択肢は出てこないと思うんだけど。

ボクの故郷だったら丸太なり何なりで、簡単な橋を作るよ。

十歳くらいの子供の背丈と同じくらいあるもの、この川の幅ってそれを飛び越えようとしたって事は……。

「あんた、バカ？」

つい心の中の声が、実際の音として出てしまった。さすがに名前も知らない相手——ボクから突然バカ呼ばわりされて、あまりの衝撃に彼はぼかんとしたままだった。

でも本当にバカだよ、大バカだよ、この人。

普通なら自分が飛び越えられるかどうかよく吟味するよ。

っていうか十歳児の身長を飛び越えるって、個人によるけどかなり難しいと思うけど。

それも足場が不安定なのに。

「……うん、この人ってバカだよ、絶対。」

「ば、バカとはなんだ！」

「自分の実力も知らないくせに、ムチャするから『バカ』なんだよ」
そしてしばし睨みあい。名前も名乗る前からこの調子。こいつとは何があっても、絶対に仲良くなれないと思った。向こうだってそう思っているに違いない。

そりゃそうだ。初対面から二人してケンカ腰で、こんな風に睨みあつて。そんな状態でどうやって仲良くなれと。向こうもボクも、コイツにだけは負けてたまるかという感じ。

ガキみたいだけど関係ない。

「……ふん。俺にはお前みたいなチンチクリンなガキと遊んでるヒマは無い」

「ち……」

気にしている事を言われて、絶句するボク。濡れた髪をぶんと振り回すように背中を向けたその青年は、すたすたと何事も無かったかのように歩き去っていった。

ボクはというと、発言内容に驚いていた。そして、次第に怒りが込み上げてきた。

「き、気にしてるのに……っ！」

どうせペツタンコだよ出るトコ出てないよ色気なんか欠片も無いよっ。

あんな非常識ヤロウ、その辺でぶっ倒れればいいんだっ。

……とか思いつつ、何だかんだと心配になる自分がちよつと嫌になる。

* * *

服を脱いでから下着だけ着替えて、脱いだ服を枝に引つ掛けて。

ボクは幸運にも乾いていた毛布に包まった。たぶん、帰ってきたヴァーミリオンには芋虫に見えたと思う。

「……」

「つくしゅ、お帰り」

「ああ」

彼の手には二匹の魚。ちよつと小さめだけどおいしそうだった。

スープの中にお出汁の発生源として入れてグツグツコトコトと煮込み、食べる時に味が染みた身を細かくほぐして具にするとか……

想像すると空っぽのお腹がぐーと悲しげに泣いた。

魚を平べったい石の上に置いて、小さなナイフでさばき始めるヴァーミリオン。その手つきは想像以上に慣れていて、あつという間に魚のはらわたが取り出された。そういえばガーネットも料理が上手だし、もしかすると三人の中ではボクが一番ヘタなのかもしれない。

「川に落ちたのか？」

そんな作業をしつつ、ヴァーミリオンが話しかけてきた。洞窟の外に濡れたボクの服が干してあるのを見て、何かあったのかと心配してくれているみたいだった。

ボクはしばらく悩んで、起こった事を言うのをやめた。

いや、やましい事があるんじゃないくて、バカすぎて恥ずかしいから。

「落ちたって言うか、落ちてたバカを拾ってやろうとしたら落とされたって言うか」

「……？」

二匹目のはらわたやえらを取っていた、ヴァーミリオンの手が止まる。彼にはボクの発言の意味がわからなかったに違いない。ボクだって、何も見ていなかったらわからないと思う。

だけど、当事者のボクに言えるのは、そんなよくわからない事だけだった。

詳しく説明する元気がまだ戻ってきていないし。

まあ、いろいろあったのだな、とヴァーミリオンは言って、作業を再開する。そして二匹目を綺麗に処理し終わる頃になって、ようやくガーネットが買い物から戻ってきた。

ガーネットは毛布に包まっているボクを見て啞然としたけど、川に落ちたとかかなり簡単に説明すると安心した様子を見せる。ただ安心する前に、傍らで黙々と作業をしていたヴァーミリオンを睨んでいたのは、ほぼ確実に相手に対して失礼な想像をしていたに違いない。

後でお仕置きする事にした。もちろん絵本の角で一発。

そして毛布に包まったまま暖かいスープをすする。魚と、ガーネツトが買ってきた香辛料がうまく組み合わさって最高だ。この味に免じてお仕置きは手加減してあげよう。

胃袋が満たされて冷静になり、元気を取り戻し始めた頭。

考えるのは川で見つけて名前も知らないままにケンカになったあの青年の事。

今頃、どこかで火を熾して温まっているのだろうか。

さすがにびしょ濡れのまま、という事はない……はず。そう思いたい。

何となくだけど、名前くらい聞けばよかったと、少しだけ後悔していた。

四章 ソンザイヲミトメマシヨウ

森の奥に明かりが灯る。ポツカリと開いた空間に残された古い切り株に、一人の若い旅人が疲れきった様子で腰掛けていた。彼の前には小さな焚き火があり、枝に刺した魚がある。

ただ焼いただけの魚を手にする青年。

「……」

それを無言で食べ始める彼は、かなり不機嫌な様子だった。骨ごとバリバリと魚を噛み砕いている。

長い髪は結われないままで、何故か上半身は裸だった。

『なんか凄いカッコだね』

『なんだか凄い状態だね』

そこに二つの声が響く。姿は見えない。彼はあえて自分から姿が見えない場所にいるのだろうと思い、ただでさえ変なガキのせいで煮えたぎっていた感情の温度が上がった。

「……何の用だ。いや、どこにいる」

その声が、何か現代の人間には使いこなせない道具を使って、この場所に届けられている事を彼は知っている。きつと、声の主はこの場所よりずっと遠くにいるのだろう。

それが彼の逆鱗を嘗め回すように撫で上げ、怒りがむくりと込み上げる。せめてこの場においてくれたなら、怒鳴り散らすなどして発散できるものを……彼は小さく舌打ちした。

『ちよっとお散歩中なんだよ』

『少しお出かけしてるだけさ』

「……半年とは、ずいぶん長い『お散歩』と『お出かけ』だな」
食べ終わった魚の残骸を、枝ごと火の中に放り込む。

『ねえねえ、エストはどうしてそんな格好になっちゃったの?』

『そっだよー、上の服を着てなくて、そこに干してる理由は?』

「……煩い」

くすくすと笑う声が鬱陶しかった。エストは昼間の事を思い出す。足を滑らせて川に落ちたところまでは、まあ、己の不注意が原因と笑って流す事もできただろう。

気が付くとチンチクリンなガキが馬乗りになっていて、さらには初対面の相手にバカとまで言われてしまった。これで怒らないなら、いつ怒るのだとエストは思った。

その姿をエストは思い出す。曇り空のような灰髪や瞳。頬を染め恥じらいながら服の裾を引っ張る姿。……その努力もややむなしく、ちらりとだけ見えてしまったのだが。何故か思い出さなくてもいい事まで思い出し、エストはそれを追い払うべく頭を横に激しく振った。

それを見た声の主は、少し驚きながらも楽しそうに笑い出す。

『あれ、エストってば顔が変だよ』

『あれあれ、エストってばなんで照れてるの?』

「て、照れてなどいない!」

『『エストの怒りんぼ』』

「黙れ……っ」

姿無き声に怒鳴りつけ、辺りはようやく静かになった。おそらくもう話しかけてくるつもりはないのだろう。エストは重く息を吐き出し、もう一匹の魚を手にする。

それを齧っているときまた頭に浮かぶ。

闇の服を着て、曇り空の髪を持つ……あの、名も知らぬ子供の姿。何故か、見ていると心の中がざわめいてしまう。今までに感じた事もなかった、何とも居心地が悪く奇妙な感覚。しかし……居心地が悪いのに『嫌だ』と思わない感覚だった。

「……何なんだ、あのガキは」

エストはわずかな怒気がこもったため息を零し、静かに目を閉じた。

服と靴が乾いてホつとしたボクに、朝っぱらからガーネットは言った。

「あ、今日は『象徴』探しは無しだからね」

「は？」

唐突に何言っちゃってるの、この人。ガーネットが『象徴』を探すって言って、ボクは頑張って遺跡の中を歩き回ってるんじゃないか。そりゃ、昨日は何もできなかったけど。

ガーネットはその辺で見つけた食べられるキノコを煮込んだスープに、丸いパンを千切って浸しながら食べている。いつも通りの彼だ。どこにも故障した痕跡なんてなかった。

いや、もしかしたら外傷ではなくて、中から壊れてしまったのかも。とか心配らしきことを考えていると、ガーネットは申し訳無さそうに『理由』を教えてくれた。

「それがね……食材、無いんだよ。コレが最後。私が買ってきたのは『比較的』安かった香辛料とか調味料の類だね。知り合いが資金を届けてくれるまで、自給自足になるよ」

「……本当に？」

「こんな冗談は、できれば言いたくないかな」

「……」

無意識に手にしているお皿、というか中身のスープを見る。唐辛子が入って、少しピリつと辛いスープ。淡泊なキノコとよく合う、インパクトの強い味だ。さすがに飲みすぎると喉が痛くなりそうだけど、ボクはこの味は嫌いじゃない。身体が温まって幸せだ。

……とはいえ『ピリ辛キノコスープ』ばかりって言うのはなあ。二日に一回朝か昼についていうなら、旅の最中だから仕方が無いって事で、何とか我慢できると思いたいけど。

作業を中断して自給自足、か。つまり昨日ボクがやろうとした事を、今度は全員でやるって事なのかな。でもこの辺りって山菜の類はあまり無いから、魚狙いの方が効率よさそう。

少しばかり蘇る昨日の悪夢。

「じゃあ、今日は魚を探すわけ？」

「そういう事になるね。私は野鳥や野うさぎも探すけど、二人は川で魚を」

「ぼ……ボクはガーネットと一緒にいいな！」

決められる前に割り込む。本気でしばらくは川に近寄りたくない。こう、野生的な勘がボクに川から逃げると言ってくる。そしてボクは、その『お告げ』に全力で従った。

「いや、さすがに体力が必要な仕事だから——」

「大丈夫！　ボクはこれでも、家の雑用を押し付けられてたし、平気！」

ずずい、とガーネットに接近して力説する。ボクが川でドジをしなければ、何の問題も無い事なのかもしれない。でもその『ドジをしない』自信が、今のボクには無かった。

元々、運動神経だって人並みか、それより低い。目も当てられないほどドジではないのは幸いだったけど、基本的に飛んだり撥ねたり動き回ったりするのは苦手だった。

というか、普通に恥ずかしい。昨日も落ちて、今日まで落ちたらつて。

想像するだけでも顔が赤くなりそうだ。

「まあ、そこまで言うなら……」

ガーネットがちらつと、隣にいるヴァーミリオンを見た。

「僕は別に構わない」

パンをかじりながらヴァーミリオンが呟く。まあ、魚ってちよつとした物音ですぐに逃げちゃうからね。一人の方がやりやすいかもしれないし……と、心の中で言い訳する。

でも本当は思っていた。どっちに行っても、どうせ役にはたたないだろうと。体力も無いし知力だって乏しいボクに、できる事なんてほとんど無い。いつも通りに『象徴』を探して遺跡に行った方が、川に行くより森を歩き回るよりずっとマシなんじゃないかって。

ずず、とスープをすすりながら考える。

そもそもボクにできる事って、ボクだからこそのできる事ってなんだろう。そもそもガーネットが言う『色を知る者』の意味さえも、今のボクは手がかりとなるモノさえ見つけられない。

言われるままに旅に出た。家出という理由で。

親がいないから旅に出られた。それなら、もしも二人ともが家にいたなら、ボクはこうしてここにいただろうか。家出でも旅でもいい。あの町を遠く離れた場所に来る事ができたかな。

……もしも家にいたなら止めてくれただろうか。ガーネットと旅に出るって言ったら、知らない人で行ってはいけないと。あの二人は『親』として、ボクを止めてくれたかな。

心配して、くれたかな。

世間体とかじゃなくて……ちゃんと心配してくれたのかな。

考えていると虚しくなる。確認する方法なんてないのに、バカみたいだ。そんな事ありえないと思いつつも、心の中の甘い部分が『そうだったらいいな』とのんきに笑う。

「よし、お腹もいっぱいになったし、さっさと探そう！」

「張り切ってるね」

「だって美味しいもの食べたいから。それに遺跡の中って薄暗いし、無機質な感じで苦手なんだよね。あと、なんかやな感じがするんだよ。全身がチクチクって、痛いくらい」

あとゾワゾワもする。あれは……そうだ、友達と集って怖い話をした時の感覚に、とても似ていると思った。というかあの時の感覚と同じものかもしれない。居心地が悪い感じがする。

まあ、何か出てきそうな場所だけど。何といっても大昔から存在する遺跡だ。

あの中で何人が死んでいても、少しもおかしく無い。

「嫌な感じ、か……」

「……」

ガーネットとヴァーミリオンは、何か心当たりがあるらしい。が、

それを訪ねて遺跡に行きたくなくなったら二人もボクも困るので、あえて尋ねたりはしない事にする。そうは見えていないのかもしれないけれど、これでも怖いモノ——幽霊とかは苦手な部類だった。

こう、存在そのものは否定していない。幽霊という存在がいてもいなくても、ボクには関係ないと思っっているから。いきなり目の前に現れたりしなきゃ、まあいても別にいいかなと。

それに——時々、思う事があった。死んだ人に会いたいって。

優しくかったおじいちゃんやおばあちゃんとか、思い出すだけで心が暖かくなる。

実際にもう一度会えたなら、その姿だけでも見る事ができたなら……。

甘いと言つか子供っぽい気がする。でも、あの『夫婦』との生活に耐えられたのは、おじいちゃんとおばあちゃんが小さい頃のボクを、何度も励ましてくれたからだ。

何年も前に、相次いで亡くなったけど……会えるなら会いたい。時間が何とかしてくれると言った二人に、ボクはどうしても聞きたい事があった。ボクはボクなりに頑張った。だけど『あの人達』との間はちつとも埋まらない。

それは『どっちが悪いのか』を、ボクは聞きたかった。

聞く前に、それを聞いてみようと思える前に、二人とも死んでしまったから。

「さて、そろそろ出発しようか。っと、その前に食器を洗わないとね」

ボクがからになった食器の底を見つめてぼんやりしていると、ガーネットとヴァーミリオンが立ち上がった。慌ててボクも立ち上がって、使った食器を手に二人の後を追う。

と、その前に荷物からフカフカのタオルも引っ張り出した。ついでに顔を洗ってさっぱりしたくなったから。どうも、頭の中に渦巻く何かがあるような感じがする。それも直視できないし視界に入れなく無いような、気持ち悪い塊がずっしりと押し掛かっている。

身体の中心に重りをぶら下げた、という言葉があう感覚だった。それは、こうして食器を洗ったり顔を洗ったりしている間も続く。気持ち悪くない、でも気持ちが悪い。

吐きそうな嫌な感じのする気持ち悪さじゃないけど、どうしてもんな思いを抱いたのかがわからなくて気持ち悪い感じだった。原因がハッキリしないから、よけいム力つく。

もしかして——憑いたのかな、何かヤバイものが。

嫌な想像をしてしまったボクをよそに、ガーネットとヴァーミリオンは洗い終わった食器を手に洞窟に向かい始めている。またボクは慌てて荷物をまとめ、二人を追いかけた。

ちよつとはボクに意識を向けてくれてもいいのに、なんて思ってみる。

「それじゃ、私は先に行こう」

あわあわと準備をしていたボクを置いて、さつさと歩き出すガーネット。ちなみにヴァーミリオンは荷物をすでに纏めていたらしく、すでに川に向かってしまっている。

「ちよつと待つてよ。ボクは置いてけぼりなの？」

「あー、そういうわけじゃ……そうだ、山菜や木の実を探してくれるといいな。獣はさすがに危険だからね。そういうのは私やヴァーミリオンが何とかするから」

「……うん」

まあ、わかってたからね。というか『狩り』をしると言われても、どうすればいいのかさえわからない。イメージならあるけど……それは所詮、イメージでしかないから。

ちなみにボクの『狩り』に対するイメージは、弓矢とか罠を仕掛ける事。猟師さんなどの専門の人が、何日も山に籠って獲物を探しては仕留めてくる……そんな感じだ。

あの町にはいなかったけど、少し山奥になる村にはいた、というか、村の大人の男の人はみんな猟師だったといっても過言じゃない。学校の先生やお医者様など別の専門職の人以外はみんな猟師——あ

るいは漁師に等しかったと思う。それらで生計を立てている人達だ。本で読んだり話に聞いたりしただけの知識しか無いけど、同じ事をやれといわれたらと思うとさすがに『やってやろうじゃないか』とは、ボクには言えなかった。非常に困る。

「やっぱり、向き不向きがあるよね」

などと呟き自分を慰めつつ、ボクはガーネットを見送ってから、彼とは違う方向に向かって歩き出した。せめてこれをパンパンにしたいな、と手にした小さめのカバンを見る。

せいぜいボクの頭がぎりぎり入るような、小物しか入らなさそうなカバン。確かガーネットが香辛料を入れていたヤツで、彼から『コレに入れるといいよ』と渡されたモノだ。

何でも曇り空を見て、途中で雨に降られて紙袋がダメになるかもしれないから、雑貨屋でちょうどよさそうな大きさのカバンが無いか探して、一つ売れ残ってたのを買ったらしい。

その時は単に曇っていただけだったけど、もしもガーネットが思ったように雨が降ったら大変だっただろうな。ヘタすると朝のような食事さえ、取れなかった可能性がある。

「とりあえず、遺跡の方に行くか……」

昨日探し回ったのは、遺跡とは違う方向だった。だから今日は遺跡の周辺を歩き回る事にした。ある可能性はわからないけど、同じ場所を探し回るより賢い選択だと思う。

遺跡の周辺にも森は広がっていたはずだし、何か見つかるというけど。

しばらく慣れた木々の合間を進むと、遺跡の姿が齒の向こう側に見える。ガーネットは遺跡の外観は『白』だと言っていた。やっぱりだけど、ボクにそれは見えなかった。

本当に『色』ってあるのかな。もう全部無くなってるんじゃないかな。自分に見えないものが、ちゃんと本当に存在するっていう確信は、なかなか持てるものじゃないと思う。

だってボクは『知っているだけ』だ。

色が存在するという事を証言するのは、今のところガーネット達だけ。

それ以上の証拠は無く、そして同時に証言も無い。すべてウソでもおかしくない。

だけどボクは『色』の存在を信じている。

知っているから、信じる。

だから見えていなくても信じた。……信じたかった。

「……」

びた、と足が止まる。信じなければいけない事ばかりが、真つ先にボクの中でグラグラと揺らぎ始めていた。ねえ、もし『色』が無いなんてウソだったら、とか考えてしまった。

自分に尋ねても答えなんて無い。だって、答えるべきボクが迷っている。どんなに分厚くても我慢するよ。もしも本を読んで答えがわかるなら、ボクはそれを読みたい。何年も時間がかかってもかわない。この苦しさや重みから開放されるなら。

「……って、何考えてるんだろ、ボク」

こんな後ろ向きのボクはボクじゃない。ばしばしと頬を叩き、へしゃげた根性を叩きなおしてやった。視界が歪む程度に涙が出たけど、性根を叩きなおせたなら問題なし。

「よーっし。木の実でも山菜でもいい、何でも見つけてやるーっ！」
カバンをぶんぶん振り回す。昨日は何も見つけられなかったぶん、今日を頑張らなきゃいけない。確かに旅に出た目的の意味は気になる。世界がどうなっているのかも。

だけど『今』やら無きやいけないのは、この胃袋を満たす食料の確保。大切な目的を達成する前に飢え死になんて、寒すぎるシャレにもならない——まさに『悪夢』。

足を前へ進める。季節や気候的に『何も無い』という事はないはず。この辺りはボクの故郷とそんなに離れた場所じゃないし、同じ感覚でもさほどズれる事は無いだろう。

この時期、ボクの故郷ではいろんな果物が取れる。雪の着雪が終

わり、あちこちに実りが生まれ始めている。だから念入りに探せば、きっと何かは見つかるはずだ。

というか、この『ちよつと肌寒いけど基本的に暖かい』気候で、何も見つからないなんて普通に考えればありえない。今は『プチ実りの季節』って感じなんだから。

見つからないのなら、それはボクが怠けた証に違いない。探し方が悪いせいだ。自らに脅迫めいた事を言い聞かせながら、ボクははるか先に大きく見える遺跡の方角へ歩いていった。

「――」

そこへ何かの話し声。いや、物音？ 小さかった上にタイミング悪く風が吹き、その声とも音ともわからない何かはかき消されてしまった。……でも、そんなに遠くじゃなさそう。

ざばざば、と昨日聞いた記憶がある水の音が聞こえてきたのは、その直後。

考えないようにしても、嫌な予感がしてしまう音だった。今すぐにもでも忘れるべき記憶が高速で蘇ってくる。止めようとしても無駄な抵抗で、ボクの気分は激しく盛り下がった。一度あれば二度目もある、二度ある事は三度目も、とか……またあの変な旅人の青年なんだろうか。

なんて嫌な想像だと思いながらも、あの光景が頭の中から離れようとしないうとしない。

別に変な光景でもなかった。

ちよつとだけ、あの人なんだかつこいいなー、とか思ったただけだし。ガーネットともヴァーミリオンとも違った雰囲気。普通に逢つていたなら、少し見惚れたかも。

そう、あんな初対面にもかかわらずケンカを売り買いするような普通じゃない逢いじゃなかったら。たぶん、性格的に相性が悪いんだろう。でなきゃあんな事には、ね。

って、どれはどうでもいい事で。問題は物音の主が誰なのかって事で。

「……誰、なんだろう」

少し大きめの草むらに隠れるボク。勢いに任せて飛び出す勇氣は、さすがに無かった。この辺りは流れも緩やかで浅いけど、今日は寒くないから誰かが水浴びしているかもしれない。

だったら覗かなければいいのに、と思いながらも、ボクはそつと川を覗き見た。

「……」

そこには長い髪 of 青年が一人。この位置からは後ろ姿しか見えな
いけど、昨日のあの旅人じゃないのはわかった。ボクの少し前には
荷物が置かれていて、服と靴が纏めて置かれている。

っていうか、ゆっくりと横を向いた『彼』は。

「ヴァーミリオン……？」

そこには、何故か川の中に立っている——半裸のヴァーミリオン。
長い髪の毛を下ろして靴とか脱いで、ズボンを膝まで手繰り上げた
状態で、じつと川を見つめていた。

なんていうか色気があった。

ぞくつとする。息が止まりそうだった。

——視線を離せない。

故郷のオジサンみたいに余計な肉が付いていない、お姉さん達が
齒軋りして羨みそうなすらつとした身体。だけどひよろひよろじゃ
なく、それなりに筋肉も付いている感じ。

美術品。そんな単語が頭の中に浮かぶ。

薄く細められた目が、陽の光を受けて煌めく水面を見つめていた。
魚を取っていると気がついたのは、その手が水の中に素早く突っ
込まれて、一匹の魚をつかみ出した瞬間だった。それを竹でできた
少し大きめの籠の中に入れて、倒れたりしないように石を置いたり
どかしたりして川の中につけた。たぶん、新鮮さを保つためだ。

ボクは啞然としていた。素手で魚を取るなんて、凄いなヴァーミ
リオン。もしかして昨日の魚もそうやって取ってきてくれたのかな。
もつと感謝して食べればよかった……。

となると、ボクって邪魔だね。魚が逃げるかもしれないし、こはさつさと離れて自分も負けないように木の実とか集めないと。ボクはゆっくりと後ろに下がっていった。

べき、と音がする。ベタな展開。枝を踏んでしまったボク。さーっと血の気が引いていく音とやらを、また聞いてしまった。

「……？」

ヴァーミリオンがこっちを向きそうで、ボクは慌てて草むらに隠れた。

別にやましい事はない。ただじっと見ていた事が知られると恥ずかしいだけ。あ、でも今度顔を合わせる時に恥ずかしいから、どっちにしたって同じ事なのかもしれないかった。

幸い、ウサギが何かが音を立てたと思ってくれたのか、ヴァーミリオンはまた魚とりに集中し始めている。ボクはそれを確認して、今度は音を立てないよう慎重に下がる。

できるだけ川に近づかないように……よし、遺跡の近くをうろつこう。

「はい、ストップ」

川に背を向けて歩き出そうとしたボクを、ひょいと抱える——ヴァーミリオン。そのまま川原まで運ばれてしまった。抵抗、とか考えるヒマも無い。恥ずかしくて、焦った。

「なな、ななななな」

「さっきガーネットに会って、君宛の言伝を預かった」

「……え？」

「この辺りは凶暴な獣が多いから、一人で歩き回るのは危ない。木の実探しは自分がついでにやっておくから、キミはどこか安全な場所待っていてほしい……以上」

そう言いながら歩いていったヴァーミリオン。ボクは川原に置かれた彼の荷物のそばにそっと下ろされる。それからしばらく見詰め合うも、何を言えいいのかわからなかった。

ボクが見ていた事に、いつ気がついたの？

最初からわかったの？

ああ、もう。どこから訊けばいいんだ。お礼を言えいいのか。教えてくれてありがとう、邪魔するかもしれないけどゴメンネ…

…とか？

少しの時間迷って。少しの時間だったけど、かなり迷って。

「ここで、見ててもいい？」

無難すぎる言葉を発していた。

「構わないよ。暇になったら僕の荷物を枕にして、眠るといい」

「……いや、さすがにそれは。でもありがとう」

確かにお昼寝したいお天気だけど、さすがに彼の服を枕にするのには迷いがある。絶対無いと思いたいけど、よだれとかでちゃったら大変だし、覗き見以上に恥ずかしいし。

ボクは荷物のそばにあった石の上に座った。ヴァーミリオンは川に戻って、また静かに水面を見つめている。呼吸さえできないほどの緊張感。心臓の音だけが聞こえる静寂。

気配を殺す。そして魚を油断させる。掴み取るその瞬間まで、ヴァーミリオンはこの世界から『消失』しなきゃいけない。水の中の魚は、他の何よりも素早く動けるから。

呼吸は小さく、動きは無く。ボクが今見ているヴァーミリオンは、水の中に建てられている石像——うっん、石に引っかかった枯れ木。あるいはそれよりも気配が希薄だった。

改めて思う。

ガーネットもヴァーミリオンも……『人間』じゃない。

人間とよく似ているけど、きっと細かいところがいっている違うんだろう。専門家じゃないとわからないような部分が、わずかなズレが、彼らを人間と違う存在にしている。

なんて、空想としか思えないような事を考えた。でもそれが一番『真実』というヤツに近い気がする。だって——と考えたボクの耳に、ばしゃりという水音が届いた。

ヴァーミリオンがさっきより大きな魚を、その手に掴んでいる姿

が目の前にあった。

「ふう……」

さすがに気配を殺す事に集中するのは疲れるみたいで、ヴァーミリオンはそのままボクの隣にきた。額に滲んだ汗を拭い、緊張をほぐすように大きく息を吐き出す。

そのまま二人して、ぼんやりと川の流れを見ていた。

さっきと同じだけど違う、静かな世界。ボクの記憶の中には川は『青』とか『緑』という色を持っていると刻まれている。だからたぶん、この川も『青』か『緑』なんだろう。

ヴァーミリオンにも、そう見えているのだろうか。

訊こうかと思っただけどやめた。それじゃ意味が無いと思うから。ボクのこの目で確認しなきゃ、きっと何百回尋ねたってボクは納得しないと思う。納得する事なんてできない。

だから。

「……ねえ、ヴァーミリオンは神様の事どう思ってるの？」

「神様……ああ、『あの人』の事か」

ボクは違う事を訊く事にした。まあ、神様——色を奪った人の事を訊いても、どうにかなるってワケじゃないけど、気になる事を少しでも減らしておきたいと思っただけ。

それに……ガーネットは何となく、教えてくれない気がした。ボクを思いやってくれているのはわかるんだけど、嬉しいんだけど。まるで、便利な道具扱いって感じもする。

優しいのも全部ボクが『色を知る者』という、神様の筋書きに手出している便利な存在だから……そう思う、そう思い始めてしまった自分が嫌いになりそうだった。

逃げるボク。だからヴァーミリオンに訊く。もしもここにいるのがガーネットなら、ボクは疲れた彼を労うだけで、あとは遺跡が暗いとか愚痴を零して、それで終わり。

最低だな、ボクは。

ガーネットを信じられないで、ヴァーミリオンの優しさに逃げた。

今も彼は、ボクの質問に少しだけ戸惑った様子を見せて、でもちゃんとボクに答えようとしてくれている。

「……『あの人』の悲しみ、絶望は理解できた。それに関しては痛いほどわかった。実際に見ていたわけじゃない。だけど、その身に余る出来事は、見ているだけで伝わった」

他の仲間——ガーネット達がどうなのかはわからない。でもヴァーミリオンは『すべてが終わってから』生まれたいらしい。すべて、つまり世界が戦争で滅んでしまってから。

彼らの仕事は基本的に『神様のお手伝い』だった。呼ばれたら参じて、それ以外は勝手気ままに日々を送っていた。読書をする者、遊ぶ者……時間の潰し方は様々あった。その間も小規模な戦争はまだ続いている、人間はたださえ滅った数を愚かにもさらにさらに減らした。

そして神様はある日、ヴァーミリオン達を集めて言った。

——もうこの世界は終わった。

直後に神様が瀕死の世界と人間に呪いをかけた。そして、死んだ。神様が最後に遺した呪い。

それは……この世界から『色』を消す事。

「世界から『色』を消す事は、理解できなかった。人間はひどい事をしたと思う。それについては僕だって嫌というほど見た。それでもこの呪いだけは理解できない。あの頃の人間を憎む気持ちはわかる。僕だって嫌いだ。だけど『今』の人間さえも弄ぶ事は……やはり許せない」

そして、ヴァーミリオン達はシナリオの上に『傍観者』として残された。神は去り、世界は無視してはいけない大きな歪みを抱えたまま、いくつかの似た演劇を壊れるように繰り返す。

滅んでは蘇り、そしてまた消えていく。

終わりと始まりは常に同じ。

違う道を歩くだけ。すべてが滅びから始まり、終わりにまた滅びへ帰る。

見ているだけの『傍観者』は、それを終わらせるために旅をする。そして彼らは、ボクが持っていたあの『絵本』を生み出して、世界に放った。

「歪んだ世界を元に戻すために、僕達は『傍観者』を名乗る『出演者』になった。そのための道具がああ『絵本』。かつての人間が当たり前のように持っていた力を、ほんのわずかでも有する人を探し出すための道具。……そして、君は『色を知る』力を持っていた」

「だから『色を知る者』？」

「そういう事。僕達はあの絵本を追跡して、持ち主の力の有無を調べる。そして何かしら力を持っている、秘めている事がわかったら事情を説明して……後は君と同じような感じかな」

「なるほどね……」

この場に絵本が無い事を、ボクは悔やんだ。どうせならもつと絵本について詳しく尋ねたかったから。絵本を読める人と読めない人がいるらしいし、ボクとしてはその辺りも気になる。

読める人が『色を知る者』だったりする、ありがちだけど選ばれた人ならば。

選ばれなかった場合は、どうなってしまうのかなって。ただ『ワケわかんない』で捨てられるのかとか、ヴァーミリオンが知っているとは限らないのに、訊いてみたくなって。

でも取りに帰ろうとは思わなかった。

もう少し、ヴァーミリオンとまったりしたい。

だけど彼は、まるでボクにイジワルでもするかのように立ち上がった。充分に休憩も取ったから、また魚とりを始めるのだろう。…

…見てるだけって、すっごくヒマだ。

「……よし」

そして、ボクは靴下と靴を脱いだ。

啞然とするヴァーミリオンを置いて、石の上を歩く。

「ボクも魚取るね！」

「……えっと」

「無理って言ったら怒るからね」

そしてボクは浅い川の中に、ざばざばと音を立てながら入っていた。

その瞬間、驚いた魚が一斉に逃げていく。こいつらが敵。ふふ、絶対に捕まえて美味しく食べてあげなきゃ……一人笑い出したボクの闘志は、いつになく燃え上がっていた。

水は冷たいし、魚はちよつとぬるつとしている。どんな『色』かは見えない。ガーネット達のような『他人』を介さなければ、ボクにはその存在さえ確認する事ができない。

だけどボクは信じる。

この世界に『色』が存るって。

だからもうちよつとだけ、もう少しだけ一人で頑張ってみよう。できる事も、できない事も考えないままに、ボクなりに前に進む。

沈みかけた太陽に向かって、そつと手のひらを向ける。ボクには沈んでいく太陽の『色』は見えないけど、この光をちゃんと温かいと感じられるなら、それでいいと思った。

* * *

翌日。ヴァーミリオンを見送りに近くの街道沿いまで来ていた。彼はこのまま、別の場所へ行くらしい。

どうもガーネットの仲間とやらは、世界中を旅しているらしくった。目的は聞かされていないけど、ボク——つまり『色を知る者』を探している、というわけじゃないようだった。

探す対象の中にボクは入っていたと思うけど、たぶんそれだけじゃない気がする。

「それじゃ」

「気をつけてね」

荷物を抱えて歩き出すヴァーミリオン。ガーネットは別れには慣

れているのか、普段通りといった様子で軽く手を振って見送る。まるでちよつと買い物に行く人を、見送るようだった。

ヴァーミリオンは別の仲間を訪ねつつ、かなり遠くまで行くつもりらしい。

「大丈夫だよ。私達は基本的に旅に慣れているし」

「だけど……」

「それに『普通じゃない方法』で旅をするから、危険な事はないからね」

「……」

普通じゃない方法って何だ、とつつこむ気力も無かった。まあ、たぶんあの懐中電灯と同じように大昔の技術を使っているのだと思う。でもそれを説明されたら、きつと混乱する。

まあ、安全ならそれでいい。危険な事がないなら、ボク的にはそれで問題なし。でもしばらく会えないって言うのは寂しいかな。ガ―ネットに不満があるわけじゃないけど、三人でそこそこ賑やかだったのにいきなり二人って言うのは……寂しいというか、静かだから。

だんだんと遠ざかって、見えなくなっていくヴァーミリオン。

……また会えるといいな。できれば近いうちに。

五章 イロイロナヒゲキ

朝早く、ガーネットは近く——といっても遺跡から『一番近い』だけで、往復に半日くらいかかる場所にある宿場町に、二人分の食料と衣類などの他雑貨を買い出しに行った。

あと二週間くらいは『遺跡』の傍で寝泊りし、色の『象徴』を探すらしい。出かける時にガーネットは『見つけたモノは一箇所に纏めておいてね』と、何度も言っていた。

全部を運べなかったとしても、遺跡内の一箇所に固めておけば確認しやすい。たぶんそういう事を言いたかったんじゃないかな、とボクは解釈した。

ただ、一つだけ重要な問題が浮上している。

それは——纏めるほど捜し物が見つからない事。

腹時計的にもうすぐお昼なんだけど、ボクはまだ何も見つけられずにいたのだった。

仕方がないので『遺跡』の屋上に向かう。この場所がお気に入りになった。

いつか色を『見る』事ができるようになったら、真っ先にここからの眺めを思うがままに独占し、堪能しつくしてやるう……と、心で思いながら昼食タイム。

といっても縦に切り込みが入ったパンに、塩とコシヨウを降りかけて焚き火で炙ったソーセージを挟んだだけの、とてつもなくシンブルで簡単なシロモノ。まあ、お腹に溜まるなら何でもいいかなって感じだった。それにまずいわけじゃなく、すっごく美味しいし。

「んー、おいしー」

頬張りながら満面の笑みを浮かべるボク。

ああ、久しぶりだなあ、この極上ソーセージ。

お金の都合ができたからって、やっと自給自足の生活から解放されたボクは、まさに天にも上るような幸福に浸っていた。貧乏はや

っぱり嫌だと思つ。飢えほど恐ろしいものは無い。

それにしても、と思ひながら、ボクは少し欠けた『お昼ご飯』を見た。

「……ガーネットつて料理が上手だなあ」

最初の一口を飲み込んでから、ボクは呟いた。旅の間、何度か野宿する事になつて料理を作つただけど、ボクよりずっと手際がよくて味付けもちょうどいい感じだった。

そりゃ、ボクだつて簡単な家庭料理なら作れる。

まあ、レパトリーは少ないけど。

これから旅を続けるなら、少しでも料理を覚えた方がよさそう。いつまでもガーネット任せにするわけにはいかないし、子供じやないんだつて事を主張するいい機会だ。

今日の夕飯は自分が作ろう、とボクは決意する。反対されても知つた事か。いつそ『象徴』らしきモノを大量にかき集めて、確認作業という用事を無理やり押し付けてもいい。

まあ、何が何でも作るつて言い張つたら、渋々でも作らせてくれそう。

だから本当に問題になつてくるのは『献立』。ガーネットは買い物を担当しているからある程度考えているだろうけど、ボクの場合はぶつつけ本番状態なんだから。

今のうちに野宿でも作れる料理を、考えてみないと。

やっぱスープかな。近くに川があるから水に関しては問題無いし、変な材料でもない限りそれなりのものが作れるだろうし……。具を多く入れたらお腹にたまつてハッピー。

もぐもぐ、と昼食を胃袋に押し込みながら考える。まあ、ガーネットが何を買ってくるかでどうなるか不明だし、今はおとなしく自分の成すべき事だけを考えるべきかな。

「んー」

大きく身体をそらせて、筋を伸ばす。

そのまま勢い余つて後ろに転がつて——ガーネットじゃない、誰

かの足が見えた。

「……ふん、ガーネットのヤツはいないのか」

そう言いながらキョロキョロするのは長髪美形。

例によって見覚えはナシ。

背格好はガーネットより少し年上って感じで、着ている服は重そうな感じがするデザインに見えた。そんなに寒い季節じゃないけど、彼はコートっぽい服を羽織っている。

そのコートっぽい服が風でバサバサしないためなのか、太かったり細かったりする複数の紐が腰に巻かれていて、袖口は通常の二倍以上ってくらい広く作られていた。

後頭部で一纏めに結われた長髪や整った顔つきからして、何となく初対面の人には『長身美女』と思われるくらいそうな感じがする。

実際、ボクも声を聞かなかつたら女の人だと思ったはず。

で、そのクールビューティなお兄さんは、細長い楕円形のメガネのずれを直す。

おかしくもかっこよく見せようとしているわけでもない仕草だけど、彼には妙に似合って見えた。仕草が似合っているのか、メガネという物体が似合っているのかは不明。

「その……どちら様？」

恐る恐る声をかけてみる。

それから、この人が悪い人だったでしょう、と思ったけど後の祭り。

「汝はガーネットから、我の事を聞いていないのか」

「うん、全然。仲間がいるって事は言ってた気がするけど」

「ならば仕方がないな。我はアマランス。不本意ながらガーネット——そして他の連中とは同じ目標に向かっていているという事になっている。それ以上の事は言いたくない」

「はあ……」

つつけんどんな対応。普段なら『何様だテメー』くらいの事は思うボクだけど、いい意味でも悪い意味でも外見によく似合う態度だ

ったので、ああ、まーいいか、とか思っていた。

それにしてもアマランスは、いったい何をしに来たんだろう。ガーネットに用事でもあったのかな。確か彼の第一声はそんな感じだった……ような気がするし。

何だかタイミングが悪い人だなあ、とボクは思う。とりあえず彼がこの近辺にいない事だけでも伝えた方がいいだろう。もしかしたら別の場所で、他の用事があるかもしれないし。

「ガーネットは買い物に行っちゃったよ。暗くなるまで帰ってこないと思うけど」

「そのようだな……ふむ」

顎の近くに指を当てて、何か考え始めるアマランス。ズレたメガネを直す姿もかなり似合ってたけど、何かを考えている表情もビシッと似合う人だった。知的美人、って感じかな。

たぶん、とても頭がいい人なんだろうな。

ガーネットもそうだけど知的に見える人って、二人が出現するまでボクの周りにはいなかったタイプだ。カッコイイというか、憧れている感じというか、いい感じがする。

そう言えばガーネットの『仲間』って、結局何人くらいいるんだろう。いつか全員と顔をあわせる日が来ると思うけど、普通でいいから他の人はあんまり変な人じゃないといいな。

……まあ、ボクだってあまり人の事言えないけどさ。

「ところで、さっきから見ていたのだが」

「ん？」

「汝とガーネットは、この『遺跡』で何をしているのだ？」

「何って……」

こういう『遺跡』にしか残されていない『色』という存在の残り香。ガーネットが『色の象徴』と呼ぶモノを探している事を、もしかしてアマランスは知らないのだろうか。

「説明は難しいけど……その、『探し物』かな」

「……は？」

「いや、ガーネットがね、この『遺跡』にある色の『象徴』を探すって言うから」

それからこの『遺跡』に来てからの事を、簡単に説明していく。ボクがガーネットの目的をよく知らない事は伝わったらしく、話が終わった直後、アマランスの口からはボクが今まで聞いた事が無いくらい深いため息が漏れた。

あと何か呟いている。

あの愚か者め、手緩い、卑怯者、ほか多数。何だか酷い言われ方だった。一部聞き取れなかったとはいえ、あれだけ罵詈雑言を叩きつけていれば、鈍いボクもさすがに気がついてくる。

八割以上の確率で、アマランスはガーネットが嫌いだ。

単にガーネットの事が苦手なだけかもしれない。ボクは苦手な人って少ないけど、一人もいないわけじゃない。だけど苦手というだけであれだけの反応は……普通、無いよね。

もちろんアマランスという人物自体が、そういうタイプの可能性もある。

判断するには、ちょっと交流が足りないかな。

「まあいい。我の用事は汝だ」

「ボク？」

「汝に見せておきたい事がある。ガーネットや他の者では見せないだろうからな。我が一肌脱いでやろうと思ったのだ。感謝して我についてくるがいい。しばし歩く」

「えっと、『遺跡』から離れる……とか？」

「心配するな」

そこまで言って、アマランスはボクに背を向ける。彼の長い髪がボクの目の前で、まるで踊るようにさら々と揺れた。そのツヤツヤでサラサラな長髪は羨ましい。

「我の目的地は『地下』だ。この建物は地下にも広がっている。……その最下層に行く」

「……最下層」

ボクの声は、たぶんかなり沈んでいたと思う。

その場所には午前中に行った。というか探そうと思って真っ先に向かった。ただと実際にいたのはほんの数秒。室内を懐中電灯で照らした瞬間、ボクは逃げ出していたから。

初めて中に入った時の『マネキンバラバラ殺人事件』も酷かったけど、あれはよく見れば確かに人形そのものだったし、今では不気味と思っても逃げ出すほどじゃない。

慣れたとも言う。というか、どこへ行っても似たような光景で、慣れるしかなかった。

そして地下には『本物』が転がっていた。懐中電灯の光の中に浮かび上がる、無数の白い棒とか穴が開いた丸い物体とか。……あう、思い出しただけで気持ち悪い。吐きそう。

大小さまざまな棚が散乱する、まさに散らかり放題の室内。

本当に足の踏み場も無いくらい、人間の骨が転がっていたのだった。

まるでその場所では『人間』を売っていたかのような光景。

たかが骨されど骨。見た目が人間っぽく見えるマネキンとはワケが違う。

明らかに人間のものとわかる頭蓋骨を視界に入れた時に感じたのは、背中を中心に肌の上をぞわりと這い回る虫の感覚だった。鳥肌なんてかわいらしいレベルじゃない。

マネキン事件は『視界的』に恐ろしかった。怖かった。

見た瞬間は叫びそうになったし、ガーネットがいなかったら叫んで逃げ出した。それでも一年後には事件など忘れているか、覚えていてもくすつと笑えるような思い出になる。

でも人骨事件は違う。

たとえ詳しい光景を忘れたとしても、出来事そのものを忘れる事はできない。

そして、思い出して笑うなんて事もない。

心の隅にじわりと滲んだシミみたい。

アマランスには悪いけど、ボクは死んでも地下には行きたくなかった。この『遺跡』に地下が存在しているという事、それ自体を記憶から追い出してなかった事にしたい。

「何をしている。さっさと行くぞ」

でもアマランス相手に抵抗は無理そうだった。逃げても捕まえられて、抱えられて、荷物みたいに運ばれてしまいそう。体格の差つていろいろと不都合が出てくると思う。

別にガーネットやアマランスより大きくなりたいてってワケじゃない。とりあえずあと頭一個分くらいは大きくなりたいと思う。さすがに大人になってもこのままだ辛い。

歩き出すアマランスの背中を、ボクはちよつと羨ましそうに見ていた。

昼間なのに『遺跡』の中は薄暗い。懐中電灯がないと、物に足を引っ掛けて転んでしまいそうなくらいだった。アマランスはボクの懐中電灯の明かりの、その先を歩く。

……前、ちゃんと見えてるのかな。ちよつと不安になった。

どれくらい降りてきたのかわからないけど、まだ半分も来ていないと思う。この遺跡は何故か知らないけど階段同士が近い場所にあるからよかった。歩き回らなきゃいけなかったらと想像するだけで、今すぐに三つ指付いて『実家に帰らせていただきたます』とか言いたくなる。

「……あの方」はかわいそうな方だった」

ふいに、アマランスが口を開いた。ボクの視線に気がついたとか、ボクに言わなきゃいけない事を思い出したとかいうわけではなく、ぼんやりと思い出したって感じだった。

アマランスはボクを置き去りにする勢いで、すたすたと進んでいく。

でも明かりはボクが手にしている懐中電灯だけだし、ボクの前を歩く彼はちゃんと前が見えているのだろうか。正直、何かを思い出して語るより、前を見て歩いてほしい。

「すべての人に傷つけられた。誰もが加害者となつて、『あの方』を責め立てた。必死に守っていた『大切なモノ』さえ奪い去り、気が付けば何もかもを亡くされた。それがわかつていながらも、人間はまだ『あの方』から奪い、その優しい心を踏みにじろうとして」
その声は鋭利な刃物。

「失った事さえ知らぬ今の人間は『幸福』だ。絶望に等しい『喪失』が無いのだから」

「……」

「大切なモノを失ってしまったと気が付いた時、人間は形を失う。失ったモノの変わりに縋りつく何かを求める。……そしていつしか『失ったモノ』の存在を忘れるのだ」

かつん、とアマランスの足が止まる。気が付くとそこはもう地下だった。

中の光景を思い出したボクの身体はがたと細かく震えだし、今すぐにでもこの場から逃げそうになる。それを押し留めたのは、振り返ったアマランスの『言葉』だった。

「汝は『色を見たい』か？」

その一言でボクの震えは収まり、意識は室内の事ではなく彼の発言に向かう。

「汝が望むなら、一時的にだが色を『見る』力を貸してやる」

「……えっと」

突然の申し出に、ボクは何故か戸惑っていた。

そりゃ、『色を見たい』けど……怖い。

今まで自分が認識していた世界を根底から否定されそうな、ボクが抱えてきた世界が何もかも壊れてしまうんじゃないかって感覚に襲われる。気のせいだって言い切れないから、怖い。

そんな恐怖の一方で、ボクは壊れてもかまわないから『見たい』と思っていた。

確かに旅に出た一番の動機は『家出』だった。

でも色を『見る』事が含まれていないわけじゃない。

迷う。未知の領域を覗き見る勇気がほしい。あるいは拒否する勇氣も。

どれくらい悩んでいたのかわからない。たった数分かも、数十分かもしれない。

ボクはゆつくりと首を縦に振った。

「わかった。よく見るがいい。この世界の『真実』を」

そう言ったアマランスの指先が、ボクの肩に触れた瞬間。

——目の前のすべて、ボクが確認できる世界のすべてが別物に「変わった」。

壁一面に、手当たり次第に書きなぐられた『遺書』。

あるいは『断末魔』。時に大きく、時に美しく。時に異常な細かさで、幾重にも綴られているそれらが、容赦なくボクにグサグサと突き刺さってくる。

その瞬間、確かにボクの世界は『壊れた』。

——私の瞳は『青』。だけど鏡を見てもそう『思えない』の。どうして？

——どうして『色』が消えたんだよ。誰が消したんだよっ

——お祖母ちゃんが好きな色が見つかりません。綺麗な『紺』はどこですか？

——返せっ。俺達に『色』を返せよっ。俺達は何をしたって言うんだ！

——白と黒しかわからないよ。ほかの『色』が消えちゃったよ。

——こんな世界は嫌いです。だから死にます。死んだらきっと『色』を取り戻せる。

——俺はこれを『赤』で書いてるんだよな？ ちゃんと『赤』だよな！

——返して色を、返して、返してください。何でもしますから色を返してください。

——神様、助けて。私を赦して。

これは何だろう。

ちゃんと理解しているのに、認識する事を頭が拒否してしまう。そう、ボクにはそれがちゃんと『見えて』、はつきりと『読めていた』のだった。

「……どうだ、今まですぐ目の前にあつたのに『見えていなかった』世界は」

ボクが文字を眺めて呆然としていると、後ろに立っているアマランスが語りだす。それは以前ガーネットが言っていた、だけど詳しい説明をしてくれなかった『戦争』の話。

「ある日の事だ。とある大同土が戦争を開始した。元々仲が悪い——昔から揉め事を起こしていたのだが、いつもちよつとしたケンカのようにすぐ収まっていた。だから他の国が仲裁に入ればすぐに治まるだろうと、当事者である二国の住民さえ笑うように思っていた」

しかし。アマランスはとても苛立った声で続ける。

「仲裁に入ったタイミングは遅すぎ早すぎず、間違いなく正しかった。だが、二国の関係は手遅れだった。どうにもならないところまで悪化していた。そして所有しながらも『絶対に使つてはいけない』と硬く封じられてきた兵器に、奴らはついに手を出してしまったのだ」

まるで自らの退路を塞ぐように、二国は同時に『禁忌』に手を伸ばした。

手を出す、という行為そのものは、赤ん坊でもできる簡単な作業。それだけで一つの国が跡形も無く消えた。その『威力』に誰もが怯え——同時にその今まで知らなかった力に魅せられた。このままでは自分達の国も、跡形無く滅ぼされてしまうと恐怖する一方で、ならば同じ手段で敵対する相手を消し去ってしまえばいいと思った。それは次々と連鎖する。持たぬ国は持つ国に平伏した。そして持つ国同士で互いの領土と国民を消しあった。

何度も何度も何度も何度も。飽きる事無く『戦争』という行為は繰り返す。

天災よりも恐ろしい『人災』が広がる世界の片隅。ガーネットが『あの人』と呼び、アマランスが『あの方』と呼ぶ人物に、その人のすべてを壊すような悲劇が降りかかった。

……何があったのか、アマランスは語らなかったけれど。きっとそれは自分の死よりも惨たらしい悲劇で。

人間一人が壊れてしまうのに、充分すぎるほどの悲しみを生み出した出来事。

その結果が『色』という概念の破壊』と名付けられた——『呪い』。アマランスの話を聞きながら見続けているこの『叫び』は、その直後に混乱した人間達を書きなぐったモノ。アマランスがいう人間の浅ましさと醜さの『象徴』だった。

ある日突然奪われた『色』。

誰もがその事に恐怖し、否定した。そのためにこうして文字を書きなぐって、『色』が無くなったのは一時的な病気なんだと安心しようとしたんだ。

……実際は、そうじゃなかった。その日を境に人間は『色』を失ったまま。

これを書いた人達はそれを受け止めていたんだろうか。

受け止められず、拒否し——そのまま死んだのか。

呪いによる混乱を生き延びた人間は、次に贖罪を捧げて赦しを乞うた。

それは『あの人』とか『あの方』とか呼ばれている、ボクが知らない誰かに向けた思い。

でも、死者に生者の声が届く事は決してない。そして、相手が死んでしまった事など知らない『生き残り』達は、答えてくれない相手をいつしか神様として崇め奉るようになった。

アマランス曰く、国という組織どころか、自分自身という拠り所さえ無くした人間が縋りついたのは、壊れていると思えないほ

ど狂信的な崇拜だったという。

何となくわかってきた。どうして誰もが『神様』を崇め、その教えを守っているのか。

あの『夫婦』や他の人達は、神様のために生きている人形だった。百年も無い一生のすべてを生贄として捧げるように、何代にもわたって神様の赦しを乞い続けているんだ。

今の人間は——許しを請うただけの『人形』。この『遺跡』に転がっている、マネキンとかいう服を着せるための人形と、根底においては何も変わらない存在。

彼らの言葉はもう『謝罪』じゃない。

しいて言うなら『ご機嫌取り』。

もしも『あの人』にして『あの方』が生きていたら、きっと——。
「アマランス……っ」

突然聞こえたガーネットの怒鳴り声。彼には似合わない声。

何かが勢いよく吹っ飛んで転がっていく音が聞こえて、すぐに静かになる。音と声があった方にゆっくり離船を向けると、ボクから少し離れた床の上に倒れているアマランスがいた。

彼がさっきまで立っていた場所の近くには、息を切らせたガーネットがいる。常に浮かんでいた微笑はすっかり消えて、その顔にはぞつとするほどの殺意と怒り。ボクは——怯えた。

「キミが私を嫌うのは構わない。私達の行動を拒否するのもキミの自由だ。私個人として何かを言うつもりはない。それがキミなりの『あの人』への愛だ思いたというのなら、私達の誰一人としてそれを否定しない。……だけこの子を、他人を巻き込むのはやめてもらおう」

「……」

「いくら『あの人』を盲信して、その思いのあまりに暴走する事もあったキミでも、それくらい『常識』は持っていると思っていたよ。……正直、キミには失望した、アマランス」

「……何とでも言う方がいい。我は正しいと思った事をしたただけだ。

その者が色を『見たい』と言ったから、我は望みを叶えただけ。その者が望んだものを見せてやっただけの事だ」

「だからって『これ』を見せる必要は無い！　よりもよってこんな……っ」

「人間の醜さを見せる事はいけなないか。何故『色を奪われる』という事になったのか、それを知らせないままで全ての作業を終えるつもりだったのか、汝は。それとも巻き込んだ側の分際でいざとなれば、詳しい事を何も継げず切り捨てるつもりか……『あの時』のように！」

「そういう事じゃない……ただ」

「幼いからか？　それとも過去の過ちに、わずかながらに後悔しているのか？　……ならば何故その『子供』を巻き込んだ。何故同じ過ちを犯そうとする。仮に話す内容の半分も理解できなくとも、説明をしてやるのが巻き込んだ者としての最低限の礼儀ではないのか？」

そこまで言うと、アマランスはさっさと出て行ってしまう。残されたのはまだ意識が朦朧とした感じがするボクと、誰もいない方向をじっと睨んでいるガーネットだった。

「ガーネット、あの」

声をかけようとしたけど、何を言えいいのかわからない。ガーネットがあんなに怒っている姿なんて初めて見たし、そんな事態は想像もしてないし……ボクは混乱していた。

二人が何を言い争っているのがわからない。

だから、ボクにはガーネットに対して何も言えなかった。ガーネットは僕が混乱している事なんてすぐにわかったんだろう。いつも浮かべている微笑みを零して、口を開いた。

「……彼はアマランス。私の仲間だよ。本当ならこんな場所にはいないはずだけど、たぶん邪魔をしに来たんだと思う。アマランスは『色』を満たす事に反対しているから」

邪魔。

本当にそうだったんだろうか。

……訊きたいけど、訊けなかった。

「どうして、邪魔を？」

「彼は神……色を消した『あの人』の崇拝者、みたいなモノだから。自分が信じている人がやった事が間違いであるはずが無い、『あの人』の優しい心をスタスタに引き裂いた人間なんかには価値は無い、『あの人』の遺志に反する事をするなんて許さない、ってね」

「……」

「ごめんね。よりによってアマランスが来るとは思わなかった。いや、こんな事をするとは思ってもみなかったんだ。確かに彼は私達がしている事に反対しているけれど、こんな手段にでる人物じゃないかと思っていたから。最近は大人しくて、すっかり油断していた」

「いや、それはいいんだけど……」

視線は、無意識にあの壁に。色を『見る』事ができなくなった今は、ただ薄汚れているだけの壁に見える。でも確かにそこには今の人間が失った『色』が存在していた。

もう『色』は憶えていない。

記憶にあるのは言葉の『意味』だけ。この場で思い出すと、さつき見た瞬間の寒気にも似た嫌な感覚まで思い出しそうで、軽く頭を振って記憶をしまいこんだ。

かつん、と音が聞こえる。振り向くとガーネットが上へ向かって歩き出していた。

たぶん外に出るつもりなんだろう。

ボクはもう一度だけ奥の壁を見つめて、慌ててその後を追いかけた。

* * *

「アマランスは、ボクが嫌い？」
手を動かしながら話しかける。

「直球だな」

「いや、回りくどい事するの嫌いだから」

がしゃこんごしゅこん、と川辺で皿を洗いながら、ボクは隣のアマランスと話す。

彼と二人でじっくり話したいとボクが言った時、ガーネットは彼の事を獰猛な野獣扱いしているような事を口にして、必死にボクを説得しようとしていた。

さすがにその扱いは酷いと思ったので黙らせた。

そうして手に入れたこの時間。最後までボクの考えに納得していなかったガーネットが邪魔をしないよう、彼には焚き火の傍で『燻製作成』という雑用を押し付けて待機中。

新鮮な鶏肉の燻製の一部は、明日の朝ごはんになる予定。残ったこれからの旅の貴重な食料になるんだからサボらないでね、とガーネットには嚴重に釘を刺した、笑顔で。

これだけいろいろと手を尽くしたんだ。破談——ってわけじゃないけど、万が一にも火に油を注ぐような事にならないようにしなければ。がんばれ、ボク。敵は強大だぞ。

「で、どうなのかな」

問いかけながら、ボクは逃げたいと思う。同世代の子供と比べたら精神的にタフな方だと思っているけど、さすがに面と向かった状態で『嫌い』と言われるのは想定外。

内心どきどきしていた、怯えていた。皿を洗う手が震える。

「……我は、人間が嫌いだ」

洗い終わった皿の水滴を拭っていた時だった。それまでの数分間、いや数十分、ずっと無言だったアマランスは、まるで言うべき言葉を見つけたように喋りだした。

「汝だけに限らず『あの方』を絶望させた、人間という種が嫌いだ」

「そっか」

「……まあ、あの絵本を読めたのなら、汝だけは認めてやらん事も無いがな」

あれは『あの方』が最後にお創りになったモノだ。アマランスは
呟いた。

ガーネットが『あの人』と呼び、アマランスが『あの方』と慕う
存在は晩年、ボクが愛読してきたあの絵本——というよりその元
なるモノを作ったらしい。そして、彼らに言った。

もしもこの絵本を『読む』者が現れたなら、その者の意志を何よ
りも尊重し、その命と考えを守ってあげなさい。例え、私の遺志に
反する事を望んでも、無条件に協力しなさい。

そんな『遺言』を置き去りにして逝ってしまった。

だからアマランスは迷っている。大切な人が最後に残した言葉に
従いたい、でもその人を傷つけた人間を許せない。相反する心が身
体の中で蠢き、矛盾を抱えたままボクの前に現れた。

「……同じだったんじゃないかな、って思う」

「同じ？」

「アマランスも、『あの人』って人も。大切なモノを奪った人間が
嫌いで、憎くて、みんないなくなってしまうって思っただけそ
の一方で信じたかった。大好きだったから」

言いながら、ボクの頭の中には例の『夫婦』の顔が浮かんできた。
それも滅多に見る事が無かった笑顔……それを最後に見たのはいつ
だっけ。ちょっと気になって考える。

ああ、そうだ。

ボクが学校のテストで一番を取ってきた日だった。

あれはもう半年くらい前になるのかな。

最後に見た笑顔を思い出してしまったら、その時にどう褒められ
たのかも——どれだけボクが嬉しかったかも、ずっと忘れようとし
ていた事を全部思い出してしまった。

いつのまには『嫌い』になっていた。

だけど本当は『大好き』だった。

大好きだから些細な言動に一喜一憂して、勝手に怒って家出した。
心配してくれるかなって、思っただけ。

あーあ。ボクはガキ以外の何者でもなかった。

世界から色を無くした人が、今のボクと同じ事を思っていたとは限らない。けどそうだったらいいいなあって思った。本当に人間が嫌いになったわけじゃなくて、ただ……悲しくて。

悲しみが自分一人じゃ抱えられなくなつて、なのにそれでも悲しい事が減りもしないし止みもしないから。だから、憎む事で少しでも楽になりたかったのかなって、思っただけ。

「信じたい……か」

小さな声でつぶやいたアマランス。視線は遠く——と言うより、もう届かない『過去』を見ている感じに見えた。もしかして『あの人』にして『あの方』の事を思い出してるのかな。

そつえば名前も知らない人だった。

やった事から考えて、いろんな意味で凄い人だったんだろう。

まあ、いいや。別に聞きたいわけじゃないし——ボクから訊いていい事じゃない。二人が話してくれるまで気長に待つ事にした。ボクは興味と好奇心を押さえ込む。

とにかく、この数分間で彼の中で何か変わってくれただろうか。もちろんいきなり人間を好きになれとは言わないしできないだろうけど、少しだけでも見直してくれるといい。

せめてここは『人間』がたくさん暮らしている世界だって事を、少しだけでも思い出して頭の隅っこでもいいから認識して発言してくれればね……。いや、これは冗談じゃない。

この辺りはボク以外に誰もいないからいいけど、街中で『人間が嫌い』発言したら頭の中身がかわいそうな人扱いされかねない。それはちょっとかわいそう。

「まあ、いいや。ボク疲れたからもう寝るね。おやすみ……」

「……」

「あ、ガーネットと仲直りしてよね。今度殴り合いなんかしたら、ボクも殴る」

洗った食器を抱えて歩く。ガーネットは心配そうにボクを見てい

たけど、正直、今日はいろいろと疲れたので軽く報告だけをして寝る事にした。それにアマランスも何か言うだろうし。

焚き火から少し離れた場所で毛布にくるまり、ボクは疲れた身体と心を休める。二人が何か話している様子だったけど、ボクは聞き耳を立てる間もなく眠りに落ちた。

結局、『あの時』って何の事なのか、訊けないまま。

「仲直りおめでとう」

「別にあの子供とケンカをした覚えは無いのだが」

「まあ、別にいいじゃないか。それにしても、キミがどうしてもここに？」

「汝に伝える事があつたからだ。……聖都にいるネイビーからの知らせだ」

「ネイビーからの……？ まさか彼女の身に何か？」

「ただの連絡だ」

「なんだ、よかった」

「実際は遠方にいるセレスティアルからの知らせで、全員と連絡が取れるネイビーを経由して我らに知らせようとしたらしいが……どうも『奴ら』が動いているらしい」

「……そう」

「まったく。厄介な連中だ」

「そうかな？ キミと同じ思想の持ち主だと思うけどね、アマランス」

「我は人間が嫌いなだけで、完全に『色』を消し去りたいわけではない。絵本の持ち主が現れたのならば、我は『あの方』の遺志を尊重したいと思う。連中と同列に扱うのはやめる」

「……それで、わざわざ来たわけか」

「さすがにやつらが相手では不利だと思ったまでの事。……あの子供のためでも、汝のためでもないという事を忘れるな。我は人間も嫌いだが、汝の事はもっと嫌いなものだから」

「はいはい」

「それにしても……」

「ん？」

「いや、少し気になっただけの事だ。どうして『奴』があんな行動をとるのか。あの一件の後に突如いなくなったと思えば、いきなり現れて我らの邪魔を……理由が思い当たらない」

「……」

「これからは常に二人以上が、あの子に付き添うべきかもしれない。汝の考えに同意などしたくは無いが、おそらくこれが『ラストチャンス』なのだろう。……十年前の事を考えればムダにはしたくないやつらが裏で動いているという辺りが、どうも不安で仕方が無い」

「そうだね。あの子は何が何でも守らないと。同じ失敗だけは避けなければ」

「ああ、そうだな」

「……ふむ、人間嫌いのキミが『人間を守る』事に同意するとは思わなかったな」

「何でもかんでも嫌っているわけではない。……ただ、あの子供は特別というか、他の人間よりは信頼できると思ったただけだ。それにさつきも言ったように、我は『色』を消し去りたいわけではないのだからな。ああ、それでも人間を嫌っているという事に変更点は無いぞ」

「ふうん。まあ、いいか。そういう事にしておこう」

「気分を害した……我はもう休む。汝もさっさと休むがいい」

「はいはい、おやすみアマランス」

「……ふん」

六章 フトウメイニスキトオルアコム

読みたくないのに読んでしまうわたしは愚かだった。夜中を過ぎた頃合に、父さんや母さんが寝静まった頃合に、ベッドを抜け出したわたしは一人でその本を読み続ける。

月明かりの下で『悪夢の絵本』を読むわたし。

そこには『悪夢』だけが記されていた。

だけどわたしは読んでしまう、魅入られる。視線を外せない。つま弾くようにページを捲っていく手が止まらない。わたしの指先は狂気に堕ちた夢物語をなぞり上げる。

そこには未知の言葉がちりばめられている、異界の言葉。

わたしのナカを狂わせながら壊し続けて魅了する、甘美なる御伽噺。

かさかさに乾いた人間の血液は、ずっと前に死んだお姉ちゃんのモノ。乾いた時にくっ付いたりしないように、ちゃんとページを開けて乾かした。それは当時三歳のわたし。

あれはわたしが幼かった十年前だった。

偶然、おまつりで聖都に行った日の夕暮れ。お姉ちゃんが屋台で売られているお菓子がほいって言って、わたしもほいって言って二人で買いに行ったのが罪と罰の始章。

はらはら、と空から何かが降り注ぐ。お姉ちゃんとわたしの前に、それほど大きくは無いけど少し分厚くて、落としたら床にへこみができるくらい重そうな本が落ちた。

タイトルはわからない。お姉ちゃんは文字が読めるから、嬉しそうに笑ってその本を拾うとページを捲り始めた。そして一言——すつごく面白い、と満面の笑みで答える。

その笑顔が、わたしの記憶に残された一番新しい『お姉ちゃん』。直後、お姉ちゃんの頭は後ろから殴られ、粉々に砕かれてしまった。やったのは違うけど同じ絵本を手に行っている、だけど見た事も

無いおじさん。絵本を持つ手と逆側には鉋。

飛び散る血。

はじける脳髓。

開いたまま地面に落ちた絵本が、びしょびしょに濡れた。

おじさんが笑う。お姉ちゃんの頭が壊れていく。その表情は笑みのまま、お姉ちゃんがわたしの目の前で壊されていく。お父さんもお母さんも来ない。人がみんな狂っていた。

顔に張り付くお姉ちゃんの欠片。お姉ちゃんの一部だったモノ。

おじさんはわたしを見てにやっと笑った。笑ったような気がする。それはお姉ちゃんと同じように満面の笑みだ。

おじさんは笑っている。——この絵本はとても素晴らしい、楽しい、って。

そして鉋を自分に向かって振るった、振るった。血が飛び散る肉が裂ける骨が碎けてわたしを濡らす。鉋の刃がおじさんの絵本に突き刺さった。解体され、粉々にされていく絵本。

お父さんとお母さんの悲鳴と絶叫。わたしは絵本を服に隠して二人を待つ。それから先の事は記憶の中であいまい。霧の向こう側に置き去りにして、わたしは今を生きている。

あの時の絵本。ほとんど無意識で隠して持ち帰った。こうしてページがくっ付かないように丁寧に乾かした。そこまでやった理由はわたしにもわからない、無意識だから。

今は少し、後悔しているのかもしれない。この絵本は『麻薬』だった。

読みたくも無いし捨ててしまいたい。だけどこうして時々でも読まずには触れずにはいられない。常に傍らに存在を感じていたくて手放せず、わたしは徐々に狂って行く。

この絵本は悪夢しかもたらさない。

何故わたしは読まなければいけないの？

疑問に思う心はじわりと染みこむ狂気の前では無力。わたしは読みたくない見たくない捨ててしまいたい触れたくないと思い、でも

読んで見て捨てずに触れ続ける。

内容なんて理解できない、理解できるヤツはバケモノ。

その直感めいた思いだけがわたしを支える。

それだけがわたしを『わたし』にする。

だって知らないもの。わたしはそんなモノ知りたくない。青なんて知らない赤も知らない緑って何なの橙がわからない。だけど絵本はわたしに知識を与えてしまふ。詰め込もうとする。

壊れてしまいそんな質量と息苦しさ。

誰かがわたしを殺そうと首を締め上げる。

哀しくて嬉しい。

がたがたと震えながら先へ先へと視線めぐらせ、思考を走らせ。わたしの瞳が見ている世界は徐々に歪む。わずかなまばたきさえ許されない。呼吸さえ止まりそうになる。

いつからこうなってしまったの？

問う声は音にならず、心の奥底へ降り積もる。

狂気の夢が、わたしを包む。今宵も。

* * *

今日もボク——もといボク達は『象徴』探し。

手当たり次第に三人がかりで『象徴っぽいもの』を集めて、その中からピンと来たものを選び出すという作戦を始めたのはいいけど、今のところピンとくるモノはなかった。

ちなみにボクがいるのは五階。

アマランスが七階に、ガーネットが六階で作業中。ああ、でも夕方近くになってきたから二人して洞窟の方に戻って、食事やら何やらの準備をしているかもしれないな。

表面的には、ガーネットもアマランスもケンカの類はしない。互いに相手のテリトリーに入ろうとしないうって感じ。コレがいわゆる『大人の対応』ってヤツだろうか。

うーん、やっぱり二人に関しては不安かな。

こういう時、ヴァーミリオンが一緒にいてくれればいいのに。ボク一人じゃ、あの二人のケンカを何とかできそうにない。うう、今度会えたならちよつと相談してみよう……。

とはいえ、二人の事もそうだけど、これからの事も重要だよ。この『遺跡』での作業が終わったら、また別の『遺跡』までてくてく旅をする事になっていくみたい。

——その時はガーネットだけ、なのかな。

もしもそうだったら、アマランスも誘ってみよう。何となく、彼とはもつと一緒にいてみたいと思っていた。こんな事を言ったら、ガーネットが拗ねるかもしれないけど。

それにしても、三人で探しているワリに泣きたくなくなるくらいに成果が出ない。

このまま手がかりもそれっぽいものさえも何も見つからないまま、まるで降参して逃げ出してみたいに次の遺跡に行くのかな、とか思っでは自分につっこみを入れている。

諦め気分じゃ何も見つからない。無駄なくらい前向きになれ、と「はあ……」

つっこみを入れる傍らで、ボクの心の中の闇がうごめきながら囁く。色なんてモノは存在しなくて、ガーネット達は何も知らないボクで遊んでいるだけなんだろう、って。

違う違う……そんな事はない。無いはず。

否定する声も今は弱い。かすかな悲鳴みたいな声だ。

たぶん、原因は『あの時』ってヤツ。ガーネットとアマランスが地下で口論した時にアマランスが言った……あの言葉が頭の中につきかりと根を張って成長していた。

あの時って何の事なんだろう。わからない。

訊きたい、訊けない、訊くのが怖い。

何よりも……『教えてもらえないかもしれない』事が、ボクは怖い。もしもうまくはぐらかされてしまったら、ずっと後になってそ

の事に気が付いてしまったら。想像が怖い。

そしてボクは疑問から逃げた。アマランスには全然違う質問をして、ガーネットには質問さえしなかった。弱虫で、腰抜けで、目も当てられないようなクズっぽいボク。

こんな思いをするくらいなら、訊けばよかった。ねえ、ガーネット、『あの時』って何の事なの、ボクにも関係がある事なの、教えてくれないと絵本で殴るよ……そんなふうに。

「絵本……」

ふと、近くにおいてあるカバンの中に入っている絵本を、何故か今すぐに手にいて読みたくなっていた。自分でもわかる。今のボクは不安で、何かに怯えているんだ。

怖くて不安な時は、絵本に触れていたいから。

アマランスとの一件から、ボクはこの『絵本』から離れられなくなっている。これがそばにあるだけで心が落ち着いた。まるで後ろからぎゅっとされているような感覚だ。

「……」

芽づる的にあの時の事を思い出して、手が古びた棚の前で止まる。

あの日、アマランスの力で見た『本当の世界』。

人骨が散乱する地下の壁に書かれた、色を奪い去られた人間の『断末魔』。

あの時のショックがようやく落ち着いてきた昨日、ボクはガーネットがいない隙を見計らってアマランスに尋ねた。ガーネットはボクがショックを受けないように真実を曖昧に濁してしまうか、それ以前にはぐらかすなどして答えてくれない……そんな気がしたから。そういう時、はっきり言ってくれるアマランスはいい人だと思う。ボクは尋ねたのは『あの断末魔は地下だけ?』という事。証拠は無いけど地下だけの話じゃない気がして、知るのが怖いと思いながらも勇気を出して訊いてみた。

彼ははっきりと言った。どこも『似たような状態』だって。ボクの目には少しも『見えていない』だけで、遺跡の壁のいたるところ

にあの『断末魔』は書き込まれているという。

どうして今はただの壁なのかわからないけど、アマランス曰く『色そのものを使って書いているから汝に見えないのだろう』との事。昔はそういうモノもあったらしい。

それを聞いた瞬間ほど、『色』が見えなくてよかったと思った事はない。ずっと遺跡の中で感じていた妙な気配の原因は、きっとあの『断末魔』なんだろうとボクは思った。つまりホンモノの怨念とかの類だったに違いない。昔は笑い飛ばすだろうけど、今なら信じられる。

あんな『断末魔』に囲まれた状態で正気を保っていられるほど、ボクという人間の心や精神は強くないのだった。というか、未成年の十二歳。要するにお子様なんだから。

かくして本来なら何とかしなければいけない現象に感謝しつつ、ボクは柵の中に手をつ込んで中をまさぐっていた。さすがにこの中に骨とかは無い……と思いたい。

「ふう……今日はもうやめようかなあ」

空振りに終わった探索。もう何回目なんだろう。疲れた心は考えないようにしてきた事ばかりを呟く。そしてボクの邪魔をした。手足を引っ張って、動けないようにする。

それを振り払ってから、ボクは遺跡を出て行った。こんな気持ちじゃ、もし近くにあったとしても見つかるはずがないと思う。ため息を零しながら、洞窟に向かって歩いた。

何だか、胸の奥に何かが詰まっている感じがした。ヴァーミリオンのとの出逢いとかで消えたと思っていた、少なくともあれ以降は忘れていたはずの重み。息苦しくて気持ち悪くなる。

地下での一件からゆっくりと、ボクの中でまた存在を大きくしていた。それこそ、今すぐに遠くに行ってしまったヴァーミリオンが、戻ってきてくれないかなって思うくらい。

ストレスなのかな、言いたい事を言えないでいるから。この苦しみの解決策なんて一つしか無いのに、素直に訊いてしまえばいいの

に……本当にボクはバカだ。

はぐらかされるのが怖い？

ウソをつかれるかもしれない？

そう思っていれば、きつと見破れるはず。そしたら、それについて徹底的に、ネチネチとしつこく問えば言いだけじゃないか。たったそれだけの事もできない、ボクはなんて弱虫か。

もちろんボクだって、自分が常に思っているままに行動できるとは考えていない。けど今は考えのまま行動できると思いこんでいる方が、今よりはずっとずっと『マシ』だと思えた。

逃げていないだけ、ずっと……。

「あ……」

てくてくと洞窟目指して森の中を歩いていると、向こうから歩いてくる青年の姿に気が付いてしまった。向こうもボクを見て、かなり嫌そうな顔をしたまま固まっている。

間違えるものか。あの時ボクをずぶ濡れにしたヤツだ。

どこかに行くつもりだったのか、彼は荷物を手にしている。長い髪は下ろしていて、これはこれでかつこいいのかもしれない。絶対に顔にも口にも出してやらないけど。

「お前、あの遺跡で何をしている？」

「そっちこそ、こんな森の中で何やってるんだよ。っていうか、偉そうに『お前』とか言わないでほしいんだけど。名前くらい名乗ったらどうなの？」

再会直後に睨み合う。身長之差はだいたい頭二個分以上。見下ろされているというよりはるか高みから見下されているような感じがして、ボク的にはこの上なく不愉快で気分が最悪だ。

疲れている身体と心に追加ダメージ。

ボクは今度こそ殴ってやろう、とカバンから絵本を取り出そうとする。相手は剣を持っているから意味が無いかもしれないけど、それなりに硬いから多少は……大丈夫、かな。

「……エストだ」

「は？」

「名前だ。名乗れと言ったのはお前だろうが」

律儀だった。ちよつと認識を改める。エスト、か。ちよつといい名前だ。ちゃんと忘れないように頭の中に刻む。時々ヒトの名前をど忘れするから、気をつけなきゃいけない。

だけど、こうして名前を覚えようとするって事は、エストの事はそんなに嫌ってないんじゃないかなと自分で思った。たぶん、性格的に口論してしまうだけなんだろう、うん。

何だか調子が狂う。第一印象と今がかみ合うようで、でも肝心な部分でズレまくっているような。次に何を言えばいいのかわからない、言うべき事を思いつけない。

「それでお前こそ何を……」

している、と言いかけたらしいエストは、何故かそれを言えずに絶句する。細められた目で見ているのはボク。……いや、ボクが持っている力バンからはみ出た荷物だった。

それは『絵本』。

見つめるエストの顔はこわばっている。まるで見てはいけないものを見てしまった、とでも言いたそうな感じだ。これが普通じゃないのは知っているけど、どうしたのだろう。

「その絵本、お前は『平気』なのか？」

「はあ？」

平気って……エストはこれの中身を知っているの？こんな内容、ボクみたいな変わり者でもないと思うかもしれないって思ってたのに。そもそも流通してるものじゃないし。

もしかしてエストも『同じ』なのかな。

ボクと同じ『選ばれた者』……。

「中身は知らない。……ただ、それに纏わる騒動を知ってるだけだ」
考えが顔に出てしまっていたのか、どこか気まずそうに答えるエスト。

違つとわかつた瞬間、ボクが感じたのは『残念』という思い。

仲間ができたのに、って思ってしまった。きっとガーネットとすれ違い気味って思っているからだろう。似ているけど彼らとボクは違う立ち位置。これは疎外感……なのかな。

「聖都は知っているな。十年ほど前、その絵本が聖都にばら撒かれた事があった。俺はまだ幼かったから、知り合いから伝え聞いたただけだが、その時は酷い騒ぎになったそうだ」

「騒ぎ……？」

ああ、とエストは言った。何故だろう。その話を知らないのに、ボクは聞いてはいけないような気がした。早く教えてほしいと訴える欲求の影に、その思いがひっそりとした。

きつとエストが『騒ぎ』という単語を使ったからだ。

そこに不穏なものを感じている。

悪い事が起きたのだと、ボクは無意識に思っていた。

「ある男は己の家族や友人、その家族を招いて殺し、道の真ん中で自殺した。他にもいきなり刃物を振り回して通行人を何人も刺し殺してから自分を刺したヤツ、自分の腹を掻っ捌いた妊婦もいたらしい。ありとあらゆる『悪夢』が溢れた日、と呼ばれているそうだ」

「十年、前……」

その一言がボクの中にある知識と繋がった。エストは他にもいろいろと話しているみたいだったけれど、ボクの意識にはほとんど届かなかった。それどころじゃなかった。

ばら撒いたって言った。十年くらい前にこの『絵本』を。

失われた資質を持つ人を探すため、『選ばれた者』を探すために、『あの人』にして『あの方』が遺した原本をそのまま使って絵本を作って、ガーネット達がばら撒いたって。

じゃあ、エストが言った事の原因は、ガーネット達？

ガーネット達が、そんな事をしていたなんて。

そんな事があったなんて、ボクは。

「聞いた事、無い……そんな話」

「言いにくだらう。あの一件以降の聖都ではその『絵本』を所持

しているだけで、罰を与えられる対象になっている。お前もこれから先、聖都に行く時は気をつけるんだな」

「……」

そうじゃない、そんなのじゃない。

自分でもわからない感情が、心の中に暗く影を落としていく。いくつも、いくつも。

次第に影は湖みたいになくなって、影が心を染めた。

「それじゃ、俺はこれで。森の中は凶暴な獣もいる。早く帰った方がいいぞ」

エストが去っていくのをボクは見ている。ぼんやりと、別れの言葉もなく。かなりの時間が経った頃、遠くからガーネットがボクを呼んでいる声が聞こえた。……もう空は夜だった。

ボクは呼ばれるままに洞窟に向かう。その入り口の近くで、ガーネットがいつものように食事を作っている風景を見た。胸に込み上げるのは、戸惑いと言えなかった疑問。

決意を固める。ボクは真っ直ぐにガーネットを見つめた。これまで走ってきた道を今から戻る事はまだできないけど、その勇氣はまだ持てないままだけど、この場所で足を止める。

ボクはもう——『逃げない』。

「ねえ、ガーネット。十年前にこの『絵本』を作ったんだよね。確か『選ばれた者』を探すために。その中に『色を知る者』——ボクが含まれていたっていう話だったっけ」

「そうだよ」

「ばら撒いたんだってね、聖都に。やっぱり人が多いからね、聖都。人探しするのに一番適した場所だと思うよ。……そして『絵本』のせいで凄い騒ぎになって、人が死んだ」

「……」

「さっき、聖都に住んでた人が絵本を見て、この話を教えてくれた」
無言で問う。

そんなの事をどうしてしたのか、どうしてボクには言わなかったのか。

理由を教えて。ボクが納得できるまで、何度だって。

ガーネットは沈黙した。アマランスは関わるつもりは無いというか、これはボク達二人の問題だとわかってくれたらしく、無言のまま揺れる炎を見ているようだった。

「あの『絵本』はね、資格を持たない人や、資格は持っているけどそれが足りない人には副作用をもたらす事があるんだ。その結果が、その誰かに聞いた『騒ぎ』の原因だよ」

ガーネット達でもわからなかったらしい、実際に結果を見るまで。後から神様が遣していった原本と見比べたけど、一字一句、そのすべてを完璧に写し取れていたのは間違いなかった。だからあの『絵本』は、元々そういう効果を持っていた。

その事を調べ終えたのは騒動から数年後。

ばら撒かれた絵本は世界中に散らばって……もはや、回収不可能だった。だからガーネットたちは逆に利用する事にした。単発的な『悲劇』を無視して目的を最優先した。

語り終わったガーネットは、どこか疲れた表情をしていた。

その整った顔には、似合わない苦笑が浮かぶ。

「仕方が無かったんだ、あれは。いずれ私達は似た事をしなければいけなかった。この願いを捨てきれないなら、いつかは必ず同じ事を一度はしなければならなかった。それをあの瞬間に行っただけ。あの瞬間まで躊躇ったり、踏みとどまったりを繰り返して……それだけさ」

仕方がなかった、いずれはやるしか無い手段だった。

……それは、本当に？

全部わかっていて、やったんじゃないの？

心の底から疑いの感情が、じわりと滲み出ていく。

ボクはずっとガーネット達は『人助け』をしていると思っていた。色という概念との繋がりを断ち切られた人間。その繋がりを再生し

ようとしているのが彼らだっと思った。

でも、違ったのかもしれない。ボクが勝手にそう思いこんでいただけで、実際はそこまでの事を思っていたわけじゃなかったのかもしれない。心がガクガクと揺れ動いた。

思えば、作業についての詳しい事は、何も聞かされていなかった。どうして『象徴』が必要なのかとか、必要最低限とも思える知識さえ、ボクの中には存在していなかった。

この『絵本』が何なのかもわからない。

ボクが子供だから教えてくれなかったのかな。

それとも教える必要が無いって、そんな価値さえ無いって——事？「ボク、少し散歩してくる」

立ち上がり、焚き火に背を向けるボク。絵本が入ったカバンは持っていく。最近はどこへ行くにも持って歩いていたから、たぶん変には見えなかったと思う。

ねえ、ガーネット。ボクはあの薄暗くて不気味な遺跡の中で、マネキンのバラバラ死体とか人骨と戦いながら『何』をしていたのか。そもそもここに理由さえ、わからないよ。

ガーネットは本当の事を言ってくれたのかもしれないね。もしかしたらボクを思っただけウソを少し混ぜたのかもしれないね。きっと前のボクなら拗ねるように怒るだけだったよ。

今はね、一つのウソが百のウソに聞こえてしまふ。

色が存在するのかさえ、もう信じられない。

アマランスが実際に見せてくれた、だけどそれさえ信じられない。違う。ガーネット達が教えてくれる、伝えてくれるモノすべてが信じられなかった。信じたいと思っただけなのに、真っ直ぐに質問をぶつけたら答えてくれると思うのに。

それさえごまかすためのウソなんじゃないかって、思っただけ。そんな自分がとても嫌いになりそうだった。だから少しだけ、本当に少しだけ関係が無い場所に行きたかった。

「少しだけ、だから……すぐ戻るね」

言い訳しながらボクは歩く。ガーネット達は追ってこない。少しはボクを信頼しているのかもしれない。そう思ったら胸がズキリと痛む。だけど足は止まらないで、前に進む。

街道に出て、道なりに歩けば明日にでもどこかの町に着くはず。お金はちよつとだけ持つてきてしまった。さすがに何も無いままで旅ができる、とは思ってないから。

明日、町に着いたら一人で考えてみよう……。

旅の理由、『色』の意味、世界。

ボクが関わってしまったいろんな事を、ボク一人で。

七章 ツイノムスメ

「——つまり、キミは家出というわけか」

目の前のご主人は、驚きながらも笑いそうな表情だった。

奥さん曰く、酔っ払っているらしい。

ボクは苦笑しながら、ひたすら話を聞く側に回っていた。

「まあ、ケンカするほど仲がいいというしな。できるうちにしておくといい。いなくなったら二度とできないんだからな。……ワシだつてもつとしていればよかったのかもなあ」

そして今度は泣き出した。感情表現のふり幅がすごいご主人だ。一人旅の理由として半分くらいウソ——家族とケンカして家出したという事を伝えただけなだけど。ちなみにもう何回も繰り返し返しているやり取りだ。酔うと人生相談を受け付けなくなるらしい。

今は奥さんに背中を撫でられ、慰められている真っ最中。何でも親兄弟はもうなくなってしまうていて、何かあるたびに思い出しては後悔して『こうなる』……との事。

酔いとセツトになると手がつけれないから寝かしつけるわね、とご主人は奥さんに抱えられるようにして自室へと消えていった。

……まるつきり子供だ、と思うボク。

「それじゃ、もう今日はお休みしていいわよ」

しばらくして戻ってきた奥さんは、そう言つてまた部屋に戻つていった。ボクは寝泊りしている部屋に入つて、そこに置かれたちよつと古めの二段ベッドの上側に腰掛ける。

逃げ出すようにガーネット達から離れて、そろそろ一週間近く経った。街道をてくてくと歩いていたボクは、通りかかった近くの町に住んでいる家族のお世話になっていた。

ボクの両親という事になっている例の『夫婦』とは別物って感じの、比べる事さえ失礼としか言えないくらい優しい夫婦。こんな両親だったらって、思ってしまうくらいだ。

そしてボクより少しだけ年上の女の子が、夫婦の間には生まれている。

名前はクリス。長い髪が綺麗で、ボクよりずっと大人っぽい身体つきだった。何でそんなことわかるのかと言うと、空いている部屋が無いので居候させてもらっているから。

というか、確かにだばつとした服を重ねて着ているけど、さすがに出るところが出ているか否かは見ればわかる。……別に羨ましいわけじゃないけどね。ボク、まだ子供だし。

顔つきはどことなくご主人、つまり父親似。目元辺りなんてそっくりだし。でも全体的な雰囲気などは奥さん、母親似だと思う。温和そうであつたりした、綺麗な女の子だ。

一人っ子なのに二段ベッドなのは気になつたけど、あちこちキズが付いているからきつとおさがりなのだろう。こういうのって、作るにしろ買うにしろ大変だろうから。

クリスは外にいるみたいだった。そういえばさっき——ご主人がお酒を飲み始める少し前に外に出て行つたし、どうやらまだ外から戻ってきていないらしい。

まあ、おかげでボクは心置きなく絵本を読める。そして一人でじっくりと思考をめぐらせる事ができる。絵本を読んでいる時は、何故か思考がとてよく動く気がしていた。

なんて言えばいいのだろう。他の事を考えなくてすむ、という感じがな。

一つの事だけを考えていられる時間。

その事だけに支配されてしまうような。

息苦しさや幸福を、同じ量、一緒に感じられる。

故郷でも旅でも感じなかった、ある意味、ボクが求めていた世界。無理やり引きずられているのかもしれない。思考に。絵本を読みながらの考え事はボクを次第に魅了する。このままだと、これ無しじゃ生きられなくなるのかも、とさえ思う。

「はあ……」

そのワリに思考は一向に片付かない。集中できるのはいいけど、五つの問題に決着が付く頃には、同じ数の新しい疑問が浮かんできってしまう。ボク一人じゃ、これが限界かも。

だけど……まだ帰れない。

こんな気持ちのまま、彼らと一緒にはいられない。

だからボクは戦わなきゃ。一人で。

「うー、疲れた……」

でもさすがに集中すると疲れてしまう。ボクは絵本を閉じて枕元に置くと、ベッドの上に仰向けに倒れた。天井が近く見える感覚は、小柄なボクにとっては珍しい経験だった。

ガーネットもヴァーミリオンもアマランスも、そしてエストも。みんなボクより頭一つか一つ半くらい背が高くて、ボクがどんなに頑張っても勝ち目は無さそうって感じた。

彼らが屋内で上を見るとこんな感じなんだろうか。

手を伸ばしたら届きそう。ためしに伸ばしてみたけれど、微妙に届かない。

爪が伸びていたらかすったかもしれない。

「……ふう」

ボクは寝転がったまま考える。絵本無しで考えてみる。外から聞こえる音が気になって集中しにくいけど、まあ、これはこれで悪くない。むしろこっちが『普通』だから。

ゆっくりと意識を静めていく。

眠る直前が一番心地よく集中できる。

だけど寝てはいけない。まだ、もう少しだけ考えていたい。

ボクには第三者の力を借りないと見えないけど、もしも本当に『色』が存在しているとしたなら、本当に空は『青』で、血は『赤』で、葉は『緑』で、太陽は『橙』なのか。

知らない間に刷り込まれた知識はそういつている。

だけどそれが正しいのか、今のボクに確かめるすべはなかった。あの作業を続けられ、それを確認できるのかもわからない。

そもそも、絵本はどうしてボクに『色』を覚えてくれたのだろうか。見えないもの、感じられない事をどうやって。何から何までわからない。これさえも『神様』の筋書き……なのかな。

だとすると滅んでは蘇る、この世界の物語はただの喜劇だ。

何か神だ。死んでもからも世界を呪い続けている大バカ者じゃないか。

もういないのはわかってはいるけれど、やっぱり誰かが一発殴ってやらないと。

ボクだったら間違いなく『絵本』。

縦で一発。それでもダメならプラス九発。ついでに角で五回くらい。

さすがにそれだけやれば目も覚める。そしたら、ちょっとくらいは話を通じるようになるかもしれない。今よりマシになるならもう何だっていい、とさえボクは思った。

だけど、こんなシナリオを用意するほどの……どんな『悲劇』に、あの人にしてあの方である神は見舞われたんだろう。かつての人間は、どんな罪を犯したのだろう。

家族が殺される、恋人を殺される。

子供のボクにはそんな、ありきたりな事しか思いつかない。

罰を与えるにはそれに似合う罪が必要。だからきつと、こんなシナリオの上に置き去りにされてしまうくらいの事を、大昔の人間はいろいろとやってしまったのだと思う。

その償いを人間はちゃんとできたのだろうか。

できていないから、こうして罰を受け続けているのか。

ダメだ、ボクにはやっぱり何もわからない。

ご主人や奥さんには話せないし、相談だってできない。年が近いとはいえ、こんな事はクリスマスにだって言えない——というか相談できるほど、彼女とは親しくなっていないし。むしろ裂けられ気味でちよつと困っている。そんな悪い第一印象を与えたのかつて、不安にもなる。

そうなると相談できる対象なんて、やっぱりガーネット達くらいだ。

一人になって落ち着いてきた。ボクがバカだったんだ。そんなの旅に出た直後辺り、いやそのずっと前からわかりきってた事なんだけど、やっぱりボクはバカだ。救いようの無いバカ。

やっぱり、戻ろう。それからいきなり出て行った事を謝って、気になってる事を徹底的に訊きまろう。最初からそうしていればよかったんだ。逃げるほどの事じゃない。

いきなりだけど明日、ご主人と奥さんに帰る事を伝えないと。見ず知らずの他人を家に泊めてくれた人達。何とか恩返しもしたいけど……子供のボクにできる事ってあまり無い。心の底からの感謝の気持ちを、どうやって言葉にしよう。

うーむ、と悩んでいるとコトコトと音がした。続いて扉が開く音。身体を起こしてベッドの上から下をのぞき見ると、外出から帰ってきたばかりらしいクリスの頭が見えた。

「あ、お帰りクリス」

「……ん」

ただいま、と答えるクリス。こつそりと憧れているサラサラの長髪が揺れた。ボクもいつかあれくらい長く髪を伸ばしてみたい。まあ、それだけ手入れとか大変そうだけど。

それにしてもこんな時間に、彼女はどこへ行っていたんだろう。どうやら走って帰ってきたらしく、その呼吸はとても荒かった。走るなら、もっと余裕を持てばいいのにとボクは思う。

何かを大切そうに抱えているようだけど、羽織っている外套に隠れてわからない。

「ねえ、クリス。ボクね、帰ろうと思うんだ……」

ここにいっても何も解決しない、解決しかけている『フリ』しかできないから。

「そっか……うまく仲直りできるといいね」

「うん」

クリスは微笑む。ボクとそんなに離れていないはずなのに、彼女の微笑みはずっと大人びた印象を抱かせる表情だった。綺麗、っていうのかな。少し儂げな感じもするけど。

部屋の窓際にある机の上に荷物を置くクリス。隣に外套を軽く畳んで置いた。

たぶんもう寝るのだろう。時間的にも寝ているべき時刻になっている。ボクも荷物を軽くまとめて寝ようとして、彼女がずっと抱えていたと思う『荷物』が目に入った。

それは一冊の書物——というか、絵本。ボクが今抱えていて、カバンの中にしまいこもうとしている、あの絵本だった。少し汚れているようだけど、間違いなく同じモノ。

そういえばエストは、この絵本は『ばら撒かれた』とか言っていた。ガーネットもばら撒いたと言った。証拠なんて無いけど、ボクは二つが同じ絵本だと感じていた。

ゆつくりと床に立つ。クリスはボクに背を向けて着替えている。長い髪を緩く三つ編みに結っていて、それが乱れて色っぽく見えた。それを横目に、ボクは絵本に手を伸ばす。

近寄ってハッキリした。同じだ。この絵本とボクの絵本は同じものだ。表紙とかボロボロになっていてかなり古びた感じになっているけど、間違いなくボクの絵本と同じモノ。

開こうかな。

でもすごく大切にしているみたいだった。

開いちゃおうかな。

でも勝手に見たら怒るかもしれないな。

「……何、してるの？」

いつの間にか振り返ったクリスが、こっちを見ていた。その視線が机の上の絵本と、ボクの間を行き交う。疑問に思っている感じでもあり、驚いている表情でもあった。

「いや、見覚えがある絵本だったから……同じかなって、これと」
ウソではない理由。実際にそれを確認したくて近寄った。だから

絵本を手にとっていたとしても、あるいはマジマジと見つめていても、この理由なら怪しまれない……はず。

「おな、じ？」

クリスはきよとした表情を浮かべた。

同じ絵本があるって、思っていなかったような感じだった。

まあ、聖都じゃ所持している人には罰が与えられているようだし、それを思うと見つけられた絵本は燃やされていそうだ。だったら、『他は無い』と思っても不思議じゃない。

もしかしたら、これをキツカケにクリスと仲良くなれるかもしれない。そりゃ、明日にはもうここを出ていく事になるけど、それでも少しくらい仲良くなつてさよならしたい。

そう思い、ボクは自分の絵本を軽く上げて。

「面白いよね、凄く」
にこつと、笑った。

ボロボロになるまで読み込んだクリスも、同じように思っていると、思ったから。だから自分が持つ絵本を見せて、ボクはまだまだ読み込みが足りないなあ、なんて苦笑して見せた。

「……っ」

クリスは目を見開いて、ボクを見つめた。視線が絵本に向けられる。

想像とかけ離れた表情が浮かぶ。さすがに様子がおかしかった。

「あなた……」

小さな声でクリスが何かを言っていた。小さすぎて、聞き取れなかった。何かに驚いている様子だって事だけは、そのこわばった表情でさすがにわかったけど、それだけだ。

この絵本、嫌いだったんだろうか。でもそれなら大事に持っている事は無い。適当に捨ててしまつとか、もっと手っ取り早く暖炉の焚きつけにしまえば、それで全部終わるのに。

何かを問う前にクリスは部屋を出る。もちろん、例の絵本を抱え

たまま。突然の事に追いかける気力もわかず、ボクは今までで最大級の疑問だけを抱えて眠るハメになった。

明日聞いてみようかなと思うのを最後に、意識がすうっと消えていく。

* * *

町を走る。特徴的な長髪を捜す。朝起きると奥さんが大慌てだった。そしてご主人は家の周りで大声を出しながら走り回っている。近所の人も総出で捜していた……クリスを。

——クリス。

彼らは口々に彼女の名前を呼び叫ぶ。いきなりいなくなってしまう少女。ボクだけが彼女が『絵本』ごといなくなってしまったと知っている。でも、理由はわからなかった。

誰もわからない、誰も知らない。クリスが消えた理由を、その原因を。ボクだって想像なんかつかない。いきなり——としか言えないクリスの失踪。誘拐の線もあるという話だった。

なぜ、どうして……。捜す人々の顔にはそんな感情が浮かぶ。道端でどこを捜したかを話し合う人達から、ボクは知らなかったクリスのもう一つの顔を、ちらほらと聞き集める。

クリスはやはり大人しい娘、として周辺には認識されていたらしい。でも、夜な夜などどこに出かけている事はみんな知っているようだった。少し前に知り合ったばかりのボクでさえ初日に気が付いたところからして、彼女に隠れつつというつもりは微塵も無いらしい。

いや、出かけていると言うよりも家の近くでぼんやりしている、というべきか。何かを手に空を見上げて星を眺めるでもなく、ただぼんやりと立っているように見えるらしい。

だから一部住民はこう言っている——不気味だと。

まあ、そう思うのも仕方がない気もする。そういう癖がついてい

るのか、クリスは物音をあまり立てないで歩く。だからいきなり声をかけられて、驚いた事も少なくなかった。

彼女のような人の事を神秘的というのだろうか。ボクはちょっと変わったその雰囲気などをそう思ったけど、他の人は違ったらしい。でも不気味って言い方はどうかと思う。

「どこかに神隠しにでもあったんじゃないかい？」

「あの子はどこか変わってたからねえ……お姉さんを亡くしてから、暗くなっただけ」

捜すより雑談に花を咲かせるおばさん達。

またか、と思いながら傍を通り過ぎようとした。

「そりゃ、目の前で殺されればね……しかもあんな死に方じゃ、仕方が無いさ」

――殺された？

傍を駆け抜けかけたボクの足が、石になってしまったかのように固まる。

そのまま続きを促すように、ボクはそちらに全神経を向けた。

一字一句も聞き逃さない。聞き間違いなんて許さない。そんな自分でもわからない衝動に突き動かされて、ボクは静かに呼吸をしなから聞き耳を立て始めた。

「あれ？ そんな事あったかい？ 病死したとか事故死したってのは聞いたけどねえ」

「十年前だったか、聖都で変な本がばら撒かれて、気が狂った連中が暴れまわって死人が出た騒ぎがあっただろう。あれで年の離れたお姉さんが亡くなっているんだよ、それもあの子の目の前で。それが尋常じゃなくらい酷い死に方だったから、町でも知ってるヤツは少ないな」

それってあの絵本の一件の事、だと思ふ。ボクと彼女が持っている『絵本』がばら撒かれてたくさんの人がおかしくなって、そして数え切れないほどたくさんの人が死んでしまった。

それにクリスが巻き込まれていたなんて、知らなかった。

でも——それなら、どうして彼女はあの絵本を持っているんだろう。あの絵本が原因だって事はみんな知っているようだし、それをクリスが知らないはずが無いのに。もしボクがクリスの立場だったら恐ろしくて憎くたらしくて、あんな大切にしようなんて絶対に思わないのに。

「それからあの子は無口になっちまった。毎夜毎夜、外でぼんやり突っ立ってる。話しかけても反応一つしない。まったく、不気味な娘だよ……見た目が整ってるから余計にね」

いやだいやだ、と締めくくったおばさん。いつもだったら子供っぽい無邪気さを装いながら嫌味の一つは言えるのに、そんな事を口に出す余裕がボクの中から消えている。

焦りだけがボクの中で荒れ狂った。

根拠もない、嫌な予感が身体をめぐる。

寒気。吐き気。悪寒。ありとあらゆる感情が噴出す。

「真っ青だな」

もしもその時に、聞き覚えがある『彼』の声が聞こえてこなかったら。ボクは耐え切れなくなって、その場に倒れていたかもしれない。それくらい、ボクはヤバかった。

見上げた先にはエストの顔。

「エスト……」

何故かはわからなかったけど、安心した。救われたって、思った。「何かあったのか？ 店に行っても留守番もいなくて、困っているんだが」

「そ、そうだった。エストは見なかった？ エストみたいに髪が長くて、年齢はボクよりちょっと上くらいで、綺麗な顔つきで、それから——例の『絵本』を持った女の子。朝からいなくなっててさ、町の中にいないから外にいるのかもって、みんなで捜してるんだけど」

「……女の子か」

エストはふむ、と唸って沈黙する。

それからはずっと何かを思い出した顔をして。

「そういえば町に来る途中で人影を見たな。てっきり遺跡の周辺でウロウロしている変な連中の一人かと思ったが、もしかするとあれがそうだったのかもしれない」

遺跡周辺をウロウロする……という事は、たぶんアマランスだ。ガーネットの髪の毛はそんなに長くない。でもアマランスなら身長はともかく、見た感じはクリスと似ていると思う。

まさか森にいたなんて事は。だけどエストが目撃した人影が誰かわからないなら、確かめる以外に判断する事はできないだろうし。だけでもしも目撃情報が違ったら。本当の彼女は全然違うところについて、ボクが違う方向に行ってしまったために最悪の事態になってしまったら。

どうしよう。迷う。困る。彷徨う。

判断は速い方がいいとわかっている。だけど――。

「行くなら早くした方がいいぞ。住民はどうも街道を捜すらしい。もし俺が見たのがその女の子なら、今頃はかなり置くまで進んでいるはずだ。……遺跡の周辺とかな」

「……っ」

「というか、お前は何でこんなところに」

「ごめん！　ありがと！　ボク、クリスを捜しに行くから！」

問いかけるエストを置いて走り出す。まずは荷物を取りに戻らなきゃいけない。それから森の中に彼女を捜そう。ガーネット達とあえたら、協力してもらるように話として。

街道沿いにいるならそれでよし。でもエストが見たのがクリスなら。

「早くしないと……っ」

ご主人も奥さんもない家に飛び込む。ボクはクリスの部屋に置いたままにしてあった荷物を抱えると、そのまま外に向かって走り出す。人々の合間をすり抜け、道に飛び出した。

ここからじゃ走り続けても、森に着くのは昼過ぎだ。そしてボクに走り続けるなんて事はできないから、短く見積もっても森に着く

のは夕方頃。ヘタすればもつと遅れるだろう。

それが早いのか遅いのかわからない。

だけでも少しでも早く、少しでも追いつけるように、ボクは走る。

一秒でもいい、彼女の姿を見つきたい。

説得でも何でもして、いざとなれば殴ってでも連れ戻さないダメだ。

原因不明の不安。焦りがボクの足から限界を外した。

気が付くと空は暮れ始めたばかりで、目の前には森が広がっていた。

「もう少しでヴァーミリオンを呼び戻そうかと思ったよ」

森に入っただけの事。まるでボクが今日帰ってくる事がわかっていたかのように、ガーネットとアマランスが出迎えてくれた。少しだけ嬉しくて、怖い。拒絶されるかもしれないから。

それだけの事をやったと思っている。

自覚はちゃんとある。

だけど怖い。それでも、僕は逃げてはいけない。

「いきなりいなくなるなんて、何を考えているんだい？」

よくある説教文句。何となく、ボクの中で歯車の配置が変わっていった。

確かにボクは悪い子としたけど……でも、なんでそんな事、今はボクがどれだけ焦っているのはわからないわけが無いのに。説教は甘んじて受け入れるつもりだったけど、だけど。

「こつちがどれほど心配したと思っているのかな。もしかしたら何か事件に巻き込まれたのかもしれないって、二人で探し回ったんだよ。まったく、猪突猛進なのはいいけど——」

「あーもう、ガーネットは煩い！」

この忙しいのにつ、とボクは大声で叫んだ。さすがに『煩い』と言われるとは思っていなかったらしく、ガーネットとアマランスが啞然とした表情を浮かべる。

ブチっと切れてしまったボクは止まらない。逃げ出すまでボクを追いついた、っていう自覚が無いってわかってしまった。焦っているのが伝わってないはず無いのに、無視されている事も気に入らない。それもこれも全部ボクの勘違い？——知った事か。

「何が『象徴』を探せだよ、わけわかんないよ、意味不明だよ。何の説明もしてくれなかったくせに、偉そうに保護者面するな！だいたい絵本の事だって、ボクが訊かなきゃ詳しい説明なんてする気も無かったんだろ？。それがイヤだから逃げたんだよボクは！」

「……っ」

「何が『仕方が無かった』だよ、大勢の人を巻き添えにしておきながら、自分だけが苦しかったかわいそうだとも思ってるわけ？」

何『悲劇のヒーロー』気取ってんだよ！」

爆発する。

一人で考えていた事とか、ボクの中に在ったモノが。

「それはキミも同じじゃないか……引き受けた事を投げ出しておいで、気になるなら好きなだけ訊けばいいだろう。私はごまかさず真っ直ぐに答えるつもりだったし、答えた」

「何が『答えた』だよ、あんなの信じられるわけ無いだろ！訊くまで何も教えてくれない人の言葉、すぱっと信じられるほど子供じやない！バカにするのも程があるよっ！」

「バカになんてしてない！」

「してるよ思いつきりっ。だいたいガーネットは胡散臭いんだよ。いきなりやってきて意味わかんない事並べ立てて！ボクじゃなかったら絶対に騒ぎになってたに違いないね！」

「うさ……ひ、人がちよつと気にしてる事を」

「とにかく、もうガーネットのいう事は信じないっしたら信じない！必要最低限の事も言わなきゃ教えてくれない、そんなヤツなんかと一緒に作業なんてできるわけ無いっ！」

少なくともボクは嫌だ全力でお断りだっ、という叫びで締めくくる。

すつきりした。気分がスカツと晴れ渡っている感じだった。

はた、と気付く。おかしいな。確か仲直りするって予定だった。誰にも何もいわずに出て行った事を何よりも先に謝って、それからいろいろと尋ねようって思ったはずだ。

これじゃ、ただケンカしてるだけ……

「あ……」

小さく漏れた声が現実を意識を引き戻す。……ついによっちゃった。もう関係とかそういうのが砂粒サイズに粉々だ。ガーネットとはもう終わっちゃったのかもしれない。

自分が言っている事がめちゃくちゃなのはわかってるよ。でもちやんと言いたかった。めちゃくちゃだろうが言いがかりだろうがワガママだろうが、とにかく叫びたかった。

だけど、終わってしまった。

すつきりした気分が一転する。絶望が膨らむ。

「……すまない」

そこで謝ったのはアマランスだった。

「説明が足りなかったのは、我も同じだ。許せ。我らにとって、あの十年前の出来事はあまりにも大きすぎた。何をするにも頭の中のちらつき、決断の邪魔をする。……我らにとってあれは今でも『過去』などではない。何度でも繰り返し返されるかもしれない『今』の出来事だ」

沈痛な表情のアマランス。そんな顔をされると、困る。

そりゃそうだ。良かれと思ってやった事が、ある程度の混乱は想定していたとはいえあんな惨事になっちゃったら……絶対に忘れられないだろうし。言いにくいのは仕方が無い。

「……えっと、ボクも悪かったし。いきなりいなくなっちゃったんだし」

ごめんね、と呟く。なんだか恥ずかしくなってきた。ちらっと見たガーネットは、アマランス以上にすらそうな表情で、何かを考えながら——何かと戦っているようだった。

「どう言えばいいのかわからない……私達も、起こった出来事のすべてを把握しているわけじゃない。それでもいいのなら、私達が行った事を、絵本について知っている事を語ろう」

ガーネットは真剣な目で、ボクを見つめた。

「十年前の一件は、今はもう共にいない『元仲間』が起こした。彼らもきつと、あんな事になるなんて想像もしていなかったと思う。いや、思いたい。私達だってあんな騒動に発展するとは思わなかったよ。ただ、九割以上は捨てられそうだなと……笑っていた」

それは大半の人には理解できないだろうから。ガーネットが言う。ガーネット達は絵本を使って、かすかに残された力——色を見るとか知るとかの能力を強くしようとしたらしい。だから絵本に内容なんて無い。ボクがそう思っているだけでそこには何にも存在していないと、自分達が見ても『白紙』でしか無いと彼らは語る。

ボクが内容だと思っているものは、ボクの頭の中にある『能力』そのもの。ボクがそれまでの経験で育てた能力の姿。心を映し出す鏡のようなものだ、とアマランスは言う。

だからボクには内容は理解できても、それを声に出す事も文字に出す事もできない。思考も心も常に動くから、一つのところを捕まえて『形』を与える事は難しいから。

心と向き合い互いを高めあいつつ、心の底に眠っている能力を目覚めさせる。まるで真珠を大きくするかのように幾重にも包み込んで、あるいは刃物を鍛えるかのように火で炙って何度も何度も叩き鍛えて、ほとんど跡形もなく消されたモノを大きく成長させていく。それが『本来在るべき』使い方。

理想的で、模範的な姿。だけ——。

「あの『絵本』は単体じゃ、効力が『あり過ぎる』んだ。人間のあまりにも弱い精神では耐えられないような、過剰な『情報』を刷り込む……それがあの『絵本』だった」

心を映し出す……というのは、実はとても危険な手段だった。

確にかすかな幻のような能力は磨かれる、強くなり、光り輝く。ただ心は能力だけを映し出すわけじゃない。時に己を殺すほどの激しい感情を生み出す機関だった。

絵本は『何を』強くするかを選ばない。

その身に映りこむ、すべてを強くしてしまう。

畏れも、喜びも、哀しみも。

己が身を喰らい尽くすような狂気さえ、その前では例外に在らず。

そこには区別という名の選り好みはなく、すべてにおいて平等に姿を映しこむ『鏡』が存在している。ナイトメアと名付けられし絵本が、静かに覗き込む人間の心を模写する。

人間は多かれ少なかれ、己の狂気に食われてしまう事があった。

それを意図的に作り出してしまう事があるのが、絵本。それがもたらしてしまった最低最悪にして最大級の悲劇こそ——ガーネット達が隠していた、あの十年前の聖都の一件。

資格を持たない大勢の者が手にしてしまったがゆえに、一人から生み出された狂気が大勢の恐怖を呼び、それらが連鎖と融合を繰り返し、互いを高めあってしまったケース。

それを防ぐには正しい使い方を知る者が、そばで導く非強いうが あった。

ガーネットはそれが、自分達の役割だったと言った。

そばにいて導く者、けれど介入はしない。

——傍観者。

「だから、私達がそばにいなきやいけなかった。そばにいて、支えてあげなければ。情報は過度に与えず必要なだけ知らせて、伝えるだけにしようと思った。あの災厄としか言えない出来事の再来だけは、あの悲劇だけは……どうしても、私達は避けたかったんだ」
必要の無い感情の揺れを与えないよう、絵本にそれを悟られないよう。

だが、とアマランスは呟く。木にもたれかかり、腕を組んでいる。

「ただそばにいただけでは、ダメだったようだがな」

「……当たり前じゃん、そんなの」

あはは、とボクは笑って。

「——って！」

まったりと仲直りムードに浸っている場合じゃない事を、ようやく思い出した。いきなり大声を出したから、目の前の二人はぼかんとした顔でボクを見る。まだ安心していている場合じゃなかった。周囲を慌てて見回すが、当たり前だけど栗すら敷き人影はどこにも見えない。

「そういえばずいぶん慌てていたようだけど、何かあったのか？」

「そ、そうなんだよアマランス！ あかね……！」

慌ててボクはガーネットとアマランスに、クリスの外見的特徴を伝えて見かけなかったかを尋ねた。二人は森の中を歩き回っていたらしいけど、誰も見ていないという。

「そもそも人が立ち入らない場所だからね……それにここ数日、いつキミが帰ってくるかと普段以上に気配に意識を向けていたから、もし誰かが森の中にいたら気付くと思うよ」

「そんな……」

もしかして間違えた？

街道の方に行ってしまったのだろうか。そっちには町の人が捜しに行ってるけど、もしもそれさえ違っていて手遅れになったらどうしよう。キミのせいじゃないよ、とガーネットが優しく声をかけてくれるけれど、それでもボクは自分のせいでこうなった気がしてならない。

きつと昨日の絵本云々が原因なんだ。むしろあれ以外に、クリスがこんな行動をする原因が思いつけない。あの時の、絵本の話題を出した時のクリスは普通じゃない様子だった。

絵本の一件に巻き込まれた姉妹。

死んだ姉と生き残った妹。

汚れてボロボロの絵本を持ち続けるクリス。

絵本だけを手に失踪した彼女。

そして同じ絵本を持つボク。

きつと、それらが最悪のパターンで繋がったんだ。ボクが逃げなければ、あるいは逃げ出したとしてもあの町にたどり着いてクリスと関わらなければ、こんな事は起きなかったはずだ。

何かあったら……ボクのせいだ。

ボクがクリスの、触れてはいけないところに触れたんだ。

どうしよう、という単語ばかりが頭に浮かんだ。

身体が動かない。最悪な事ばかりが脳内をめぐって、それを確認するのもかもしれないと言う恐怖がボクの身体を縛る。動け、動けない、怖いから行きたくない、逃げたい。

「ねえ、そのクリスという子は『絵本』を持っていた？ 大事に？」
固まりかけた意識を引き戻す、ガーネットの声。

ボクは声を出せず、こくこくと頷く事しかできなかった。

それがどうしたのだろうと思う。絵本は何冊もばら撒かれている。半分くらいはもう燃やされたりしているかもしれないけれど、全滅したってワケじゃないはずだ。

顔を見合わせる『傍観者』の二人。

そこにはボク以上の焦りが浮かんでいた。

「……ガーネット、まさか」

「可能性がある」

二人の間だけで進んでいく話。疑問が恐怖を消す。

「ねえ、どうかしたの？ 絵本がどうかしたって言うの？」

「その子は遺跡にいるよ、きつと」

「え……？」

「さっきも言ったけど、キミのような一部の人間にしか、あの『絵本』は持つに値するだけの価値を見出せないものなんだ。もしもその少女がこの森にきたのなら……いや、遺跡以外にこの森へくる理由はないといってもいい。街道からもそれる、どこかの町に繋がる裏道も無い」

「案外、絵本を捨てるつもりかもしれないな。遺跡の屋上から投げ捨てれば……ま、よほどの幸運、あるいは運命の悪戯でもない限りはもう一度めぐり合う事もあるまい」

まさかそんな事のために、と思いながらも……意外とそうなのかも、と思う。もしも森に来ているなら、ガーネットの言う通り遺跡目当ての可能性が一番高いとボクも思った。

川に投げ捨てるなら、町のそばにも流れている。というか、単に捨てるという目的ならば暖炉にでも投げ入れればすべて終わるのだから……失踪する必要は、ない。

あえて森に来る理由がるのなら。

それは、ここにしか無いモノが目当てという場合。

ここにしか無いモノ、絵本と関わりがあるモノ——遺跡。

「……行こうっ」

顔を上げて走り出す。身体は自由に動いた。恐怖なんて知った事か。今、ボクが考えてやるべき事は一つだけ。クリスを捕まえて連れ戻す！ただそれだけを目標に掲げればいい。

ボクの両隣をガーネットとアマランスが走る。

今は僕に合わせているけれど、さすがに二人の方が早い。

「二人は先に行って！見つけたら、絶対に逃がさないで！」

ボクの声に二人は小さく頷いた。そして加速する。

あっという間に二人は遠ざかっていった。でも悔しいとかは無い。自分がそうして欲しいと望んだと言うのもあったし、今はそんな事より少しでも早く彼女を見つけなければと思った。

朝、クリスがいなくなってから感じている焦り。

何となく、その正体がようやく掴めてきた気がしていた。

同じ絵本を持っているから、伝わった。彼女の『絵本』に映りこむ感情に、クリスが飲まれかけている事が。それが狂気なのか恐怖なのか、その辺りはさすがにわからない。

でも早くしないと、本当に取り返しがつかない事になる。それだけが、もう疲れ果てているボクの足に力をくれた。次第に遺跡の姿

が見えてくる。もうすぐそこに在る。急げ急げ、ゆっくりなんてしてはいけないし許されない。足を前に進めて、ボクはクリスの長い髪を捜した。

ボクの視界を遮る草むらを抜ける、飛び出す。そこには肩を上下させて立ち止まっているガーネットとアマランスの背中があつて、ボクは勢いを抑えられず二人にぶつかってしまった。

「おっと」

「……大丈夫か？」

「ん、ゴメン。……つてて」

鼻を打って少し痛い。視界が歪んだ。おかげでボクは転ばないですんだし、転んでしまった場合の痛みを考えたなら、この程度の痛みなんて全然平気。だからボクはそう言って笑った。

だけど二人が足を止めているのは、どうして。

ボクを気遣いながらも前を向いたままなのは……なぜ。

答えなんて問う必要も無いほど簡単。

そこに捜し人がいるから。

——クリス。

寝る前に見た寝巻きのままの彼女は、その腕に絵本を抱きしめている。彼女はボクを見てびくりと身体を震わせた。何かを言いたそうな表情で、睨むようにボクを見ていた。

ガーネットとアマランスは動かない。

ボクが何とかすべき問題だと、彼らはわかってくれているから。

「クリス、帰ろう。みんな君を捜してる」

ボクはゆっくりと彼女に近寄った。

そのたびに、彼女はボクから離れていった。

どうしてとは問わなかった。こういう時は本人にも理由はわからない。ボクはそれを嫌になるくらいに思い知っている。だからわかる。無理やりに連れ戻しても意味は無い。

彼女が、クリスが自ら家に戻ろうと思わない限りは。

だから落ち着くように、説得しないと。

「町中大騒ぎなんだ。君がいなくなつて」

近寄れば離れていく。これじゃ、まるで追いかけて。ボクは早くクリスを捕まえようと思つていて、向こうはボクから逃げようとしている。でも実際は追いかけてこじやない。

このままじゃいつまで経つても、変わらない。

「クリス……！」

だからボクは間合いを詰める。小走りに駆け寄つて、その腕を掴んだ。運動量としてはこっちの方が上。それでも毎日男の子に混じつて、森や山の中を走り回っていたからね。

いきなりの急接近と接触。クリスは驚いて息を呑んだ。

その飲み込んだ息で、ボクを睨んで——一言。

「来るなバケモノ……っ！」

最初は何を言われたのかわからなかった。耳から入った最初の情報を頭に届けて、それ以降は途中で詰まって止まつて、そして大混乱している。音の響きだけが頭でぐるぐる回る。

バケモノ。……ボク、が？

「クリ、ス……？」

「青なんて知らない赤も知らない緑って何なの橙がわからない！ 知りたいなんてこれまでたった一度だつて一瞬だつて思わなかったのにどうしてわたしの頭の中に流れ込むの！」

絵本を抱えて叫ぶクリス。目を見開いて叫ぶ。ボクは他人の心なんて読めない。でも今のクリスがボクに対して、憎しみにも等しい感情を持つている事が伝わった。

でも原因が思いつかない。そりゃ、誰だつて気に入らない部分の一つや二つはあつたりするとは思うけど、バケモノと罵られるような嫌われ方、憎まれ方つて尋常じゃない。

「こんな絵本、捨てたいの読みたくないの見たくないの触れたくもないの！ けどなぜか捨てたくなくて読んでいたくて見続けたくて触れていない事が耐えられない……っ」

地面に叩きつけるジェスチャー。でも実際にはその手から離れる

事は無い。ぶるぶると震えるくらい強く握った手が、どんなに腕を降るっても放すものかと掴んでいるから。

口と身体、思いと身体が対立しあう。

ぎよろりと、クリスの目がボクに向けられた。まるで全身の間際までいくつも凶器を突きつけられているような、痛くて寒くて怖くて身体が震えてしまう。こんな目をする人が実際にいるなんてボクは知らなかった。それをクリスがしているだなんて想像もしてない。ふっと浮かんだ、クリスの笑み。

それはきつと、狂喜という名の凶器と狂気。

「この本が『面白い』って言ったね言ったよね言ったでしょう！」

「……言ったよ」

「これが面白いつて言った人を知ってるの！ お姉ちゃんを殺したヤツ！ 薄汚い下卑た笑いを浮かべてお姉ちゃんのね、あんなに優しくてかわいなお姉ちゃんの頭を鉋でめちゃくちやにしゃがった！ そのバケモノも言ったのこの絵本が面白いつて！」

ボクの顔にぶつけるような勢いで、絵本をグイグイと前に突き出す。怒っているというよりも、自分が思いたしている事を必死に報告している感じ。今度はボクが離れていく。

さつきとは逆だった。ボクが追われてクリスが追って。

見守るつもりだったらしいガーネット達。クリスの様子を見ていてさすがにヤバいと思い始めたのか、さら、と前に足を踏み出して力をこめた音が聞こえてきた。

いつでも飛び出せるように、身構えているのかもしれない。

それを見たクリスは、笑顔を一变させた。怯えと怒りが混ざった顔。もう聞き取れない奇声を上げながら、懷から果物用だと思われる小ぶりのナイフをさっと取り出す。

それをボクに向けながら彼女は、叫んだ。

そこにはもう、ボクが見知ったクリスという少女の面影は無い。

「来るな来るな来るな、お前らみんなバケモノなんだっ！ 鉋で頭をグチャグチャのぐちゃぐちゃに叩き壊してお姉ちゃんを殺したア

イツと、自分を同じように壊して壊れたアイツと同じバケモノバケモノバケモノバケモノバケモノバケモノ……っ！」

ナイフを振り回すクリス。あああ、としか聞こえない絶叫で耳が痛い。どうやってたら止める事ができるかを考える。その思考は頬をナイフの切っ先が掠めて、ぷつりと途絶える。

瞬間的に沸き起こる恐怖。

ボクは無意識に彼女から離れた——離れてしまった。

「わたしを同じようにしようとしても無駄っ。あんなにも醜くて汚らしいバケモノに成り下がるくらいなら、あんなニンゲンの姿をしたシロモノに成り下がるなら……っ」

叫んだクリスは切っ先を自分に向けた。飛び出したガーネットも間に合わない。きらりと水面のように光った鉄の板が、滑らかに滑り込んでいく。クリスの——身体の中へ。

柔らかい寝巻きの生地と脆い皮膚を切り裂く。

横に滑らせて、液体が零れる。

ボクはそれを『赤』と知っている。

ガーネットが追いついた、ナイフを抜いた。

液体が溢れた。

アマランスが服の裾を細く裂いて巻きつけ、ナイフが切り開いた部分を隠す。着々と応急処置が進んでいく。もうじき、二人で彼女を町まで運ぶのだらう。傷についてどんな理由を用意するのか知らないし考えたくも無いけど、森の中じゃ応急処置さえまならないから。

それを、ボクはピクリとも動かずに見ているだけ。

呼吸さえ止まりそうな、いっそ止まれと思うほどの、後悔と絶望……。

数日後、ようやく意識が戻ったクリス。とても明るく笑う女の子。くすくす、うふふふ、笑い続ける。

その笑顔はとても、とても幸せそうだった。

さすがに自分で切り裂きましたとは言えなくて、お腹のケガは森の中で転んで、運悪く尖った岩で切ってしまったと説明してある。ごまかせないお医者様にだけ真実を言った。

絵本はガーネット達が燃やしたという。ボロボロだったのは読みすぎたから、そして汚れはおそらく人間の血液。アマランスの見立てでは、クリスの姉の血じゃないかという。

ご主人と奥さんは何度も頭を下げて、ガーネット達にお礼を言っている。

命の恩人だつて、泣いていた。二人は気まずそうな表情。当たり前だ。クリスがああなってしまった原因とも言えるのだから、お礼を言われても複雑でしかないだろう。

「クリス……」

ボクは話しかける。バケモノと罵られない。代わりに反応も無い。クリスは薄く目類染めて笑っている。今の彼女は、笑うためだけに存在しているに等しい『人形』。

心が壊れたクリス。

あの時ボクが離れなければ、あるいは。

「……ごめんね」

これが……絵本がもたらした悲劇。こんな事が、十年前の聖都を襲った。一つ二つなんてものじゃない。その時には十個も二十個も起こってしまった、まさに最悪の出来事……。

こんなのを見たら、確かに慎重にもなる。同じ事を繰り返したらって思う。今ならガーネット達が僕に説明をしてくれなかった、その理由が痛いくらいに悲しいくらいによくわかった。

ねえ、クリス。ボクは『色』を捜し続けるよ。君が壊れるくらいに否定した、否定し続けていたモノは、確かに『選ばれた者』をその資質ゆえに苦しめてしまうのかもしれない。

君の姿を見たボクは怯えている。

いつか同じような事になるのかも、って。

だけどボクは行くよ。泣きたいくらいに悲しくて怖い。逃げたい。

だけでもう逃げたりしないって決めちゃった、決めたんだ。泣きたいだけ泣いてきたから……もう大丈夫。

ねえ、クリス。ボクは『色』はこの世界の人間に、必要な物だと思う。信仰という名の贖罪なんてもう意味が無いんだよ。いい加減に自分で自分の罪を赦すべきなんだ、人間は。

ボクは、行くよ。

* * *

旅の最中。ふいに脳裏をよぎったのは、あの子供の姿だった。

十年前の一件以降、この世界そのものさえが異常に見えるエストが、声の主——従者以外に初めて出逢った普通に直視できる存在。言うならば『視界に優しい』容姿の子供。

数日振りに再会した灰髪の子供は、エストを見てその顔を歪ませた。

その、今にも泣き出しそうな表情に、さすがのエストも焦る。慌てて羽織りかけていた外套を脱いで子供にかぶせた。人前で泣くなど、余計悲しくなるだけだと思ったからだ。

——前に搜していた女の子とやらはどうした？

無難な話題のつもりだった。だけど外套の隙間から覗く表情がさらに歪み、エストは選択を間違えた事を知る。けれど音としてつむぎ出した声は、もう取り消す事はできない。

小さな、聞き取れないほどの声で、子供は呟く。

——間に合わなかった。ダメだった。助けられなかった。壊してしまった、救ってあげられなかった。すぐそばにいたのに何もできなかった。ボクは弱い、反吐が出そうなくらい弱い。

小さな肩を震わせて泣く。小さな声で泣く。事情がゆつくりと語られた。

間に合ったけど間に合わなくて、救えるはずだったのに救えなくて。何もかもが悪い方向に進んだと子供は泣いた。クリスという名

のその少女は壊れて、もう戻らないと。

——命は助かったかもしれないよ。生きてるかもしれないよ。だけれどもクリスマスは元の彼女には戻れない。ボクが壊してしまった。壊れてしまった。ボクが彼女を壊してしまった。

泣きじやくる子供を人がいない場所へ連れて行く。そこで望むまま、泣きたいだけ泣かせてやった。共に旅をしているという者の前では、どうも泣けていないようだったから。

その感覚はエストにも覚えがある。悩みを誰にも言えなくて、苦しさをどう伝えればいいのかがわからなくて、一人で何年も抱えていた。引きずりながら、捨てられずにいた。

ひとしきり泣いた子供は恥ずかしそうな顔で、そつぽを向きながら小さな声でお礼を言って去っていく。その背中には、過去のエストが持てなかった『強さ』が見えた。

あの、幼いながらも凜とした強さを持った子供。

同じ事になってしまふのだろうか、あのクリスマスという名の娘と。

あの、『悪夢の魔本』に導かれるままに……。

「あいつは……あいつは、大丈夫なのか」

『それは心配ないよ、エスト』

『そうそう、心配ないんだよ、エスト』

独り言のように呟いたその声に、従者は答えた。

『だって彼女は不幸な娘。でもあの子は幸福な娘』

『だってエストは選ばれた者。二人は選ばれし者達』

『生半可な力じゃ己を壊すだけ。それが絵本の副作用。見えないモノ、感じる事ができないモノを無理やり知識として植えつける。それが『異界の絵本・ダークネス』だから』

『中途半端な資格なんかじゃ、自分を殺すだけ。それが『悪夢の魔本』の副作用。死んでも生まれ変わっても至れないような、遠すぎる場所に向かえと脅迫する。それが——』

「もういい」

あまりにもくだらない、興味をもてない内容になってきたので止める。それからエストはまた歩き出す。とりあえずそろそろ聖都に帰らないと、やっかいな事になりかねない。

しかし彼の歩みを邪魔するものがいた。彼の『従者』である二つの声だ。

『でもエストが他人を心配するなんてねー』

『しかもよりによってあの子だしねー』

くすくすと嗤う声。

「……どういう意味だ」

『『あれー、もしかしてあの子の事、エストは全然知らないの？』

あの子が何なのか、誰なのかを知らないのに、それなのに、さつきからエストはあの子を心配しているの？』』

「……ああ」

『『そっかー、知らないなら仕方が無いね。教えてあげる』』

重なる声は不協和音。

くすくすと嗤う声。

『『あのねえ、初めて私と俺とエストが逢ったあの夜に』』

十年前、エストが暮らす町に二人が『絵本』をばら撒いた、あの夜に。

『『色の篡奪者——エストが殺した《灰の娘》だよ』』

八章 クロクテシロイセカイノミエカタ

人間の世界に満ちているのは『白』と『黒』。少し前まで『灰』もあつた。

色の篡奪者が奪い去つたのは十年前。

それ以降の人間の世界には、『白』と『黒』だけが存在していた。例えば人工的な素材で作られた、数多の建物の壁は『白』く、屋根は『黒』く。

服も『白』に『黒』で模様をつけたり、その逆だつたり。

——それゆえに『白と黒の世界』。

篡奪者はそんな世界を満足げに見ているという事は無く、人間世界の外側——自然の世界に目をやって、それはそれは忌々しそうに舌打ちしているのだつた。

その人物は『色』を憎んでいた。年齢は十八前後。従者の『二人』の目には、彼の髪は美しい『黄金』に見えた。彼ほど美しい髪を持つ人間はいないと、従者は思っていた。

瞳は、澄んだ水面に浮かぶ空のような『青』の宝石のように見える。

彼にも自分の姿の美しさは『見えている』はずだつた。

——彼は『色を見る者』。この世界の真実の一端を認識できる存在。

二人が自ら『悪夢の絵本』を授け、その能力をゆつくりと磨き上げた逸材。

しかし彼の悲劇は、その人とは違う能力にある。

彼は色を『見る』だけで、『知っている』わけではなかった。例えば従者から、自分の髪がこの世のものとは思えないほど美しい『黄金』で、瞳は宝石のような『青』と賛美されても、彼にそれを理解する事はできない。彼は『色を見る事』しかできないから。

それどころか、気持ち悪いとさえ思うようになった。他人に『見

えない』領域を認識する事ができる能力を、彼は幼い頃から忌み嫌
い続けて——一度は目を潰そうとまでした。

それを思いとどまったのは従者が現れた時だった。今から目を潰
そうとしていた彼の元にやってきた従者は、彼が『見ている』世界
を同じように『見る』事ができたのだ。

その瞬間に彼の旅は始まっている。

篡奪者となつて、世界の全ての『色』を奪う。そうすれば自分の
異質さを自覚する事はなくなる。正直なところ『白』や『黒』が一
番心地よく感じ、他の何より好きだった。

従者は無条件でその考えを支持し、練習がてらに『灰』を世界か
ら消した旅は今もまだ続いている。それは、すべての『色』を世界
から消し去らない限り、終わらない旅。

色を奪う彼と同じ世界を共有する存在の、『白』と『黒』の従者。
彼らはとある『遺跡』を目指して——単独行動中だった。

今から逢いに行くのだ。己の主人と対になった、似て非なる存在
に。

それは裏切りにも等しい行動だった。

実際に彼は、この行為を『裏切り』だと認識するだろう。右と左
で異なる姿勢を持った歪な従者は、流れが穏やかで湖のような川の
岸辺で、鏡のような水面を見つめていた。

今宵は月夜。周囲は仄かに明るかった。

「エストはなんて言うかな？」

「怒るんじゃないかな？」

「でも仕方が無いよね。それが私の仕事だし」

「うん、仕方が無い。それが俺の役目だし」

「裏切りだって言われるだろうね」

「絶対に裏切りって言うだろうね」

「でも、本当に仕方が無い事なんだから、逢いに行かなきゃ」

「それが一番の方法なんだから、逢いに行くんだ」

「そうだよね」

「そつだよな」

鏡合わせの彼と彼女は、そっくりな顔に笑みを浮かべた。草を踏みつけて立ち上がる。そこには『一人』だけが存在していた。

「さあ、逢いに行こうか」

声が重なり、『従者』は歩き出す。

* * *

クリスの一件から数日。また遺跡の中をうろつくボクは、彼女の言葉が心に突き刺さったままだった。一応、心配かけないように平気なフリはしてるけど、バレてそうた。

バケモノ。

その一言が突き刺さったまま、棘が抜けない。壊れたクリス、くすぐすと楽しげに朗らかに笑って生きているだけの少女。彼女がボクに突き刺したその棘が……疼く。

彼女はもう一人のボク。ボクだって、あなっていた可能性がある。彼女の事は絶対に忘れてはいけないというか、忘れてしまうと、いう心配をする事さえ間違っている。

ボクが死ぬその瞬間まで忘れられない、絶対。

「はあ」

ため息を零す事で意識をリセット。いつもなら頬をバシバシ叩くけど、その元気はまだ復活できていない。あの出来事でおれてしまった心を、今は優しく治している途中だ。

朝からボクがしていたのは、いつものように『遺跡』の中を歩き回る事。ガーネットもアマランスも今日はボクの近くで瓦礫やら何やらを、どかしたり覗き込んだりしている。

……にしても見つからないな。色の『象徴』とか言うからには、たぶん色がついている物を探しているんだろうけど、ボクには『見えない』からどれがどれやらサッパリ。

ガ―ネットは第六感的なところでわかるって言ったけど、今のところ『コレだっ！』的感覚がきた事は一度も無い。マネキンや人骨による、精神的疲労ならたくさん感じたけど。

「あ、ボク向こうを探してくるね」

「気をつけて。足場が悪いところもあるから」

「何かあれば叫ぶなりしろ」

「ん」

笑って手を振り、ボクは上の階へ。懐中電灯で足を置く場所をちゃんと照らして確認しながら、変なものを見たり踏みつけたり蹴飛ばしたりしないよう注意する。

祟られたり呪われたりするのだけは嫌だ。

実際、そういうシロモノがわんさかと眠っている場所なんだから、ここは。

「よ……つと、げほっ」

咳きこみながらモノをどかして、その奥に見つけた棚に手を突っ込む。ふと、指先に冷たくてざらりとした――たぶん金属だと思う冷たさが触れた。

一瞬だけ触れて離れたそれを探し、掴み、ボクは棚から引っぱり出す。

懐中電灯の光の中に浮かび上がったそれは、金属の板――というか髪飾りだった。

錆びてボロボロだけど、どうやら挟んで使うタイプの髪留めみたい。

祭りの時にやってきていた露店で似たような形の髪留めを見た事があるけれど、やっぱりそういう道具類って、最終的には同じような形に行き着くのかな。

まあ、これは違う。ピンと来るどころかがっかりしただけ。もう何度も繰り返した行為だからため息も出てこなかった。元の場所に押し込んで、次の棚を覗き込む事にする。

「それにしても……」

ボクは手当たり次第に『象徴』を探しながら、建物が『遺跡』ではなかった時代の事を思うようになっていた。一部の専門家だけが夢に描くか、彼らでさえ想像もできない便利で高度な技術を、当たり前の事として日々の暮らしの中で使っていたかつての人間。

醜く争った拳闘、一人の人物に悲劇をもたらした『色』を奪われた哀れな民衆。

呪われた血を受け継いだ——ボク達。

人間が犯した罪は、こんな仕打ちを受けるほどのものだったのか。これほどまでの罰を受けるに値する罪を、かつての人間は犯してしまったのか。

今を生きるボクに、その事を判断できるわけが無い。

戦争なんてボクの祖父母世代が幼い頃に一度あったという話しか知らないし、名前しか知らないような遠くの国同士の話だった。ずっと関係なかった。ずっとそう思っていた。

まさかこんな身近に感じ、あれこれと考えることになるなんて……。

「あんま嬉しくないや」

棚の奥にあった何かをどかすために摘み上げ、後ろにポイッと投げ捨てた。ガーネットに言われるまま作業を続けてきたけれど、やっぱり成果なんて何一つ出ていない。

しいていうなら、ボクの考え方がちょっとだけ前と変わってきたくらいで、それは目的にはまったく関係が無かった。……何も変わっていないよりはマシか。

考え方。流れるままになっていたボク。絵本の事も深く考えないでいた。

今は、それが幸いだったのかもしれない。クリスの一件はボクにそう思わせた。どこかが変わっていたら……今、クリスは隣にいたのかもしれないと思う。もしも彼女がボクと同じ『選ばれた者』ならば、一緒に『象徴』を探して旅をするとか、そういう未来もあったはずだ。

それが完全に消えたのが、悲しい。

彼女は何も悪い事はしていない。被害者なのに。

酷い事をされたらム力つくだろうし、憎む気持ちだってわからないわけじゃない。

だけど『そろそろいいんじゃない？』って思う。

もう充分、罰は与えたじゃないかって。だから人間は、そろそろ赦されてもいいんじゃないかって思う。これ以上は、ただの虐殺か……弄んでいるだけなんじゃないかって。

だからボクは探す。自分にできる事をやる。

「とはいえ、うまく行かないなあ……」

さつきから見つけたものといえば、錆びた髪飾りからよくわからない布切れとか。何となくどういう使い方なのかわかるだけで、結局『ゴミ』としか言えないモノばかり。

これじゃゴミの分別じゃないか。そういえば『夫婦』の妻にも、燃えるものと燃えないものをちゃんとわけてから捨てなさいとか、何度も何度もしつこく言われたっけ。

思い出してちよつと憂鬱。

大嫌いとかが言いながら、実はしょっちゅう思い出していた。

何だかガキみたいで気に入らない。どの辺が、と言い切れない辺りが、余計に苛立ちを膨らませていく。こう、適当な壁でも何でもいいから蹴りたい感じ。ムカムカする。

この辺りにはもう何も無い。勝手に結論して別の場所に向かう。壁のどこかに大穴でもあけばいいのに。空気が籠って、気持ち悪い。

思考もグルグルするだけで何の成果も生まないし。

と、視界の端っここのさらに端っこで何かがきらつとした。

ほとんど条件反射に近いスピードで、ボクはそっちに向かって走り出す。

「あれ、は……」

しばらくしてボクの視界に入ってきたのは、小さな棒の欠片だっ

た。先端の片方が緩やかに丸くなっていて、長さは人間の指くらいしかない。太さもそれくらいだった。

人間の指そっくりに見えたから、壊れたマネキンかと思ったけれど違う。

足が勝手にボクを棒に近づけていく。

そして屈めば手が届く位置まで来た瞬間だった。

なんでだろう——光って見えた。

太陽の光を浴びて煌めく水面のように、人間の指ほどの長さで太さしかない棒は、どうみてもガラクタのはずなのに、ボクの視線をガシッと固定してしまつて離してくれない。

ボクは誘われるように手を伸ばす。拾つてみると軽かった。

表面はベトベトした感じ。ここを握つて、という事なのか紙が巻かれていた。

でもそれだけじゃ何の道具だったのかわからない。

においをかぐと油っぽい感じの匂いがする。

正直、いい匂いとは言いがたかった。この柔らかそうな棒は台所用品なのか、それとも医薬品なのか……ああ、でも匂い的に後者は違うと思う。脂臭いし、薬とは思えない。

これの他に何かないか探そうかと思つたけれど、そろそろ二人のところに帰った方がいいかもしれない。心配かけてケンカされても困るからね。

ボクは見つけた一本の棒を手に、来た道を引き返そうとした時。

「「みーつけた」」

二つの声が、見事にハモつて聞こえた。

明らかに何かが出そうな場所で、本当に何かが出てきてしまう。そんな状況で、世の人間は大まかに分類すると二種類の行動を取るとボクは思う。

それは『逃げる』か『叫ぶ』の二つ。

もちろん気絶という展開もあるだろうけど、ボク的にそれは行動とはちよつと言いがたいので除外。動けないというのも同じ理由で

除外した。

そしてボクは——動けなかった。

声が聞こえたのは明かりがギリギリ届く前方。つまり近くに『何か』いる。それもボクがあつた事も無い何か——いや『誰か』。もしかしてガーネット達の仲間なのだろうか。

「「はじめまして、『色を知る者』さん」」

その『何か』達はゆっくりとボクに向かってきた。

くすくす、と笑う声はハモる。どうやら少女と少年が一人ずついるらしい。

足音は一つしか聞こえないけど、声はちゃんと二つだ。お互いに手を伸ばしあえば触れ合える距離で、その正体がまだ見えてこない『何か』達はぴたりと足を止めた。

——ボクは見た。見てしまった。

それは、とても異様な姿形をした人間。だと思われるモノ。

右と左で髪の毛の長さが異なっていた。

それらはつきりと、意図的にやったにしても不自然なくらいに分けられている。まるで髪の毛の長さが異なる同じ顔の人間を真つ二つにし、それぞれの右側と左側を一つにくつつけたかのような感じ。……というか、そう説明するしかない容姿だった。

着ている服も半分。髪が長い右側はフリフリのスカート。

お人形さんと言われそうな、あるいは御伽噺のお姫様のようなデザインだった。

片方はフリフリこそついているけど、こっちは普通のズボン。

右半分しかないスカートと、左側だけのズボン。

服はちょうど身体を中心ラインに沿って、太い糸でジグザグに縫い合わされていた。

「「私」俺はスノウ／オニキス。君と似て非なる『色を見る者』の従者」」

二人と言っているのか、スノウ／オニキスは会釈して挨拶する。

「色を……見る？」

「「その通り。私〃俺の主人は『色を見る者』。君と似て非なる別の人」」

喋る声も笑う声も、彼女——あるいは彼の声は重なっていた。歌をうたったら誰もが聴き惚れるような、とても綺麗なハーモニーになっただろう。……その異様な姿さえ見なければ。

スノウ／オニキスは微笑み、さらに接近してくる。

肩につく程度まで伸ばした左側、下ろせば毛先がおしりまで届きそうな右側。それぞれの髪が時計の振り子のように、動くたびに左右にゆらゆらふらふら揺れた。

伸ばす指先。右手がボクの頬に触れる。ヒンヤリしていた。

「君が——だったら」

哀しげに、切なげに、スノウ／オニキスが重なる声で呟く。

左右の瞳がゆっくりと、泣き顔に似た形になっていった。

何かの要因で泣きそうになっているのか、悲しいだけなのかはわからない。

その声は小さすぎて、ボクにすべてを聞き取る事はできなかった。

「ん？ それは？」

彼女あるいは彼がボクの手視線を向ける。そこにはさつき拾ったばかりの、あの棒切れが握られていた。落つことさないようにしっかりと握っていたらしい。

無意識って凄いと思った。

「さつき拾ったんだけど……これが何なのかわかるの？」

「うん。だってこれ『クレヨン』だよ。お絵かきに使うんだよ」

「

「お絵かきに？ コレを？」

こんな油臭い棒切れをどうやって使うんだろう。っていうかこの棒って『クレヨン』っていう名前だったんだ。当たり前だけど全然知らなかったし、聞いた事も無かった。

昔の人ってこういうのを使ってたんだ……。ボくらのお絵かきっていったら、砂の地面に木の枝で丸とか三角をぐりぐりーって感じ

だったから、ちょっと新鮮。

そりゃ、紙に描くお絵かきも無いわけじゃないけど、それさえ子供の——とても幼い頃に終わってしまうお遊戯だった。ボクだって三歳くらいで卒業した。

わざわざそれ専用の道具を作るほどじゃないと思う。ただの暇つぶし感覚だったし。

何だか、昔の人間へのイメージが変わっていく。

とても暇な人達だったんだろうか。

「クレヨンにはいろんな『色』があるんだよ。昔の人はたくさんの『色』を使つて風景とか人間とか頭の中の想像を、目に見える形にしたがる傾向があつたんだよね。クレヨンはその『子供用』の道具。まあ、大人でも使つてる人はいたけどね。ゲージツカとか」
暇を持て余していたっていうのも正解だけどね、とスノウ/オニキスは笑う。

何だか変な気持ちになりながら、僕は手の中の『クレヨン』を見る。これでお絵かきとかやつてたんだな、昔の人。どんな風に使つたんだろう。ちょっと興味があるかも。

「今は無いよね、こういう道具」

「だって『色』が無いから。絵にして残す『美しいもの』に気が付かないしね」

「そっか……」

「人間という種が捉えられるのは『白』と『黒』の二つだけ。そして普通の人間は『色を知らない』から、その不幸には気付かないまま、知らないまま生きて死ぬ。どんなに頑張つて意識してもそれが何の『色』なのかわからない。疑問も抱かないまま回り続ける」
そして世界には自然と『白』と『黒』だけが満ちていった。

どうあがこうとも、人間に許されたのはその二つに縋りつく事だけ。

それ以外は『神様』が奪ってしまったのだから。

ガーネットはこれという問題は無さそうな様子で言っていた。

だけどさ、たった『二色』しか無い世界——『白』か『黒』の二択しか存在が許されていない世界って、本当は凄く歪なモノなんじゃないかな？

いつそ全部奪っていいのに、そうはしなかった『神様』。そこまで『神様』を怒らせた大昔の人間って……どんな事をしたんだろう。

「この世界はとても歪で異質。だから『色を見る者』は世界から『色』を全部無くす事を決めて旅を始めた。だって彼は、君と違って『色を見る者』だから」

「ごめん、意味がちつともわからない。意味というより、そういう事になった動機が理解できないともいう。見知らぬ人の話ってだけでも、ぶっ飛びすぎて理解が追いつかない」

「『どういえばいいんだろ。君は『色を知っている』だけ。彼——私——俺の主人は『色を見る』だけ。空が『青』で血が『赤』で葉が『緑』で太陽が『橙』だ、という君が普通に知っている事を知らない。つまり『色が見えているイコール知っている』じゃない」

それは同感。

ボクはただ色と呼ばれる存在の事を、知識として知っているだけ。それそのものが『見えている』わけじゃない。

だから色が『見えている』事と『知っている』事は違う。それはわかる。

「『彼は空の『青』を見ている。見る事ができる。だけどそれを『青』と知らない。知らないのに『色』が視界に入る。すっげーきもちわりい、吐きたい、うげー。そういう事」

「……」

「『気持ち悪いモノを排除したいのは普通。当然。あつたりまえー』的思い。人間ってそういう生き物なんだから。アマランスが大嫌いな人間の、大嫌いな一番の理由と同じ」

ボクは空が『青』なのはわかるけど、『青』が見えているわけじゃない。誰かに教えてもらったわけじゃないのに、ボクはそれを当

たり前の常識として受け入れてきた。

教えてくれたのはあの絵本。資格を持つ者の心を鏡のように映し、わずかに有する能力を磨き上げ鍛え上げ大きく育てるための箱庭。時に人を壊してしまう『悪夢』の元凶。

もしかして、スノウ／オニキスの主人も、同じ絵本を持っているのだろうか。少し気になったから尋ねようと思った。いや、素直に教えてくれるかなって、少しだけ迷った。

「……ところでさ、もうこの世界から失われている『色』があるって知ってる？」

結局、疑問を口にできないまま、スノウ／オニキスが先に喋りだした。その顔に薄く浮かんでいる表情が、さつき小さな声で何かを言った時と似ているように見えた。

「……ガーネット達は知っていると思うけどね。たぶん君には言っていないと思う。ビックリするくらい人間嫌いのアマランスだけど、そんな彼でもこれは言いにくいだろうし」

ガーネットはともかく、アマランスでも言いにくい。

人間嫌い、という単語がくっ付くって事は、きつとボクの事。

意図的に言わない事になっている事って何だろう。

……気がついていないのに気がつかないフリをしている、嫌な気持ちだ。

気がついていないのに知らない事になっている何か。

身体が震える。

動け、そしてスノウ／オニキスを黙らせろ。

知らない事にしたいなら、知らない事にしてきたのなら。

それなら、そのままでもいいじゃないか。

聞くな黙らせろ口を塞げ。

「……数年前に私……俺が『主人』にあつたその日、この世界から一つの『色』——そしてその色に属するモノの大半が欠けた。地名とかことわざとか、そういうのは残されたけど」

聞きたくないのに音が聞こえる。

黙らせたいのに身体が身体を押さえ込む。

スノウ／オニキスには、震えているだけに見えるかもしれない。

でもボクは、殴ろうとしているのか、口を塞ごうとしているのか

——それとも命を奪おうとしているのか。自分でもわからない衝動に押される身体を必死に止めていた。

聞きたくないのは『お前』の勝手だ。

ボクは聞きたいんだ。邪魔するな。

「欠けたモノの一つは名前。ある子供の『名前』が消えた。本人も家族も、その子がどんな前なのかわからなくなった。わからないから呼ばなくなった。子供は寂しくなった」

声だけが聞こえる。

目の前はグチャグチャ。

頭の中も。心も。

「私」俺の主人にとってそれは練習。子供からしたら、ただの練習で自分の名前を『殺される』んだから、きつと事実を知ったら怒ると思うね。自身の存在否定に等しいから」

手からころりと零れていくクレヨン。

それをゆつくりと拾い上げるスノウ／オニキス。

「今から奪った『色』を返す。ちよつと手を握ってくれないかな？」

言われるまま差し出されたスノウ／オニキスの手を握り返した直後、反対の手に握られていたクレヨンがゆつくりと形をなくしていった。まるで薬が水に溶けるような光景。

まるで昇っていく煙のように、クレヨンは細く短くなって消えていく。スノウ／オニキスの言葉がクレヨンを『持っていく』ように、そばにいるボクには見えていた。

「世界に満ちる、数多のモノは『灰』になる」

ヒトも、草も、関係なく。

「世界に在るすべてのイキモノは『灰』に還る」
それがイキモノの運命。

なぜならば。

「命が燃えつき消えた後に、残されるのは『灰』だから」
命が燃える。

その場に残されるのは『灰』。

ボクの中で鍵穴に刺した鍵を回す音がした。

――声が蘇る。

ずっと幼かった頃の記憶の中で、光り輝いている声。

目の前で揺れている数本のろうそくと祝福の歌。二人の大人がと
てもとても優しい微笑みを浮かべて、今よりずっと幼いボクを見つ
めていた。とても、幸せそうだった。

お前の名前は神話を元につけたんだよ。世界が炎に焼かれた時の
事だ。神様は炎がすべての命を奪った事を嘆き悲しみ、何もできな
かった事を心から悔いた。自分がもつと早く何かをしていればよか
ったのに……。そう呟いて両の眼から涙をお零しになったのだ。

涙は溢れ続けて、下に積もった灰を濡らした。神様はたつぷりと
濡れて粘土のようになった灰をゆっくりとこねる。そして人の姿に
作り変えた。人の姿をした灰の塊が生まれた。

たくさん人の灰が混ざっているから、そんな事をしても蘇ら
せることはできないと知りながら、一人ぼっちになった神様にはそ
んな事しかできなかったんだ。

神様にだって限界はあるさ。でなければ人々の『願い』の中に、
叶うものと叶わないものが出てくるはずが無い。だから神様にだっ
て、できる事とできない事があつたんだよ。

でも神様の祈りは『叶った』。灰の人形が大きく膨らんで、人間
になったんだ。

灰になっても生きたいと願った人々の想いが、神様の願いを叶え
てしまったんだよ。神様はとても喜んで人形をたくさん作って、人
間をたくさん生み出した。

そして、何もできなかった事を蘇った人々に詫びた。人々は神様
を許した。神様がどれだけ苦労して灰の人形を作ったのか、人々は

ちゃんと見ていて、知っていたからだよ。

以来、それが何のモノであれ『灰』は神聖なものとして扱われているんだ。

暖炉の灰を残さず集めて教会に持っていくのはそのためだよ。

すべての灰は『生命の象徴』なんだから。

お前は生まれてすぐに何度か死にそうになって、そのたびに息を吹き返した。子供のころから病弱で、ちょっとした風邪をこじらせでは生死の境を彷徨った。

だけどそのたびにお前は、何度も何度も元気になった。

その姿を見た時に思ったんだ。

ああ、まるであの神話のようだって。生まれたばかりのお前は『死にたくない』って叫んでいる、熱にうなされながらも幼いお前は必死に思っているんだなって。

だからお前の名前は――。

オマエノナマエハ《ハイノムスメ》。

ワタシタチノタイセツナ、アイスル――。

「うそ、だ……だってお父さんもお母さんも、ボクが嫌いじゃないか」

ふらり、と座り込んだボク。

思い出してしまった事が、心を深々と抉っていた。

「それは違うよ。色が死んだ日から名前を呼んでももらえなくて、色を『知っている』からこそ戸惑って最終的には拗ねた。ただそれだけの事。君だけが悪いわけじゃない」

じゃあ、何だ。あの『夫婦』――お父さんとお母さんがやたら冷たかったのは。冷たいと思っていた言動の原因は、ワケもわからず拗ねたボクのせい。ボクが悪かったんだ。

そりゃ、拗ねるばかりの子供なんてかわいくないよ。

愛せるわけがない。

当然じゃないか。

被害者ぶって……バカじゃないの？

「これで世界に『灰』が満ちた。よかったね」

につこり、とスノウ／オニキスは微笑む。

ボクがグツタリしているのを見て、なおそんなふうには笑えるんだと思っただちよつとムカつとした。しかも自分の仕事は終わったといわんばかりに、この場を立ち去ろうとしているんだから、ボクの怒りはぐんぐんと成長し、みるみるうちに膨れ上がる。

「それじゃ私、俺はもう行くな。そろそろ戻らなきゃ怒られるんだ」

スノウ／オニキスは右手でスカートの端をちよこんとつまみあげ、ようやく立ち上がったばかりのボクに向かって一礼する。その仕草は御伽噺に出てくるお姫様みたい。

「私、スノウ・ホワイトと俺、オニキス・ノワール」

その手が、ボクに向かって差し伸べられて。

「狭間の名を持つ『灰の娘』。私、俺は、君の行く末を祝福するよ」

くるり、と踊るように背を向けて、スノウ／オニキスは歩き出した。

「……一緒に行く人が、君だったらよかったのに」

小さく呟いた声。ボクはまた聞きそびれてしまった。スノウ／オニキスの姿はすぐに見えなくなつて、その場に残されたボクは思い出した事、忘れていた事を記憶に刻み付ける。

どうして忘れていたんだろう。これは『色が死ぬ』という事なのだろうか。

わからない事だらけだった。でも痛いほどの悪寒と恐怖は、ボクがそれを忘却していたという事がどれだけ恐ろしいかを教えてくれる。

思い出せた喜びと、忘れていた事への恐怖が混ざり合っていく。しばらくして『異変』に気が付いたガーネットとアマランスが駆

けつけて、スノウ／オニキスとの話を話して、ボクはそのまま意識を手放す事にした。

……とても疲れた日だった。

終章 アツシュノセカイ

あの『遺跡』での一件後、ボクの世界は大きく変わっていた。それはスノウ／オニキスが世界から奪って、そして返した色——『灰』のおかげなのかもしれない。

忘れていた事……思い出せた。

もしも『色を知る者』じゃなかったら、ガーネットと旅に出なかったら。きっとボクはささやかな大切な事さえ忘れたまま、楽しくも大切でもない日々を送って死んでいった。

想像するとシヤレにならない未来だった。

だから家出して、旅に出て少しはマシになったんじゃないかと思う。

そしてクリス。彼女との一件がボクに決意をくれた。彼女がいなかったら、蘇った記憶に耐えられたかわからない。彼女と同じ事になっていた可能性だって……あると思う。

ありがとう。小さな声で空に言葉を放った。

空に向けてなら、彼女の心に届くかもしれないって思っ

「よいしょと……」

ここ何日か寝泊りしていた場所を片付けつつ、ボクはその間にあった事を回想し、自分なりにイロイロと考えていた。まあ、大半が『自分が忘れていた事』についてだけど。

スノウ／オニキスとの会話から、何となくボクは思った。

人間から『神様』が奪ってしまった事って、言葉にするよりずっと大切で。

物凄くかけがえが無い存在だったんじゃないかって。

蘇らせようとしたら人間が壊れてしまうほど、大きくて大切なモノ。

そんな存在を無くしたからこそ人間はいつまでたっても『前』に進めないまま、何度も繰り返ししているんじゃないか。復讐としては、

そういう意図があつたんじゃないかつて。

これを復讐の手段として選んだ『神様』。

その人にこんな復讐の道を選ばせた『人間』。

どっちが悪いのかわからない。ガーネット達と出逢う前——つまり何も知らないまさにガキだった頃なら、とにかく『神様』を悪いといったたろう事は間違いないと思う。

どちらが本当に悪いか言い切れない、優柔不断なところを非難するだろう。その上で自分は『神様』が悪いと思う、そうに決まっている、と言い切るに違いない。

普通に想像できる辺りが悲しかった。ちよつと笑えたけど。

「さて、私もアマランスも準備はできてるよ」

「ボクはもうちよつと……って、本当にアマランスもついてくるの？」

「……嫌なら帰るが」

「嫌じゃないし、できれば一緒に行きたいなと思ってたくらいなんだけど……確か目的地って『町の中にある遺跡』だよ。ガーネットは平気だろうけど、アマランスはいいの？」

次の目的地は、ヴァーミリオンが見つけてくれた遺跡だ。町の中にあるから少し人の手が入ってしまったているけれど、望みがありそうな場所だつて連絡が来たらしい。

だからボクは少し心配だった。今更だけどアマランスは人間がかなり嫌いだし、町の中に在るとなれば遺跡に何度も通うとそれなりに注目されると思う。……大丈夫なのかな。

「露骨に顔には出さないから心配するな」

「そういう事じゃなくて……どうしても嫌なら無理しなくても」

「心配しなくても大丈夫だ。時と場合は選ぶ。ガーネットだけではどうにも心細い気もするからな。何より汝は精神的に落ち着けてないだろう。我の事より、己自身を心配しろ」

「そっか……うん、わかった。ありがとう、アマランス」

みたいな会話をしつつ荷物を纏める。

まあ、ボクの場合は櫛とか鏡とか絵本くらいしか、荷物らしい荷物は無いんだけど。

あ、ちゃんと着替えも持ってる。

野宿もあるって聞いてたし。

それらをさがさとカバンに詰め込み、ボクはガーネットのところに向かった。

二人はそれぞれ荷物を抱えている。食料とか寝る時に使う毛布とか。ボクが体格的にもうちよつと大人だったら、二人にばかり荷物を持たせなくてよかったのに。

せめて料理くらいは頑張らなきゃ。

三人は並んで森の中を歩く。

アマランスが少し後ろにいたから無理やり並ばせた。嫌そうな顔をしているワリに抵抗しないので、このまま近くの街道も歩こうと頭の中で作戦を練った。

ボクはガーネットやアマランスと旅を続ける。これはもう『家出』じゃなくなった。

人間が無くしてしまった『色』という概念を取り戻しつつ、その『色』という存在を消し去ろうとしているヤツを何が何でも止める、という目的を持ったボクの『旅』。

もしもスノウ／オニキスの『主人』に逢ったら文句を言おう。

いや殴ろう、絵本の角で。

テメーの勝手に人様の名前盗ってんじゃないやねー、って。相手にガキっぽいと思われようが何だろうが叫んで殴って引つかいて、絶対に『色』を消す事を止めさせてやる。

その時、木の根に足を引っ掛けて転びそうになった。両側からガシッと支えられる。

——アッシュ、前を見ないと転ぶよ。

ガーネットがボクの名前を呼んでくれた。

まだ『灰』は存在していた、とこっさり安心する。ああ、でもア
マランスは他人の事は全部ひっくるめて『汝』って呼んでる。相変
わらずって感じで、それにも安心した。

でもいつか、ボクの名前を呼んでくれたらいいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7617x/>

灰色の世界

2011年10月22日03時27分発行